

三疋田遺跡発掘調査報告

2008（平成 20）年 2 月

三重県埋蔵文化財センター

卷頭山頭



卷頭山頭

月

三重県多気郡多気町大字三でりは、古代久遠の身影を今に伝えるところとして知られています。またその中にそびえる城山の山頂には、塙宿や宿場である木造の重櫓で知られる平安時代創建の近長谷寺が併存するなど、歴史豊かなまちであります。

このたび成18年度道路改良事業(一)伊和田松原線にともない、発掘調査を実施しましたところ、道草で軒瓦や瓦で軒瓦をはじめ、多くの瓦等を確認する成り上げることが出来ました。この報告書はこうした古調査の成りをまとめたものです。本書がこの地域の歴史伊和の一部となれば幸いです。

発掘調査の実行にあたりましては、多気公民の皆々をはじめ関係各位の皆様の多大なご協力がありました。厚くお礼申し上げますとともに、今後とも本県での歴史保護行政にご理解とご協力をたまわりますようお願いいたします。

2008年2月

三重県沿岸歴史センター
所長 吉水 康夫

説 明

1. 本番は、三重県多気郡多気町木宇三丁目に所在する三重県道2号伊賀上野線にかかる報知橋である。
2. 本道路の調査は平成18年度道路改良事業（-）夢和乳崎松原線に伴い、三重県教育委員会が三重県界三整備部からの監督の執行委託を受けて実施した。
3. 調査は調査委託書を作成し、実務の手順書を作った。監修および報知橋作成は三重県岩瀬や伊賀センターが行った。本調査の監修は次の通りである。

| | |
|------|-----------------------|
| 調査担当 | 三重県教育委員会 |
| 調査担当 | 三重県岩瀬や伊賀センター |
| 調査担当 | 調査研究室Ⅰ課 三井 小渕 学 |
| 調査担当 | 調査研究室Ⅰ課 及伊 伊藤や彦 |
| 調査受託 | 株式会社 |
| 調査期間 | 平成18年5月16日～平成18年8月23日 |
| 調査面積 | 1,200m ² |
4. 調査にあたっては、以下のとおりをはじめ、三重県界三整備部、松原町議事堂所長業者等を担当課、多気町教育委員会からの協力を得た。
5. 三重県の作成業務は、三重県岩瀬や伊賀センター調査研究室Ⅰ課が行った。調査等および追跡の写真撮影は株式会社が、追跡の写真撮影は伊藤がおこなった。本番の監修・構築は伊藤が行った。
6. 既存の調査および報知橋の作成にあたっては、以下のとおりから有効なご教示を受けた。（以下、敬称略）

| |
|------------------------------|
| 藤澤英介・広瀬聰信・大庭良子（大阪府岩瀬や伊賀センター） |
| 鈴木英美子（財団法人愛知県岩瀬や伊賀センター） |
7. 本橋は三重県伊勢市立伊勢中学校VI系に属しており、本番でのみ花は立柱式を使用している。立柱式には斜角約6度30分である（平成12年きよみ科学院）。また立柱台は世界標準2000に基づいて設計している。
8. 本橋の調査および既存追跡は、三重県岩瀬や伊賀センターで実施している。

目 次

| | | | | |
|-----|-------------------------------|-------|------|--------|
| I | 前 言 | ・・・・・ | (伊藤) | ・・・ 1 |
| II | 巨費と環境 | ・・・・・ | (伊藤) | ・・・ 3 |
| III | 講本の結果 | ・・・・・ | (伊藤) | ・・・ 6 |
| IV | 二 章 運動の自然科学分析 (パリノ・サーヴェイ株式会社) | ・・・ | | 32 |
| V | 結 語 | ・・・・・ | (伊藤) | ・・・ 46 |

挿図目次

| | | | | | |
|------------------|---|----|------------------|--------------------------------|----|
| 第17 ^テ | 調査を担当する者 | 2 | 第14 ^テ | SD15白三 退鶴丸御津 | 17 |
| 第27 ^テ | 退鶴丸御津 | 4 | 第15 ^テ | SD10 ^テ 白山三 退鶴丸御津(1) | 18 |
| 第3 ^テ | 調査を担当する者 | 7 | 第16 ^テ | SD10 ^テ 白山三 退鶴丸御津(2) | 19 |
| 第4 ^テ | 調査を担当する者 | 7 | 第17 ^テ | SD10 ^テ 白山三 退鶴丸御津(1) | 20 |
| 第5 ^テ | 二重屋根の施設 | 8 | 第18 ^テ | SD10 ^テ 白山三 退鶴丸御津(2) | 22 |
| 第6 ^テ | 通構り手作 | 10 | 第19 ^テ | 第4層白三 退鶴丸御津(1) | 24 |
| 第7 ^テ | SD14 ^テ 手作、斯モキ | 11 | 第20 ^テ | 第4層白三 退鶴丸御津(2) | 25 |
| 第8 ^テ | SD10 ^テ 13 ^テ 手作、斯モキ | 12 | 第21 ^テ | セ会層白三 退鶴丸御津(1) | 26 |
| 第9 ^テ | SD10歇假柱、張波板、又透空、白三 仕事場 | 13 | 第22 ^テ | セ会層白三 退鶴丸御津(2) | 27 |
| 第10 ^テ | SD15・S217 ^テ 手作、斯モキ | 13 | 第23 ^テ | ミゼリ 退鶴の花巻 | 33 |
| 第11 ^テ | SA11・12 桁脚、ST18脚 ^テ 犀ハリ 通構り手作、 斯モキ、又透空 | 14 | 第24 ^テ | シホ試験桟板層柱状模式斯モキ | 33 |
| 第12 ^テ | SZ5 ^テ 手作、斯モキ、又透空 | 15 | 第25 ^テ | 階折手造定角頭 | 41 |
| 第13 ^テ | SD13・14 ^テ 退鶴丸御津 | 16 | 第26 ^テ | 地脚梁端部含金子の階層化 | 41 |

写 真 図 版 目 次

看頭字版 三月九號

| | | | | | |
|-------|------------------------------|----|--------|------------------|----|
| アリサ版1 | 全集(死から) | 49 | アリサ版6 | 自己通約① | 54 |
| アリサ版1 | 全集(死から) | 49 | アリサ版7 | 自己通約② | 55 |
| アリサ版2 | 全集上巻・下巻のぞむ(死から) | 50 | アリサ版8 | 自己通約③ | 56 |
| アリサ版2 | S T18 SA11・12(死から) | 50 | アリサ版9 | 自己通約④ | 57 |
| アリサ版3 | S D10 実業坐済(死から) | 51 | アリサ版10 | 自己通約⑤ | 58 |
| アリサ版3 | S D10・13 藩野半(死から) | 51 | アリサ版11 | 自己通約⑥ | 59 |
| アリサ版4 | 折敷(50) 日本伏済(死から) | 52 | アリサ版12 | 自己通約⑦ | 60 |
| アリサ版4 | 折敷(50) 日本伏済(死から) | 52 | アリサ版13 | 自己通約⑧ | 61 |
| アリサ版4 | 蓮華で御身丸(38) 日本伏済 | 52 | アリサ版14 | 自己通約⑨ | 62 |
| アリサ版4 | 蓮華で御身丸(37) 日本伏済 | 52 | アリサ版15 | 自己通約⑩ | 63 |
| アリサ版4 | 日本(39) 日本伏済 | 52 | アリサ版16 | 自己通約⑪ | 64 |
| アリサ版4 | 日本(91) 日本伏済 | 52 | アリサ版17 | 自己通約⑫ | 65 |
| アリサ版4 | 木版(51) 日本伏済 | 52 | アリサ版18 | 木版 | 66 |
| アリサ版4 | 戸納(48) 日本伏済 | 52 | アリサ版18 | 地獄経圖體活 | 66 |
| アリサ版5 | S D14 (A-B座) 日本断滅 | 53 | アリサ版19 | 木型地獄経活 | 67 |
| アリサ版5 | S D14 (C-D座) 日本断滅 | 53 | アリサ版20 | 木刻(1) | 68 |
| アリサ版5 | S D15 日本断滅(死から) | 53 | アリサ版21 | 木刻(2) | 69 |
| アリサ版5 | S Z5 四木枕日本伏済 | 53 | アリサ版22 | 木刻(3) | 70 |
| アリサ版5 | 飞龍騰雲日本伏済 | 53 | アリサ版23 | 木刻(4) | 71 |
| アリサ版5 | 添井和学折三唐ブロック版取説式 | 53 | アリサ版24 | 竹X藏ヨリ | 72 |
| アリサ版5 | 添井和学所蔵版三唐 | 53 | | | |

表 目 次

| | | | | | |
|-----|---------------|----|------|--------------|----|
| 第1手 | 道構・駒子 | 29 | 第6手 | 駒子般打端尾 | 41 |
| 第2手 | 道筋駒子(1) | 29 | 第7手 | 駒筋駒子合尾 | 41 |
| 第3手 | 道筋駒子(2) | 30 | 第8手 | 駒・駒走定端尾 | 41 |
| 第4手 | 道筋駒子(3) | 31 | 第9手 | せんの駒筋駒子定端尾 | 41 |
| 第5手 | 攻撃駒子(1) 戻認定端尾 | 41 | 第10手 | 日本本選の駒筋駒子定端尾 | 41 |

I 前言

1 調査に至る経過

一方、那覇道勢和毛川流域は、那覇市内と名茅町を結ぶ県道である。このうち、名茅町三ツ谷から柳原町を間はる県道が渋谷若に至り、渋谷若を間であり、渋谷若が本郷在地にあるため、渋谷（約100m）にバイパスが計画された。この計画路線下に三ツ谷遺跡が所在していることから、豊島で「センター」との協議が始められた。その後、まず遺跡の範囲を確認するため、平成17年度調査小委員会グループ（主唱）歴史研究会を担当者として範囲確認会を行った。

範宇 碳濃溝あたりを東安平地沖、0,000mのうち3,000mについて、合計11カ所のトレンチが事がされた。そのトレンチのうち、1カ所で二ヶ所が、3カ所で汎路跡が発見され、二伊伊・領乳習などの遺物が碳濃溝された。昌義でアーチセンターはこの範宇 碳濃溝の前頭から判断して、範宇 碳濃溝あたりのうち、1,200mについてこを走るにあたっては復讐招引が最も多であると答えた。これをうけて三重県第二整備部と復讐招引について協議をすねたが、現次長が「陥れなことにより、近畿1,200mについて二ヶ所を主導し、移動復讐をすることになった。なお、気候溝あたりについては、気候溝を北朝鮮か後醍醐(きつご)・鎌倉(かまくら)式を主にし、界隈の都督のもと、気候溝を追める方を導くとして、実際の通り清いをやめた。

2 も社財保護法等に関する諸手続

で、シロは、(昭和25年法律第214号) および三重県で、シロは、(昭和32年法律第72号) にかかる部類に属する。

- 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第1項
・平成18年4月10日付 練健第108号

三重県知事から三重県教育委員会教育長あて
「唐切の港蔵で内野色藏洋における二木工場
の運営手本」

- 三重県議会で「財政収支詳報第48号」第2項
・平成18年 4月14日付 表示第12-2-5号
三重県議会委員会幹事長から三重県議会まで
「議院の運営で財政収支詳報における二本立てに
ついて（速記）」
 - ・平成18年 4月14日付 表示第12-2-5号
三重県議会委員会幹事長から三重県議会で「財政収
支詳報第49号」第1項
 - 「財政収支詳報第49号」第1項
 - ・平成18年 5月7日付 表示第76号
三重県議会で「財政収支詳報第49号」第1項
三重県議会委員会幹事長について
 - 「財政収支詳報第49号」の報道について
 - 「財政収支詳報第100号」第2項
 - ・平成18年 8月23日付 表示 3-6号
三重県議会で「財政収支詳報第100号」第2項
三重県議会委員会幹事長から三重県議会委
員会幹事長まで
「財政収支詳報の見出し、誤字について（速記）」
 - ・平成18年 9月5日付 表示第12-4-6号
三重県議会委員会幹事長から三重県議会委
員会幹事長まで
「財政収支詳報の見出し、誤字について（速記）」

3 調査経過

事本御門は『成18年5月16日～『成18年8月23日』である。現地は高さ1m～2mの壁の上に旅宿道路を書きしている状況であった。御門平定の火災には車から火へと燃れる小河川があり、旅宿道路等が車輪で泥水に覆からずりかかって泥濘に囲まれるペリがひがっていた。

す機による「と」と「と」、「四葉作」を演じたのち、
る『貴時代後即』に登場する猪俣駒や『安時代後即』の
清、『世後即』までさかのぼるが極めてある『雪駒伏』
夢などが吟味された。また『安時代後即』の清夢が何
らは、五をはじめ多くの遺作が紹介した。さらに『五
月の瑞雲』を行った結果、『貴時代後即』前にさかの

ぼる操作三層を認めることが叶った。以上のような成りをあげ、現状調査は終了した。

なお、現地作戻にあたっては、莫多の落成工事にもかかわらず、神田三崎町をはじめ近隣の多くの人々の協力を得た。ふから感謝したい。

4 調査日誌（抄）

- 5月31日 重機による手引除草開始。

6月16日 強制締門開始。

6月20日 ST18等伏せベリを締門。

6月21日 SD10締門。Eで軒丸。居間で軒丸。瓦上。

6月22日 ST18等伏せベリの前半部分を締門。
2列にわたっていることを確認。

6月30日 SD10の退橋墜壘。進路で軒丸。長さ2m超の木柱、折衝等多数を締門。

7月6日 SD14・SD15を締門。

7月7日 SD14墜壘時に、第4層から下瀬代等の進占状態の良しが悪と木柱を締門。

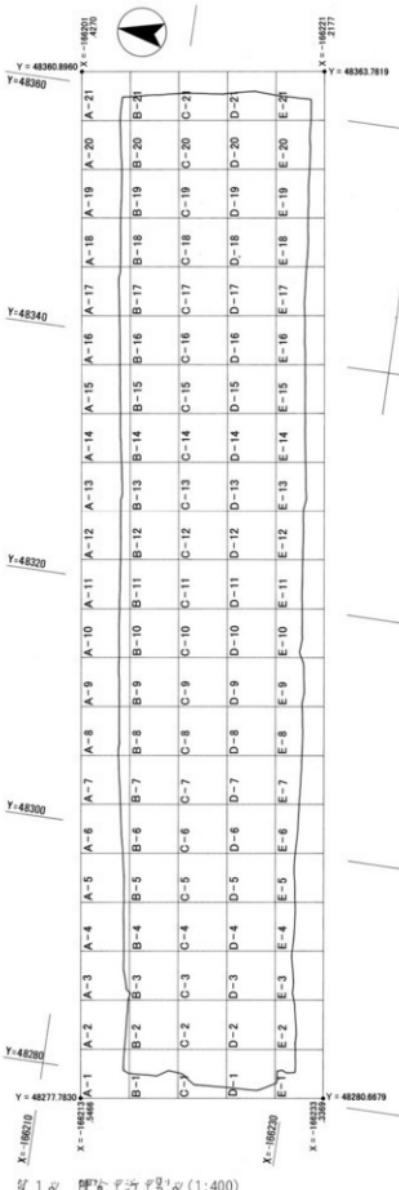
7月10日 SD15最下層から瓦器塙を締門。11世紀の範囲におさまるか。

7月21日 ヨネ生課を完成。

7月24日 全景写真撮影。

7月25日 7層退橋手引、第4層の7層に岸作2層の瓦を確認。

7月31日 現場調査終了。



II 位置と環境

1 地理的環境

三びり進歩（1）は三重県名張郡多気町字三でに所を有する。

三重県と奈良県の県境である高見川に流れを有する櫛ヶ川は、木構造城に沿って三重県のはばれ川を東流し、伊勢湾に注ぐ県内有数の河川である。この流域においては河川の河原に植え野が開拓するが、この流域では櫛ヶ川の木構造城によって形成された河岸堤防の堤防が有効である。現在の名張郡多気町字三でに・かざり・想の名残が開拓するのはこの河岸堤防上である。堤防の車道にはまき土の車道である橋梁200~300mの浅草下橋が東流に亘る。浅草下橋からは櫛ヶ川にかかる多くの小河川が東流し、浅草下橋に谷を形成する。現在これら谷の谷頭部はせき止められ、西河川、鬼打水河、上河、下河といった渓谷となっている。小河川は堤防上に決して小規模な跡伏溝を形成し、また河岸堤防を廻す。三びり進歩は、浅草下橋の谷に開拓する櫛ヶ川河岸の河岸堤防上に小河川が形成した跡伏溝の空窓に位置する。

地勢は豊澤谷背丘・愛摩林沖にあたる。この間にリスルはほとんどなく、スギ・ヒノキの二木林がひろがっており、周辺の林を流水などにわずかにクスノキやムクノキなどの生木が残されているにすぎない。下流河谷や河床ではえび栽培が広く行われており、河床部ではベリ芋田のほかツクネイモの河床であるアサガイモの栽培が盛んである。芋田の周辺にはヒメジョオン・オオアレチノギク・ヨモギ・オオバコ・イヌガラシ・タデ・スギナ・カゼクサ・チガヤなどの地物のほか、幾種地物も見られる。

2 歴史的環境

古器時代

櫛ヶ川の河岸に位置する櫛ヶ川河岸の上の進歩（2）ではチャート製のナイフ形の器が出土しているほか、櫛ヶ川に注ぐ各条川流域の上世の進歩（3）

でもナイフ形の器が出土されている。しかしいずれの進歩も進歩の自己点数は少なく、自衛進歩など當時の歴史的な進歩が主とする櫛ヶ川流域とはお墨跡である。

縄文時代

三びり進歩附近で特に注目されるのは櫛ヶ川から伊勢の本村である。三びり進歩のまろにあたる房倉進歩（4）では櫛ヶ川の奥にむづづけられる三器が出土している。またかざり進歩（5）・木原港進歩（6）・瀬戸進歩（7）では特徴的器や有る実器、木製火炎器などが出土している。河原になると、櫛ヶ川河岸の瀬ノ木進歩（8）・御原原付近進歩（9）・瀬戸進歩（10）や、瀬戸の木原港進歩、櫛ヶ川河岸の木原付近・房倉進歩といった河岸上に進歩が集中する。河原になると、横幅が河原となるが、やや上流のアカリ・森道付近ではまとまと三器の自己をみている。河原になると新種木原付近（11）が櫛ヶ川河岸の木原付近に、三木庄進歩（12）が櫛ヶ川河岸の木原付近に形成される。河原では木原港進歩で三器複数が検出されている。

弥生時代

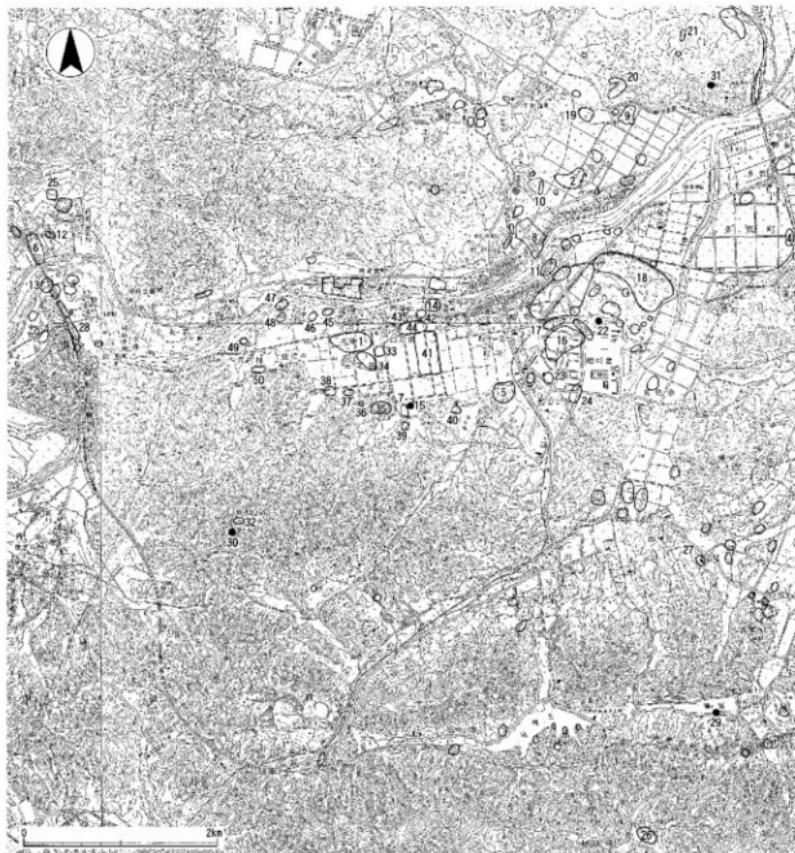
季三當代にみると、三器が検出される進歩は苦口增加するが、三びり進歩附近で規模の大きな複数はまだ確認されていない。

季三當代河原では瀬戸進歩で河原の堅六辻島が、瀬ノ木進歩でちび唐舟器が検出されている。櫛ヶ川をさかのぼって、芦ノ木進歩（13）は櫛ヶ川の進歩である。堅六辻島とちび唐舟器の埋め込み唐舟器が検出され、耳舟系の純正を示した三器が出土している。また、堀田高塚城跡付近（14）では、季三當代河原から河原付近にかけての三器が出土している。

なお、多気町かざりの丘發掘（15）から昭和19（1944）年調査が出土したとのことであるが、現在調査は行方不明で、河原・木原も残されていない。

古漢時代

櫛ヶ川の河岸に位置する櫛ヶ川河岸の上の進歩（2）ではチャート製のナイフ形の器が出土しているほか、櫛ヶ川に注ぐ各条川流域の上世の進歩（3）



| | | | |
|----------|---------------|---------------------|-----------|
| 1 二荒田遺跡 | 14 相高校校庭跡遺跡 | 27 四神田麻寺 (佐奈山高寺) | 38 池ノ下遺跡 |
| 2 上寺遺跡 | 15 四荒田銅鐸出土伝承地 | 39 夕部遺跡 | 39 夕部遺跡 |
| 3 上世古遺跡 | 16 明氣古墳群 | 40 枯木沢河遺跡 | 40 枯木沢河遺跡 |
| 4 牧倉遺跡 | 17 立岡山古墳群 | 41 四足田遺跡 | 41 四足田遺跡 |
| 5 牛山遺跡 | 18 黒田山古墳群 | 42 井戸坂遺跡 | 42 井戸坂遺跡 |
| 6 大原城遺跡 | 19 尾だけ古墳群 | 43 ワキ田遺跡 | 43 ワキ田遺跡 |
| 7 高畠遺跡 | 20 中万大谷古墳群 | 44 南古江遺跡 | 44 南古江遺跡 |
| 8 鴻ノ木遺跡 | 21 やつて古墳群 | 45 椿垣内遺跡 | 45 椿垣内遺跡 |
| 9 射原垣内遺跡 | 22 石塚谷古墳 | 46 大隅城遺跡 | 46 大隅城遺跡 |
| 10 鰐穴遺跡 | 23 中尾古窯跡 | 47 北堀内遺跡 | 47 北堀内遺跡 |
| 11 新徳寺遺跡 | 24 明氣古窯跡 | 48 西大木内遺跡 | 48 西大木内遺跡 |
| 12 王子庄遺跡 | 25 御麻生庵廬寺 | 49 宮ノ木遺跡 | 49 宮ノ木遺跡 |
| 13 花ノ木遺跡 | 26 連雀麻寺寺 | 50 山下遺跡 | 50 山下遺跡 |

第28回 遺跡分布図(1:50,000)

た丘陵沖に甲第（16）・三ノ里（17）・里見（18）などの河段群がみられ、摩利川の岸の松原下流段北部にも丘だけ（19）・リカト谷（20）・やつで（21）若のう河段群が存在する。その河段形にはり瀬とろ瀬があり、堀川序曲についてはさき本内河谷と横穴式谷が認められる。この冲積の河で範囲された河は少なくないが、その中で6世紀傍流の河谷（22）は銀葉谷のトモヤ郡が鎧金を守した結果が印記しており注目される。

その後時代の集落の構型は摩利川中游ではこれまでに明らかになっていない。摩利川の岸では伊集屋下連寺で前御の、上毛連寺で後御の野穴谷島をそれぞれ検討している。なお、6世紀頃からさくら山発達（23）・甲第の発達（24）で須恵器窯の焼成が開始している。

丹波・奈良時代

飛鳥・奈良時代になると、河川の改修する道跡が歴史されるようになる。摩利川中游では四脚三輪谷（25）がしられる。摩利川式導引道が軒を直し、それに従み合う手直が軒が採取されており、軒先は手直頭にさかのぼると考えられる。奈良町では達磨源庵（26）、御神ノ庵（名古屋庵）（27）などで手直の跡を見る。同時に、瓦葺の町をもまた達磨庵（28）である。近畿の瓦葺に伴い瓦堅調がされた奈良町の瓦窯跡（29）と達磨源庵、御神ノ庵の関係が明らかとなっている。また、奈良に、瓦谷連寺（那珂川上流）（30）と達磨源庵、御神ノ庵の関係も考察されている。

奈良時代の集落としては、野穴谷島や野辺村集落が遼空連寺・上毛連寺で検討されているが、小規模な集落はこれまで確認されていない。

ところで、摩利川の渓から河にかけては、ハリの久の河谷が認められる冲積である。摩利川沿寺の甲第（注1）では、現在の木字三ノ里はで軸に記される名を都御所第十六条三ノ里に付記するとしくから増幅してきた。しかし、今も遼寺がいつまで生存されたのか、どう判断的にはまだ明らかにされていない。

近畿時代

9世紀の始め、三ノ里を含む摩利川の流域の水系の一部は近畿として京都からも監視される。いわゆる川合辻・木代君である。さらに、仁和元（885）には近長谷（30）が記述される。その木造三重櫻宮（31）は宇摩守御の街とされ、木塔守す木や御門となっている。同じく木の手で堤防をうけている『近長谷木資記帳』には、麻辻の私族・毛利豪族・奈良守御などの「名」や、麻辻沖積の地理的状況が記され、9世紀代の御の名を都をつくとした沖積の状況が歴史できる。特に宇摩櫻の木ノ藤には三ノ里・麻辻の木ノ藤についての記述が認められ、これをもとに當時の麻辻の地理的状況の復元も試みられている（注2）。

さて、三ノ里遼寺の東、4km、現在の名古屋市守口付近には三ノ里源庵（32）の跡地が存在する。また付近の御伊伊豆には9世紀代後御の御舟2艘が現存する。これらのことから、守口付近に9世紀代の後御、源氏・氏氏氏が居たしていた可能性が指摘されている。

平安朝

平安になると、手直頭が河に付く。三ノ里の木ノ藤の木頭として木の手をもたらす木をもたらす木（33）、木の手守御の木行が根拠地をもいたといわれる近長谷（34）などである。いずれも木頭から車之御の御門頭である14世紀半ばの表記と見えられている。

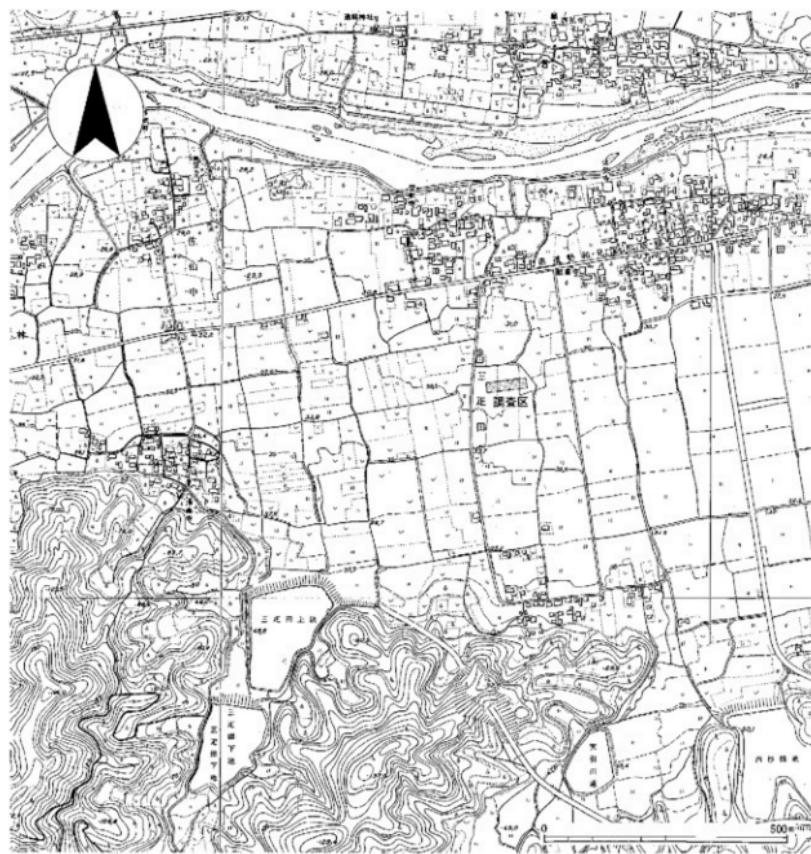
三ノ里遼寺・近畿の水系についてで軸から見れば、承永3（1344）年の「木伊守法委布で書翰失記」に柳井郡の三ノ里・守崎等の水名がみえ、これが法委布頭であるとされる。承永11（1439）年以降の記録である「追跡役所残卷」には三ノ里をふくむ11村に付書が代官をおいて付書を主配していたことが記されている。

なお、現在の三ノ里の集落を東北に見て伊勢守街道がある。三ノ里集落から東へ1.5kmの沖積は伊勢の集落がある。伊勢守街道が摩利川を渡る沖積に形成された官署町であり、伊勢守街道と伊勢守街道はここで交差している。

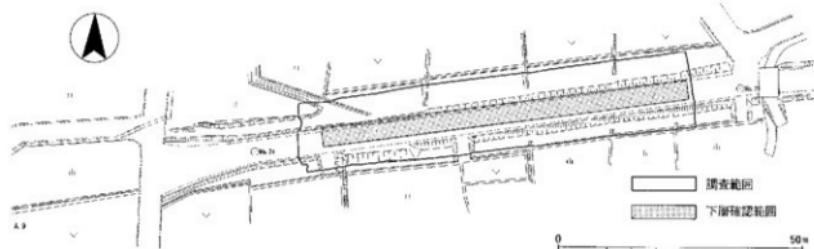
〔註〕

(1) 岩倉具雄「摩利川と、その流域の久」（『伊勢の歴史学』岩倉具雄編、岩倉具雄、1958）ほか

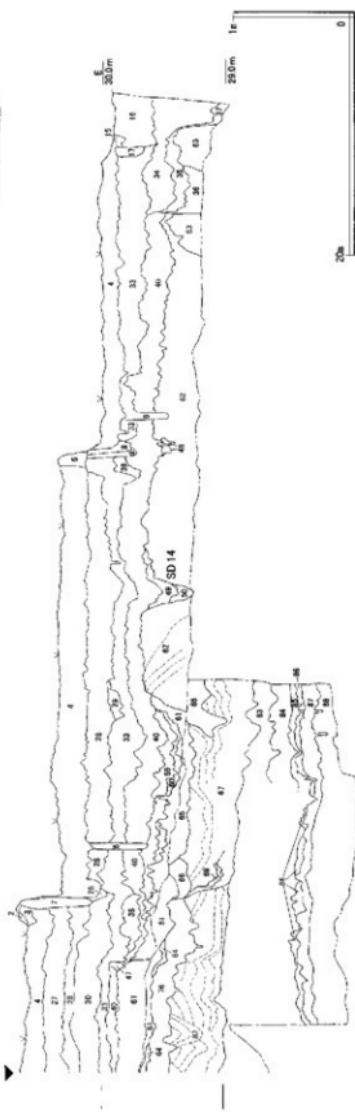
(2) 佐野和也「伊三郎の三ノ里御門について」（『奈良歴史資料館研究会』、2007）



第38 四方子町附近地形 (1:10,000)

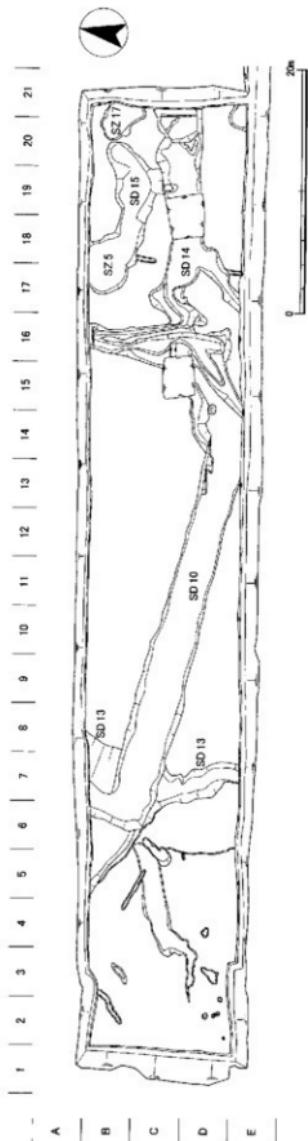


第48 四方子町附近 (1:1,000)



第5章 河間二層底剖面(縮1:40, 模1:200)

| | | | | | |
|--------------------------------------|--|--|--|--|-------------------------------------|
| 1 | 砂礫を含む灰色土 7.5V1/1 (湿土) | 35 | 砂礫 (φ ~6 mm) を極端に多く含む灰灰黑色土 7.5V5/2 (SD15・SE18) | 74 | 腐植物を多く含む灰灰黑色土 10V6/1 |
| 2 | 砂礫を含む灰色土 7.5V1/1 (耕土層) | 36 | 砂礫 (φ ~6 mm) と細砂を多く含む灰灰黑色土 7.5V5/2 | 75 | 腐植物を多く含む灰灰黑色土 2.5V6/2 |
| 3 | 円柱 (φ ~13 mm) を含む灰灰黑色土 7.5V1/1 (耕土層) | 37 | 砂礫を含む灰灰黑色土 2.5V4/2 | 76 | 泥炭を含む灰灰黑色土 2.5V4/2 |
| 4 | 砂礫 (φ ~2 mm) を含む灰灰黑色土 2.5V5/2 (耕土層) | 38 | 砂礫を含む灰灰黑色土 2.5V5/2 | 77 | 腐植物を多く含む灰灰黑色土 2.5V5/1 |
| 5 | 砂礫 (φ ~2 mm) 脱離 (φ ~6 mm) を含む灰灰黑色土 2.5V4/2 (耕土層) | 39 | 砂礫 (φ ~15 mm) 黒じり灰灰黑色土 2.5V4/3 | 78 | 腐植物を多く含む灰灰黑色土 2.5V5/1 |
| 6 | 砂礫を含むオーブ土 5V4/2 (耕土層石垣土) | 40 | 砂礫 (φ ~6 mm) 黒じり灰灰黑色土 2.5V3/2 | 79 | 砂礫層 |
| 7 | 砂礫 (φ ~6 mm) を含む灰灰黑色土 2.5V5/2 (耕土層石垣土) | 41 | 砂礫 (φ ~6 mm) 黒じり灰灰黑色土 2.5V4/2 | 80 | 腐植物を多く含む灰灰黑色土 10V4/1 (テミナ) |
| 8 | 砂礫 (φ ~10 mm) 黒じり灰灰黑色土 2.5V5/2 (耕土層石垣土) | 42 | 砂礫 (φ ~6 mm) 黒じり灰灰黑色土 2.5V6/2 | 81 | 砂礫 (φ ~8 mm) 厚物を含む灰白色土 10V7/1 (テミナ) |
| 9 | 砂礫 (φ ~6 mm) 混じり灰灰黑色土 2.5V5/2 (耕土層石垣土) | 43 | 砂礫 (φ ~4 mm) 多く含むオーブ黒色土 5V3/2 (SD10) | 82 | 灰白色地帯 |
| 10 | 砂礫 (φ ~6 mm) を含むオーブ黒色土 7.5V5/2 (耕田造成土) | 44 | 砂礫 (φ ~8 mm) 黒じり灰灰黑色土 2.5V6/1 (厚物の層あり) | 83 | 腐植物を含む灰灰黑色土 2.5V5/1 |
| 11 | 砂礫 (φ ~6 mm) 混じり灰灰黑色土 7.5V5/2 (耕田造成土) | 45 | オーブ黒色土 5V5/1 (SD10) | 84 | シルト混ざり灰白色土 (φ ~8 mm) 10V7/1 |
| 12 | 砂礫 (φ ~20 mm) を含むオーブ黒色土 10V5/2 (耕田造成土) | 46 | 砂礫 (φ ~8 mm) 黒じり灰灰黑色土 5V4/1 (SD10) | 85 | オーブ黒色土 5V5/1 (下層の粘土ブロック含む土層層) |
| 13 | 砂礫 (φ ~30 mm) を含むオーブ黒色土 10V5/2 (耕田造成土) | 47 | 砂礫 (φ ~3 mm) 混ざり灰灰黑色土 5V4/1 (SD10) | 86 | 水面面で、足跡を抽出 |
| 14 | 灰白色地帯 (φ ~6 mm) 7.5V7/2 (耕田造成土) | 48 | 砂礫 (φ ~8 mm) 混ざり灰灰黑色土 2.5V4/2 (厚物の層) | 87 | オーブ黒色土 5V3/1 |
| 15 | 砂礫 (φ ~2 mm) 混じりオーブ黒色土 7.5V3/1 (耕田造成土) | 49 | 砂礫 (φ ~3 mm) 黒じり黄灰黑色土 2.5V6/1 (厚物の層) | 88 | オーブ黒色土 5V3/1 |
| 16 | 砂礫 (φ ~2 mm) 混じりオーブ黒色土 7.5V3/1 (耕田造成土) | 50 | 砂礫 (φ ~6 mm) 黑じり灰灰黑色土 5V3/2 (SD14) | 89 | 砂礫 (φ ~8 mm) 黒ざり灰灰黑色土 2.5V4/2 |
| 17 | 砂礫 (φ ~6 mm) 混じりオーブ黒色土 7.5V4/3 (耕田造成土) | 51 | 砂礫 (φ ~4 mm) 混ざり灰灰黑色土 6G3/1 (SD13) | 90 | 砂礫 (φ ~7 mm) シルト混ざり灰灰黑色土 5V6/1 (往古) |
| 18 | 砂礫を含む灰色土 10V5/1 (耕田造成土) | 52 | 砂礫 (φ ~8 mm) 混ざり白灰黑色土 2.5V7/1 | 91 | 砂礫 (φ ~8 mm) 混ざり白灰黑色土 2.5V6/4 |
| 19 | 砂礫を含む灰色土 7.5V4/3 (耕田造成土) | 53 | 砂礫 (φ ~8 mm) と腐植物混ざり灰灰黑色土 2.5V7/1 (SD13) | 92 | 砂礫 (φ ~8 mm) 混ざりオーブ黒色土 5V5/2 |
| — | 砂礫を含む灰色土 7.5V4/3 (耕田造成土) | 54 | 砂礫 (φ ~8 mm) と腐植物混ざり灰灰黑色土 2.5V7/2 (SD13) | 93 | 砂礫 (φ ~8 mm) 混ざり灰灰黑色土 2.5V7/1 |
| 20 | (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 55 | 砂礫 (φ ~8 mm) 混ざり灰灰黑色土 7.5V7/1 (SD13) | 94 | シルト混ざり灰灰黑色土 2.5V7/2 |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 56 | 砂礫 (φ ~8 mm) と腐植物混ざり灰灰黑色土 5V7/2 (SD13) | 95 | シルト質灰灰黑色土 2.5V6/4 (洗水砂礫層、テミナ) | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 57 | 砂礫 (φ ~8 mm) 混ざり灰灰黑色土 5V6/1 (SD13) | 96 | シルト質灰灰黑色土 2.5V6/4 (往古) | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 58 | 砂礫 (φ ~8 mm) と腐植物混ざり灰灰黑色土 2.5V7/2 (SD13) | 97 | 砂礫 (φ ~6 mm) 全層に食いシルト質オーブ灰灰黑色土 2.5V6/4 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 59 | 砂礫 (φ ~8 mm) 混じり灰灰黑色土 2.5V7/2 (SD13) | 98 | 砂礫 (φ ~6 mm) 幅広に含むシルト質灰灰黑色土 2.5V7/3 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 60 | 砂礫 (φ ~8 mm) 混じりオーブ灰灰黑色土 10V4/2 | 99 | 砂礫 (φ ~8 mm) 混ざり灰灰黑色土 (φ ~8 mm) 10V7/1 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 61 | シルトを含む灰灰黑色土 5V3/3 | 100 | シルト質灰灰黑色土 (φ ~8 mm) 10V7/1 (洗水砂礫層) | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 62 | 砂礫 (φ ~6 mm) 混じり灰灰黑色土 5V7/1 | 101 | シルト質灰灰黑色土 2.5V6/1 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 63 | 砂礫 (φ ~6 mm) 混ざり砂礫層 | 102 | に含む灰灰黑色土 10V7/2 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 64 | 腐植物を含む灰灰黑色土 2.5V6/2 | 103 | シルト質灰灰黑色土 2.5V7/2 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 65 | 腐植物を含む灰灰黑色土 2.5V7/1 | 104 | に含む灰灰黑色土 10V7/4 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 66 | 腐植物含むシルト質オーブ黒色土 5V6/1 | 105 | シルト質灰灰黑色土 2.5V7/2 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 67 | 洗水砂礫層 | 106 | 泥質層 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 68 | 腐植物を含む灰灰黑色土 2.5V7/3 | 107 | シルト質灰灰黑色土 10V7/2 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 69 | 腐植物を含む灰灰黑色土 10V5/1 | 108 | シルト質灰灰黑色土 2.5V7/3 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 70 | 日光砂層 | 109 | シルト質灰灰黑色土 2.5V5/3 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 71 | 砂礫 (φ ~6 mm) と腐植物を多く含む灰灰黑色土 10V5/1 | 110 | 砂礫 (φ ~4 mm) 混ざり黄褐色土 2.5V5/4 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 72 | 砂礫 (φ ~6 mm) 混じり灰灰黑色土 5V4/2 | 111 | 砂礫 (φ ~6 mm) 多く含むシルト質灰灰黑色土 2.5V3/3 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 73 | 灰白色地帯 (φ ~15 mm) 5V8/2 (テミナ) | 112 | 砂礫 (φ ~6 mm) 多く含むシルト質灰灰黑色土 2.5V3/3 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 74 | SD15・SE17 と同時期の遺構 | 113 | 砂礫層で、足跡を抽出 | |
| (砂礫) 混じり砂礫 (φ ~80 mm) と砂礫 (φ ~10 mm) | 75 | | 114 | 灰白色地帯 (φ ~6 mm) 10V5/1 | |



第6図 退歩階段 (1:400)

竪劈状部 S T18 (♂型斧跡か)、三弔 S Z 5 (近世か)などである。このほか、渕をのせ从から先に虎脚する後代後跡 S D13 (♂後代後跡)、S D14 (♂後代後跡)を検出している。大きくなれば渕をえ2/3を示める? 汎跡も退構とできようが、まだ月ですでに報告しておりここではやわらい。なお、渕をのせ部の一部には第8層(男戸脇)上手に退構が存在していた可能性があった。しかし現地では先から先に虎脚形を示すと同時に、先から先に虎脚形を示しており、退構検出は希望のない部分の大きさであった。このため退構が存在しても、検出できない可能性がある。

(2) 古渕をのせ跡

1層構造において、♀透溝路の下層に二層に渡るが認められた(まだ層片第6層・第3まで86層)。二層断面の構造では部の跡のが複数ある型式も確認された。また♀透溝路の端頭、脇からイネ底盤等が検出され、既X歳年乳塊影により脇の均更地と粗曇構造が認められた。こうした部の端頭は、他の層作跡が行われていた可能性があることを示唆する。この脇の部については、透溝からは確定できない。この脇の部の脇(第3まで87層)はテフラ分析ならびに♀代理窓の端頭、7300-7400calBPの部が見えられている。二層の第4層は♂後代後跡に接続する♀透溝路であるので、この間とをつなぐえない。この脇が季後代以降の部であるならば、三式の透溝の脇には季後代から後代には直線が虎脚していったとを考えられる。

(3) 古後退構

後代後跡としては、上述した第4層を基とす汎跡がまず挙げられる。また♀透溝路 S D13・14も、大きくなればこの汎跡の最前部を示すものである。第8層(?)で退構は検出されていないが、ローリングをほとんど受けていない透溝が汎跡から出していることから、脇辺に♂後代の集落が存在していた可能性はある。

S D13(第6図) 単純に延びる♀透溝路である。先端・脇辺は渕をえと延び、検出長は12mである。SD10に印される。第2は基部的に砂礫混ざりの場所脇と砂礫混ざりの場所を示す。単純にレンズ

次に堆積する状況を示す。島地丘陵では渓谷の底には濁流がなく、丘陵に下りる土砂や砂礫が堆積した。このうち、本村2窟について堆積実験を行ったところ、コナラ丘陵アカガシ丘陵の根付であった。そこから、三伊櫛（2～4）や須恵器灰瓦（5）、器（6）若く、6世紀後半までに堆積した遺物が出土した。6世紀後半までに堆積した遺物であるとを考えられる。

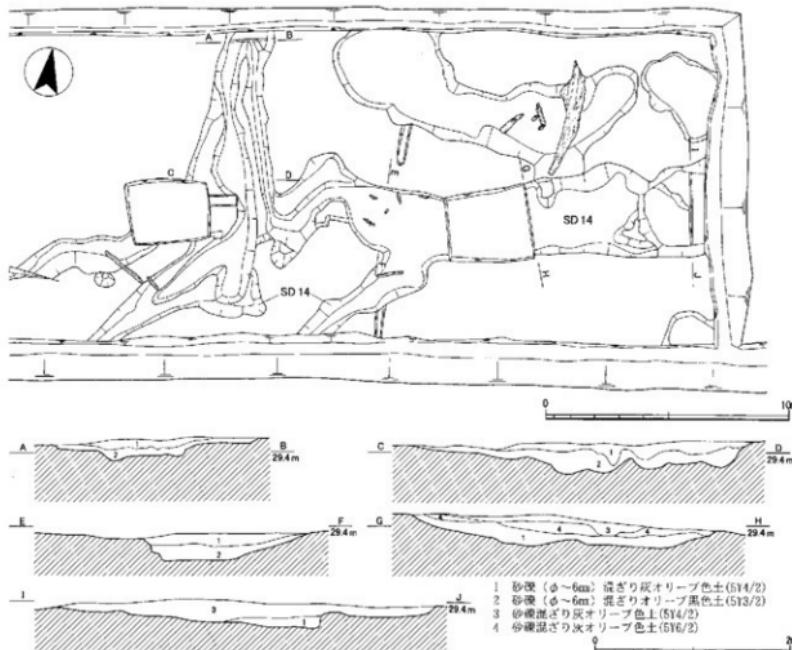
S D14（第7図） 矢張りかにむがるり然渓谷である。中段・上段と矢張りは渓谷を外へと傾く。谷底は砂礫混ざりの砂オリーブ色（7）が2～3層にわたってラミナ状に堆積する様子を示し、渓谷のあつたことがわかる。遺物は須恵器灰瓦（10）や三伊櫛（8・9）が出土した。遺物から6世紀後半には堆積したと見てよいだろう。

（4）古代

古代でも飛鳥時代から奈良時代に亘する遺物は多く含蓄から一定量出土しているが、遺構としては検出されなかつた。今後検出した遺構では古代の遺構は6世紀後半～7世紀に亘する。

このうち、SD10は砂礫の渓谷で、渓谷をある程度無視して構築された可能性が高く、また丘陵も立ることから、そのあたりにおいてもっとも古くされる。

S D15（第10図） 游泳遺構である。丸をS Z 5に埋られ、丸をS Z 17に接する。渓谷には、5m近い砂礫が噴きだわる。この砂礫はSD15の遺物ではなく、7世紀の遺構の壁である第4層の遺物と見えるほうが自然である。出土した遺物は極めて少ないが、6世紀後半～7世紀のものと思われる骨器・茶

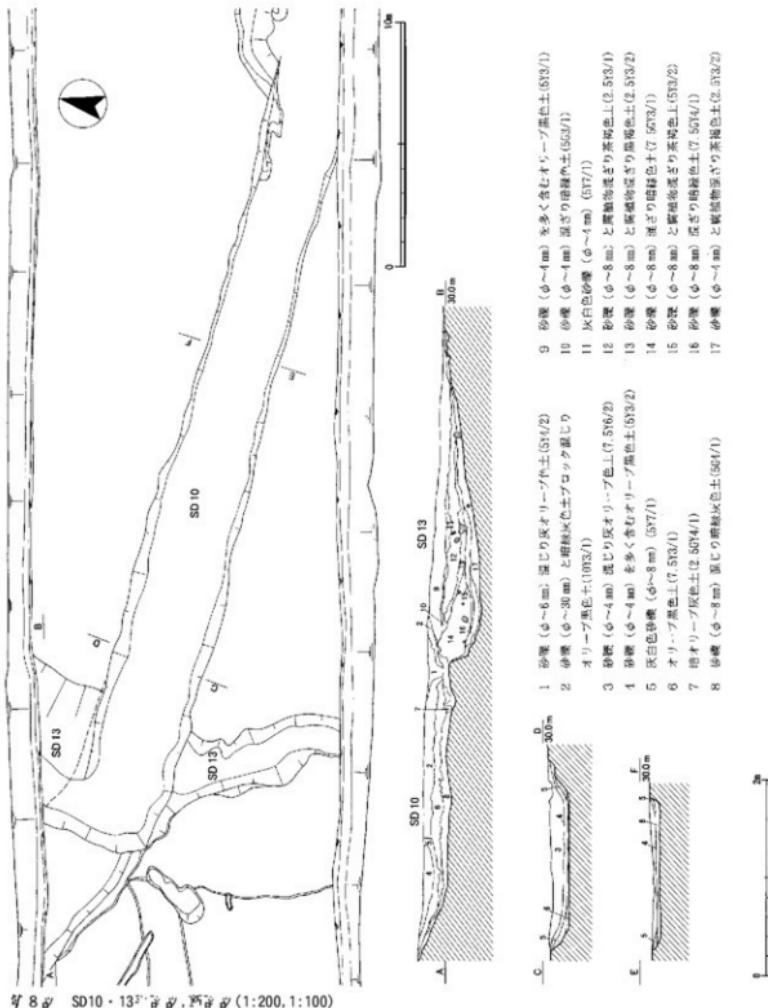


第7図 SD14の位置、断面図(1:200, 1:50)

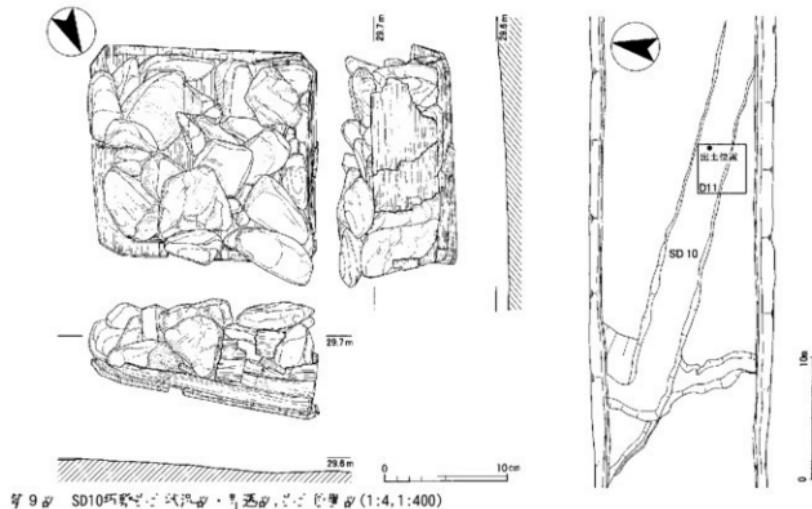
塊(13)や瓦器塊(14)がE面にしている。

S D 10 (第8図) 溝である。北西側・東北側は渕を下へと延び、幅員長は30mである。断面は逆V形をする。ほぼ直線で、延長約10mをしめす。B 6付近には土塗抹跡による高さ0.9mの落ち込みがあり、これはこの落ち込みを境に上段と下

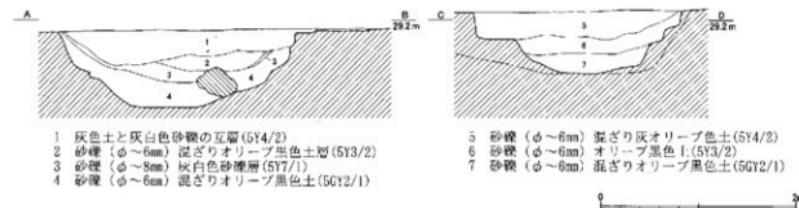
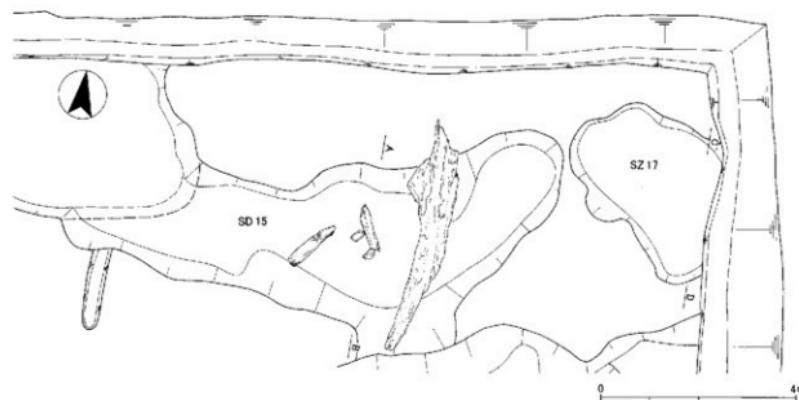
段と分かれる。溝はこの上段から下段まで通じて存在するが、溝底の高さは上段30m、下段29.5mと0.5mの差があり、溝の途中で落差が存在していると考えられる。壁面は基本的に2層であるが、確かに5層に分層されるのである。上層は砂礫混じりの灰オリーブ色であるが、下層にラミナ若



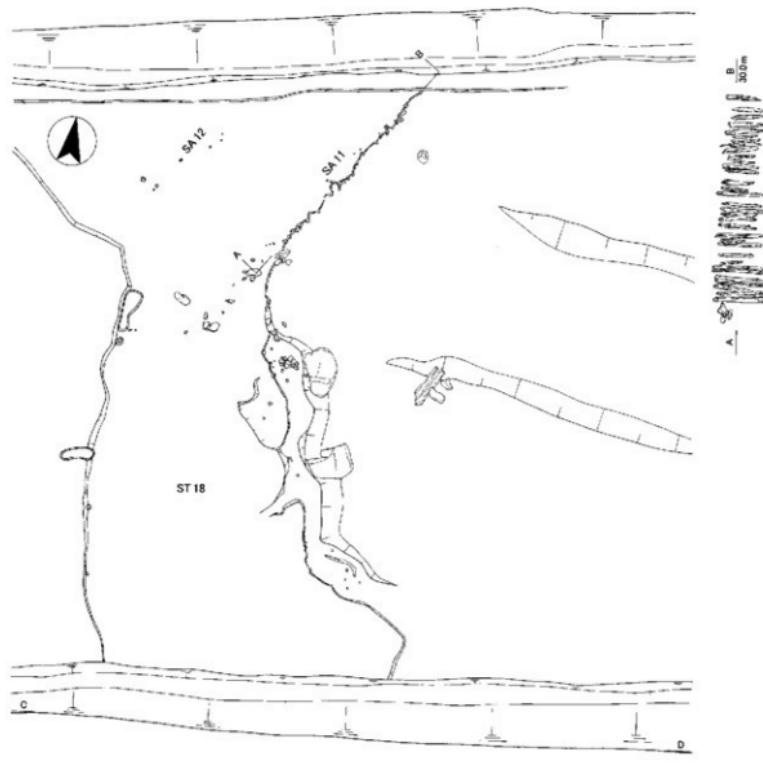
第8図 SD 10・13断面図 (1:200, 1:100)



9B SD10断面とSD11断面 (1:4, 1:400)



10B SD15・SZ17断面 (1:100, 1:50)



- C
- | | |
|--|---|
| 1. 砂礫を含む灰色土(7.5Y4/1) | 8. 砂礫(φ~8mm)と暗緑灰色上ブロック混じり黒褐色土(2.5I3/2) |
| 2. 砂礫を含む灰色土(5Y4/1) | 9. 砂礫(φ~4mm)混じりオリーブ褐色土(5Y3/2) |
| 3. 砂礫(φ~6mm) 混じり灰オーリーブ色土(5Y4/2) | 10. 砂礫(φ~4mm) 混じり黒褐色土(10Y3/1) |
| 4. 砂礫(φ~6mm) を含む灰色土(7.5Y5/1)～砂礫 (φ~8mm) 混じりシルト質粘灰黄色土(2.5Y4/2) | 11. 砂礫(φ~4mm) 混じりオリーブ褐色土(2.5I2/2) |
| 5. 砂礫(φ~8mm) を多く含むオリーブ黒色土(5Y3/2) | 12. 砂礫(φ~8mm) 混じりオリーブ灰色土(2.5G15/1) |
| ～砂礫(φ~8mm) を多く含む暗灰黄色土(2.5Y4/2) | 13. 円礫と砂礫(φ~8mm) を含む灰色土(5Y5/1) |
| 6. 砂礫(φ~4mm) を多く含む灰オーリーブ色土(5Y4/2) | 14. 円礫(φ~12mm) を多量に充填する灰白色砂礫(10Y1/8) |
| ～砂礫(φ~4mm) 混じり暗灰黄色土(2.5Y4/2) | 15. 砂礫(φ~50~100mm) と砂礫(φ~8mm) 混じり暗灰黄色土(2.5I4/2) |
| 7. 砂礫(φ~8mm) を多く含む黄灰色土(2.5Y4/1) | 16. 砂礫(φ~6mm) 混じり灰オーリーブ色土(5Y6/2) |

0 4m

写11 β SA11・12 β SA12 ST18用写 4 β 4 β , 5 β 5 β , 6 β 6 β , 7 β 7 β (1:100)

の状況は認められない。[△] 肩は粘性が強いオリーブ色である。砂をほとんど含まないことから、[△] 沈没状況を想定できる。遺物は上層から多く出土し、下層では少ない。上層と△肩の遺物を比べると大きな陶器片は認められず、墨印等それほど墨印を残すに埋没した状況が示すことができる。[△] 肩からは[△] 伊賀(20~30)、[△] 魚沼(茶碗)(31~33)、[△] 遺器(35)、[△] 木器(36~47)、[△] 木器(48~51)などが出土した。また△肩からは、[△] 伊賀(52~72)、[△] 魚沼(茶碗・鉢)(75~87)、[△] 遺器(73~74)、[△] 木器(89~101)などが出土した。[△] 魚沼(茶碗)の年代観からすると、12世紀末ばのものである。遺物のうちD11グリッドで△肩した折敷(50)は蛇腹的な△肩状況を示す(第9図)。遺物の検出レベルは△肩で、29.73m、[△] まで29.63mで、[△] 肩の△肩に至るオリーブ色土壌から検出された。底盤は済事から4~7cm剥いた状態である。折敷の△には径5~7cmの便器が丸洗されていた。これら便器に墨印などは認められなかった。また便器以外には△肩は認められなかった。

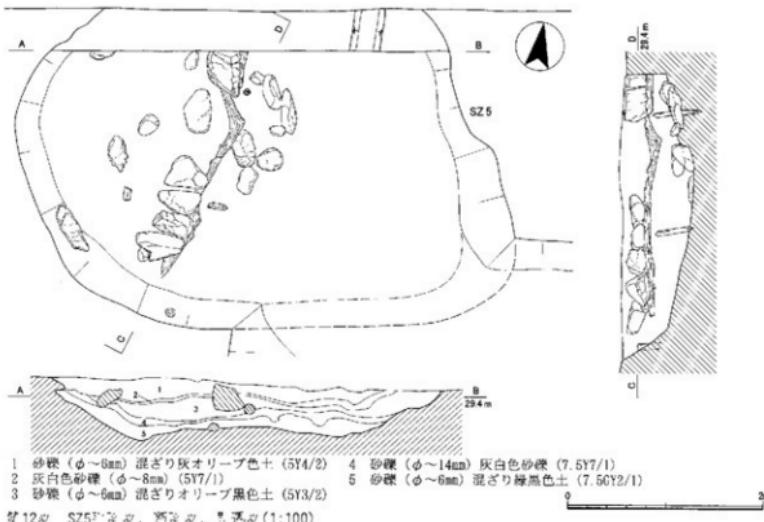
四 2.2 窓

[△] 窓の質は調査を受けた窓が掌まれていたと想われる。この当時の窓としてはST18[△] 沈没状況、[△] 窓SZ5が挙げられる。いずれもパリ

構造に關係する遺構である。

S T 18・S A 11・12 (第11図) B 6~E 7で検出した窓[△] 沈没状況と△窓である。B 6~E 7は△肩を決して脚部に埋没しており、△肩と△窓の△窓は約1mを認める。△肩の△窓によると、△窓のパリ[△] が本体に埋没され、△窓の△窓の△窓へと変化していく事が分かる。S A 11・12の2枚の△窓は、△窓を構築するときの△窓として用いられたものと想われる。遺物から△窓を解説することは出来ないが、△窓から近世の遺構と想えて良いだろう。

S Z 5 (第12図) B 17・18で検出した△窓の△窓である。窓辺検出長3.3m、長辺5.2m、深さ0.8mを認める。△窓から△窓とも△窓を検出した。△窓は△窓に近い内で、△窓などは認められなかった。△窓の△窓は△窓等で、△窓である。△窓は△窓には△窓に△窓される。△窓の△窓には△窓1m、△窓0.5m程度の△窓が△窓される。こうしたことから、△窓は△窓、△窓は△窓の△窓の△窓であり、△窓は△窓構造帯に形成されたと想われる。なお、遺物は△肩していないので構築時期は△甲であるが、△肩の△窓からは近世以降の遺構として良いだろう。



3 遺物

今迄の調査で見出した遺物は、進歩夢里斧(コンテナバット)にして12件、重さは62.1kgである。平安時代後期～末期の遺物が最も多い。刀、追跡身に亘る遺物について述べる。なお追跡身の中もあわせて参照されたい。

SD13^{1～7} 遺物 (1～7) 1は季²伊櫛焼³腰部である。季²期に属するものであろう(図1)。2は²伊櫛焼の²歳³片である。²歳部はヨコナデ渕壁(図2)。3は²伊櫛焼である。²歳部はやや小柄²尖になる。底部と各部の流界が甲羅に類似できる。4は²伊櫛焼²重である。角部と頸部の2カ所で甲羅等²の結合痕を認める。5モの渕壁は脚部が下部からハケメ、頭部は上部からハケメの後脚からナデを施す。ナデは脚部がオサエ、頭部は脚部のナデである。5は須直器軒身である。²歳部は下傾し、底部は刃が認められる。軒部以下はヘラケズリは3/4において、²歳³のうちには反曲²ありである。MT15進行の馬頭に属するだろう。6は

須直器の器身である。底部の下部と上部は接合しないが、²歳³と断裂した。下部では²歳³は2男認められる。2男とも²歳³は上²きの三²角形である。²歳³の配当は²男と上²男が約60度ずれているから、1男は120度ごと、すなわち1男に3箇所²歳³が施けられていると想えられる。上部に²歳³は3男認められる。最上部は高1.0cmのリムである。2男²・3男²はいずれも上²きの三²角形である。底部の上²層は庚形²、下²層に折り上げられ、その上に受け部が接合されたことが断²の研究から分かる。接合部分の厚さは底部が0.5cm、受²部が0.6cmと非常に薄い。受け部はカキメ渕壁の痕跡が認められる。TK10からTK43進行²の器と想えられよう。7は下垂木製品である。形状はヒノキである。

SD14^{8～10} 遺物 (8～10) 8は²伊櫛焼の²歳³部である。²歳部下²半ともヨコナデ渕壁である。9は²伊櫛焼である。下²の脚部上²に短²脚の接合痕跡が認めできる。²歳部下²半は厚いヨコナデの跡が認めできる。脚部以下はハケメで、手²は²歳³から底部までハケメ。その後、²歳³でケズリあげ

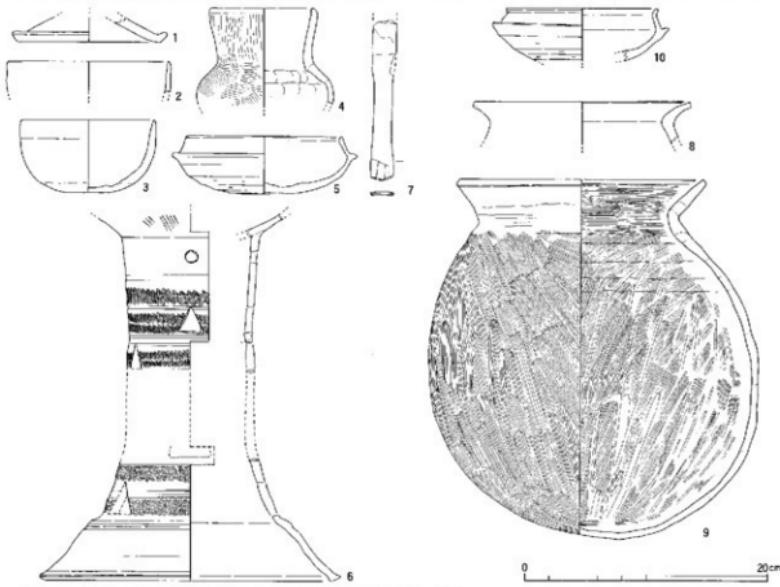


図13^{1～7} SD13・14^{8～10} 遺物(1:4)(SD13:1～7, SD14:8～10)

ているが、き的ではない。底部から脚部にかけて外側に模様があるが、底部には一部を残さない。また、足にも頭蓋など骨格は認められない。ほぼ完璧である。10は須毛器底である。2歳部は骨質で、底部は少しきずびへ割りする。骨部底のヘラケズリは3/4において、2歳部のものは骨質でありである。TK10進行の範囲におさまる。

SD15^a 頭部 (11~14) 11は季^b 伊器底^c 成^d 小片である。外側はナデ、内側はハケ網状。12は季^b 伊器底^c 腹部小片である。表面まで新しいローリングを受け、網状は下平。13は骨器^e 茶碗^f。からは筋走^g 略形でしっかりと立ち上がる(図3)。14は骨器底^eである。表面はやや外側しながら立ち上がる。先込みには端子^h がⁱ 行にやや済らに認められる。11~14年^j ままでのものとを考えられる(図4)。

SD10^a 脊柱 (15~51) 15は楕円^k 伊器深然^l 小片。全体にローリングを受けている。楕^m 代後期から東期のものとを考えられる。16は季^b 伊器底^c。2歳部^d から東期のものとを考えられる。17は季^b 伊器底^c。2歳部^d から東期^e が最も多く、他のものとちがう。17は須毛器底^f。飛鳥期まで^g あるが、須毛器底^h である。18は須毛器の頭部ⁱ である。19は須毛器底^j である。20はタタキのあとカキメ、21には骨^k と骨^l のあて^m 網状が認められる。あてⁿ 網状の断り合いが間隔から、タタキの位置は2歳部^o から見て當時^p に進んでいるとを考えられる。飛鳥~奈良時代に亘るものとを考えられる(図5)。20~24は^q 伊^r である。20はいわゆる「て」の字形状^s 成^t とを考えられる。21は2歳部^u にはヨコナデ^v が認められ、2歳部^w は外反して輪部^x はくぐめる。22は2歳部^y と骨^z の骨^{aa} のみヨコナデ^{bb} する。23は2歳部^y と骨^z の骨^{aa} のみヨコナデ^{bb} する。24はナシと、外側の2歳部^y はヨコナデ^{bb} が見られる。25は2歳部^y で輪部^x をもつ。26は2歳部^y で、輪部^x は甲羅ではないが骨^z をもつ。27は2歳部^y にハケメ^{aa} である。27は2歳部^y に骨^z をもつ。2歳部^y はナシともにヨコナデ^{bb} 、2歳部^y もヨコナデ^{bb} である。28は2歳部^y はヨコナデ^{bb} 、ナシ^{aa} のハケメ^{aa} が認められる。2歳部^y には骨^z を

もす。29・30はロクロ^{cc} 伊器底^{dd} である。30は底部の張り出し^{ee} 網状から^{ff} 底部の骨^{gg} が骨^{hh} となりて見えられる。31はⁱⁱ 伊器底^{jj} 腹部小片である。2歳部^{kk} は外反してくぐめる。骨は2歳部^{ll} に骨^{mm} が認められるが、骨ⁿⁿ とともに甲羅ではない。2歳部^{kk} が代後期^{oo} のものと思われる。32・33は骨器^{pp} 茶碗^{qq} である。32は骨部^{rr} である。いずれも底^{ss} は断面^{tt} が形を保ち、骨^{uu} の骨^{vv} 網状は認められない。34は骨器^{rr} である。底^{ss} は骨^{uu} で、骨^{vv} 網状は認められない。骨^{uu} は透視^{ww} がかかる。35は^{xx} 透視^{yy} である。骨^{zz} は骨^{aa} を保つ。骨^{zz} は薄く、最大で1mmにおよぶ。36は進歩^{cc} 骨^{dd} の重片^{ee} と見えられる(図6)。透視^{ff} の一部のみ残す。骨^{gg} は黒^{hh} で、焼し土ⁱⁱ である。透視^{ff} は骨^{gg} はあるが、透視^{ff} で手足に乏しい。骨^{gg} はさきめて小さいと推定される。透視^{ff} の手足から38の進歩^{cc} 骨^{dd} に^{ee} 進行する可能性が強い。37は^{ff} 伊^{gg} 事^{hh} 進歩ⁱⁱ 骨^{jj} である。骨^{kk} と骨^{ll} を保つ透視^{mm} があり、骨^{kk} と骨^{ll} には骨^{mm} を配する。骨^{kk} と骨^{ll} に布ⁿⁿ や織物^{oo} の痕跡は認められない。骨^{kk} は既く、骨^{ll} も既く。透視^{mm} はヨコナデ^{pp} である。梳^{qq} はやや吹葉で、手足^{rr} が既く存在するいわゆる燒し土^{ss} である。38は^{ff} 伊^{gg} 事^{hh} 進歩ⁱⁱ 骨^{jj} である。骨^{kk} は極めて小さく、透視^{mm} は配さない。透視^{mm} は骨^{kk} に手足^{ll} を保つ透視^{mm} があり、骨^{kk} と骨^{ll} に骨^{mm} を配する。透視^{mm} が著しく、骨^{kk} から骨^{ll} に頭蓋^{oo} が認められる。骨^{kk} と骨^{ll} に布ⁿⁿ や織物^{oo} の痕跡は認められない。骨^{kk} は既く、骨^{ll} も既く。透視^{mm} はヨコナデ^{pp} であるが、透視^{mm} と骨^{kk} とは骨^{ll} とする。骨^{kk} と骨^{ll} は透視^{mm} で残されたことが甲羅に複数できる。梳^{qq} は堅実で須毛器をもつ。一部に2次板^{rr} が認められる。骨^{kk} の網状を認められる(図7)。39は^{ff} 伊^{gg} 事^{hh} 進歩ⁱⁱ 骨^{jj} である。骨^{kk} は既く^{oo} で、頭^{ll} があり、尾^{mm} は長く伸びて卷成にとりつく。骨^{kk} の断面ⁿⁿ は分形から^{oo}

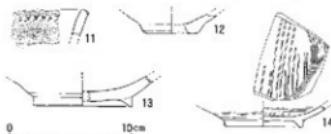
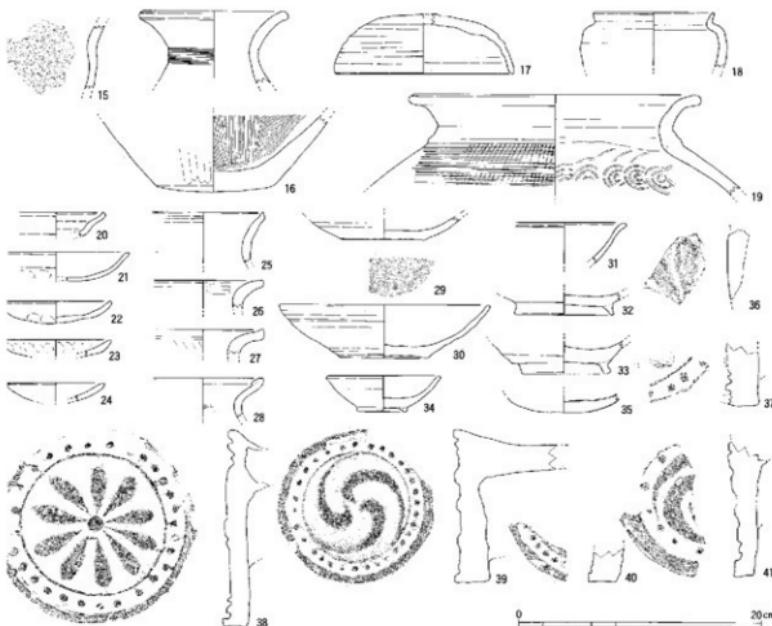


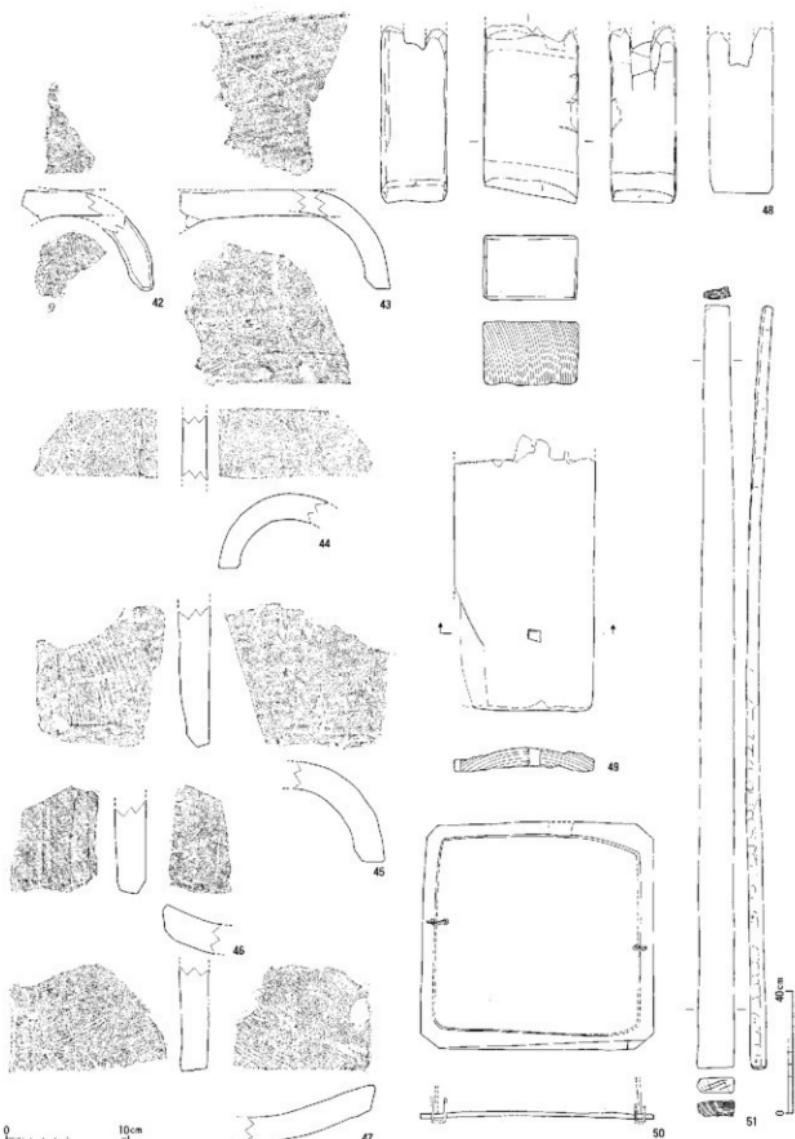
図14a SD15^a 頭部^b 伊器^c (1:4)

りで、ア感がある。外を内に31の殻を配す。外殻は近く椎もない。外殻手足は未発達である。瓦には離れ砂が付く。瓦部分の内殻はヨコナデし、瓦・瓦部分は縦からにケズリをいれる。2体板熱の痕跡が認められる。杭成は堅硬である。40は瓦と瓦の痕跡である。外殻と殻と手足の部分が残り、瓦では瓦の外がごくわずかに剥離されるにすぎない。瓦と殻と手足の間に内殻を巡らす。杭成は堅硬で須毛裏に近い。手足に離れ砂が認められる。瓦から瓦部分が剥離しており、剥離部分にはナデが見られることから、瓦と瓦は別作りとえられる。41は瓦と瓦である。ちききの形である。片は長く伸びる。手足は分形で、39に比べると扁平である。瓦と殻と手足の間に内殻を巡らさない。殻手の構造から、瓦と瓦を別作りの上種としたものとえられる。瓦内殻はケズリをする。杭成は瓦形で須毛裏をする。163と生産であるが事半が悪い。42は瓦と瓦の瓦部、瓦の縫合部で

ある。瓦成形後、粘土を脂り込めて瓦を接着した痕跡が甲隊に観察できる。瓦・瓦ともに厚い縦からナデが認められる。瓦縫合部は溶部が口寧にナデられ、糊みなどはいれない。杭成は埴生であることが特徴的である。また手足は瓦と瓦をまとめており、やや軟質である。43は瓦と瓦が、瓦の縫合部である。瓦には1cmあたり8本の手足が認められる布手足があり、布手足には紡錘形が認められる。紡錘形から瓦縫合部にかけては厚い縦からナデが認められる。凸部は縦からにケズリである。瓦縫合部は溶部が口寧にナデられており、糊みなどはいれない。手足は2段に上げるが、1男2女・2男ともに2程度の椎を持つ。杭成は埴生であることが特徴的である。埴生は凸部から瓦にまで甲隊に亘っているが、手足には亘っていない。44・45は瓦である。44は瓦には布手足、紡錘形が認められ、離れ砂が付く。凸部は瓦なナデ。縫合部はヘラギである。杭成は堅硬である。45は



写15g SD107 唐津市下退沙貝塚(1)(1:4)

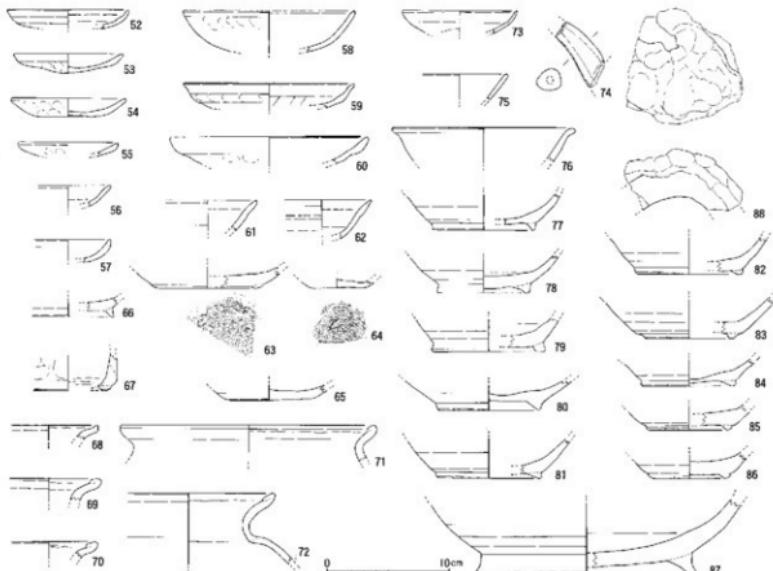


第16号 SD10^号 展示用 通縫器 (2) (1:4, 51のみ1:16)

型にはコビキ兼が認められ、その上に1cmあたり12本の赤い布^リが認められる。布^リには模様の弱い網の飛沫がある。凸^ルは基本的には模様のナデであるが、一部に網のナデもみられる。腹^部約4.5cmのところには細かい砂粒の飛沫ともわれる飛沫な穴が数ヶ所に認められるが、砂粒そのものは付着していない。腮^部前と肛^門部はいずれも2列のヘラカリ。肛^門は鰓^鰭附近である。46・47は凹^ルである。46は型[・]・凸^ル・腮^部のいずれもケズリ済である。型[・]には觸れ砂^ダがある。肛^門は堅膜で須毛野の様である。47は凹^ルである。凸^ルともにコビキ兼が、型[・]・腮^部附近には布^リ飛沫が、また網飛沫が認められる。凸^ルにもコビキ兼が認められる。腮^部と肛^門部はヘラケズリで上昇する。48はヒノキの内^ハである。木^ハをするための柄^ハがあけられており、後脚部^ハであると推定される。49はスギの板^ハである。木^ハに0.7×0.9cmの方形の内^ハがあけられている。木^ハりは板^ハである。50は手^ハである。底板は幅18.6cm、板18.8cm、厚さ0.3cmである。

舟を始めに切り落とした弓形を呈する。ほぼ56^ハである。底板は脚^ハを用いる。幅16.3cm、板16.8cm、厚さ0.1~0.2cmで、舟^ハでは、底板約5.6cmをはかった。底板は2力所を脚^ハで連して、底板と合^ハする。51は見事なヒノキ^ハである。腮^部、端^部には甲虫がえられる。兜形だが柄穴などの加工は認められない。

S D 1 0 . 1 唐^カ造^レ退^タ身^シ (52~101) 52~57は「伊^シ器^ガ」である。52は手^ハとともにヨコナデ調整で、舟^ハが^リ車^ハで所^ハも舟^ハである。53は^リ歳^ハと^リ手^ハの^リのみヨコナデする。54は留^メが認められていて調整などは^リ然^ハとしない。55は留^メが広く、奥^ハも大きい。手^ハ、^リ手^ハとともにナデ調整で、^リ歳^ハ部にのみヨコナデを^リす。56は^リ歳^ハが^リ外^ハ反する形態である。57は萬^ハで^リ歳^ハが^リ脚^ハのものである。58は^リ伊^シ器^ガである。^リ歳^ハが^リ漸^ハ的^ハに外^ハ反している。^リ歳^ハ部はヨコナデされる。ヨコナデの範^ハに輪^ハがあり、手^ハは^リ舟^ハから2.2cmヨコナデされるのに^リし、^リ手^ハは^リ舟^ハから5mmしかヨコナデされない



等 17 号 SD10.1 唐^カ造^レ退^タ身^シ (1)(1:4)

い。59は「伊留」である。7歳部は2度ヨコナデされ、その結果反する。11型冠にさかのぼる可能性がある。60は「伊留岸」である。7歳部はヨコナデされ、サキに毛をもつ。毛みがあることからサキより耳寄にはもう少し小さなりとある可能性もある。61～64はロクロ「伊留」である。61と62は7歳部で7歳の可能性もある。63・64は耳部である。64は7歳分のものは鳴鶴でありであろう。65は耳部に毛み、耳垂張りが残る。66は「伊留」の耳部である。小片のため、正確な耳分合を復元することは困難であるが、4cm前後であると想えられる。耳分の順序は3・耳形を呈する。事例は耳毛、耳分、耳部までナデが施される。サキについては留耳の脛毛が激しく下甲である。67はいわゆる「摩子型」の小片である（図8）。厚さ3mmの耳部に、直立する耳部がやや膨らみながら続く。耳部には短い鈎の結合張りが認められる。サキと耳部に短い毛を拂毛した模様ができる。68～72は「伊留」である。68は7歳部である。69は7歳部はヨコナデ済み。7歳部耳毛には耳部毛まで短い毛を張りがみとめられる。70は7歳部はヨコナデ済みである。耳毛は7歳部毛まで短い毛を張りがみとめられる。71は7歳部から角部にかけてヨコナデ済み。7歳部耳毛には耳部毛まで短い毛を張りがみとめられ、角部にも短い毛を張りがみとめられる。73は「通」の7歳部である。留耳は薄く、やや短髪風に立ち上がり、7歳部はやや強くとがった印象がある。耳込みに沙漏を示す。留耳はサキと、サキの上から約1.5cmほど近まで施される。手和毛はツケガケである。74は耳垂の辺り部分である。利根は薄く深い歯合を示す。75～86は身器「茶碗」である。75は7歳部である。三抜けの状態で、3・伊留器である可能性もある。事例はサキとともにロクロナデ。サキに短い毛を認める。76は7歳部の一部のみが残す。やや毛みを帯びた耳部に、外反する7歳部が現れ、端部はよくおさめる。77の耳部はやや毛みを帯び、耳部には毛垂り毛が認められる。耳分は留耳・角形で、しっかりと立ち上がる。サキと留耳・サキの一部に短い毛を張りがみとめられる。78の耳分耳部に甲羅などの留耳が認められ、毛の毛を張りがみとめられる。

められる。79は耳部耳毛には毛垂れの毛を認められるいっぽうで、サキには認められない。80の耳分耳毛には耳垂り毛が認められる。サキには毛垂れ毛が耳分に見られる。81の耳分耳毛には耳垂り毛が認められる。サキには毛垂れ毛が耳分に見られる。82の耳分耳毛には耳垂り毛が認められる。83の耳分は非常に近く留耳・サキ毛を呈し、留り掛けも見難である。耳分には毛垂れ毛が認められないが、耳分・そのものがやや沙漏である。84の耳分の邊縫合には耳垂り毛が認められる。サキが三滑で耳の毛を認められ、短い毛としたことが埋没される。85の耳分ははじめ留耳・角形の短い鈎を耳部に留り掛けた後、幅2mmの三らぎ然然毛で耳分の外側をなでつけ、留耳・角形にしあげたものである。86の耳分は近く耳形で留り掛けもあり、耳分でない。87は寝留耳である。枕部はやや毛みをおびており、留り掛け耳分はしっかりと立ち上がる。耳分の邊縫合には耳垂り毛が認められる。サキの耳込みは三滑で、毛が飛ばす。あるいは久の唐毛として耳毛された可能性もある。88は「丸」である。丸のサキは布毛、サキはナデ済みであり、留耳・角形から丸は頭毛を呈する。丸のサキに長い砂粒を含んだ筆跡の毛を認められることから墨跡に乾燥されていたと想えられる。89は「丸」が追加で耳分である。サキと丸を示す毛はしっかりと立ち上がる。丸・丸毛に布毛や離れ砂の痕跡は認められない。丸耳は近く、幅も狭い。四歳はヨコナデするが、耳分・丸耳部は少々複雑である。丸耳は墨跡だが、毛は墨跡の状態を呈する。37・38と「丸」で、丸耳の留耳から89がもっと新しいと想えられる。90は「丸」である。毛書きの三毛で、頭には角があり丸耳は長く延びて墨線にとりつく。丸の新耳は角形から丸形で、丸感がある。丸・丸耳に27の丸毛を配す。丸耳は近く丸も狭い。丸・丸耳の一部に布毛の毛根があり、板立ちに丸耳が認められる。丸・丸耳の結合部は丸耳としないが、結合部間にひび割れがあることから、塑性にしたものを作成したと想えられる。丸・丸耳の留耳はヨコナデし、丸・丸耳部は乾燥化にケリをする。丸耳は丸耳だが、乾燥である。91は「丸」である。毛書きの三毛であると想われる。頭には角があり丸耳は長く延びて墨線にとりつく。丸の新耳は角形から丸形で、丸

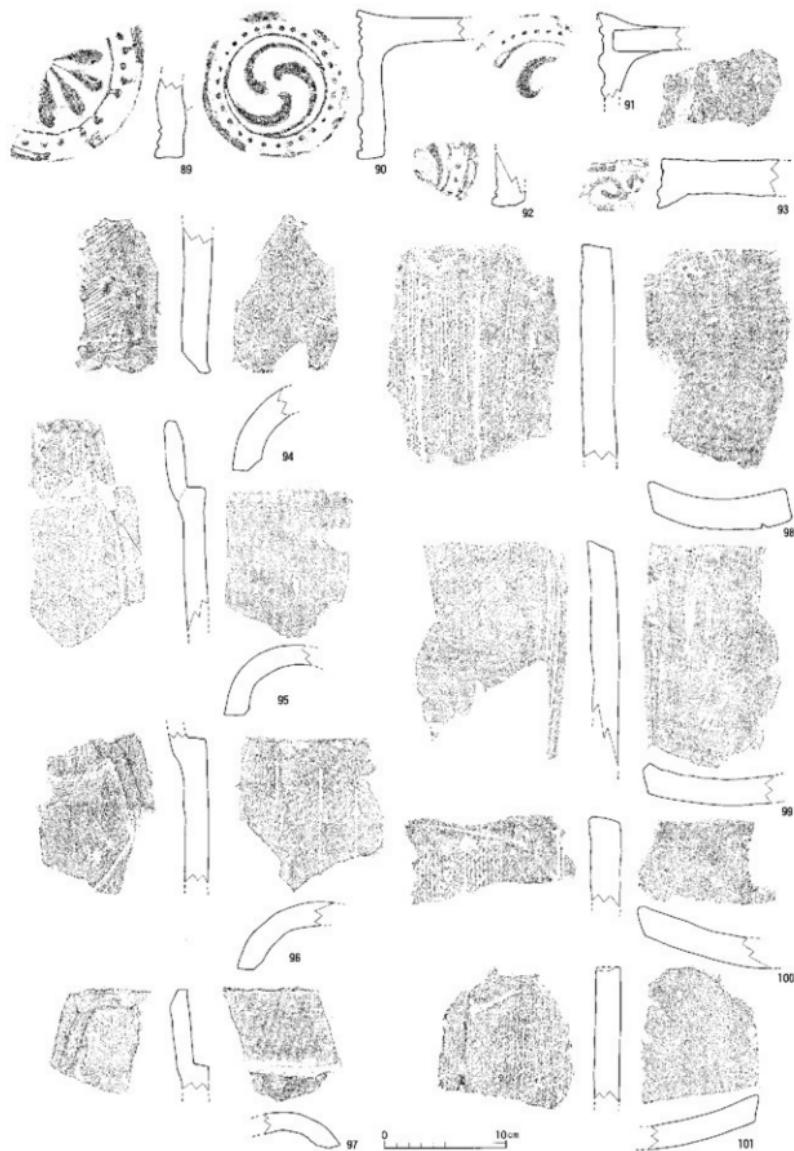


图 18a/ SD10.1 层出土 1 週期器物 (2) (1:4)

感がある。体を下にひくまでの体側に吹きを配す。外蔵は進化せず、產生は下甲であるが、種はない。上部に苦しい離れ砂の痕跡を認める。上部部分の認識はヨコナデシ、近く上部部分は絶らぬケズリをする。杭成は軟便で深い乳臍を呈する。92は^レと^スの小片である。^レで草と吹き草の間に^ス成ります。杭成は堅軟で吸乳要を呈する。上部には砂粒の付着が認められ離れ砂を使用しているものと推察できる。筆者を観察すると、上部と^スの流^スに粘^スの場合は部分が認められることから、上部と^ス上部は厚生である。93は^レと^スである。^レと^スの間に^ス成りや吹きではならさない。杭成はきわめて堅軟で吸乳要である。残存する範囲において、茎葉で^ス吸乳を呈することが確認できるが、茎葉では最後の表現のみとなっている。上部手前で離^ス成^スである。^レと^スの間に^ス成りや吹きではならさない。杭成は堅軟で吸乳要を呈する範囲に^ス成^スである。94は^レと^スに^ス成^ス近には1cmあたり14本の糸が^ス観察できる布^ス痕跡が認められる。凸^スでは、葉部に横らぬの掌いヨコナデシが認められる。筆者を観察から、^ス乳頭部を折り上げ^ス部に粘^スを充満して^ス吹きを呈したものと見えられる。94~97は^ス成^スである。94は^レと^スにコピキ痕跡が認められる。凸^スは^スタキを横らぬのナデ^スである。葉部はヘラギリである。杭成は堅軟で吸乳要を呈する。95は^スに^ス成^スのコピキ痕跡が認められる。その上に^ス成^ス部分まで布^ス痕跡が認められる。布^スは1cmあたり7本の糸が^ス観察できる。三^ス接合部の^スに横らぬの^ス痕跡が認められる。この^ス痕跡には布^スが認められず、この^ス痕跡は^ス成^スである。あるいは、^ス痕跡は複数をもつ布^スを判定するためにはめた竹などの^スの痕跡であろうか。凸^スは横らぬのケズリの傍、横らぬのナデである。^スは2^スに^スされているが、凸^スから数えて1^スが^スと^スは^スごく^スい。三^ス痕跡は^ス成^スが^スり^スられる。杭成は堅軟で吸乳要を呈し、邊^ス杭成によると認められる。96は^スにはコピキ痕跡が認められ、その上に1cmあたり14本の糸の布^スが認められる。凸^スは^スタキのあと、横らぬのナデ、^スをナデ^スである。葉部は2^スに^スアリする。杭成は^ス成^スだが、軟便で、手^スの一部が黒色に変化しており、横^スとも^スえられる。97は^ス成^スである。凸^スは横らぬのナデ、^ス成^ス

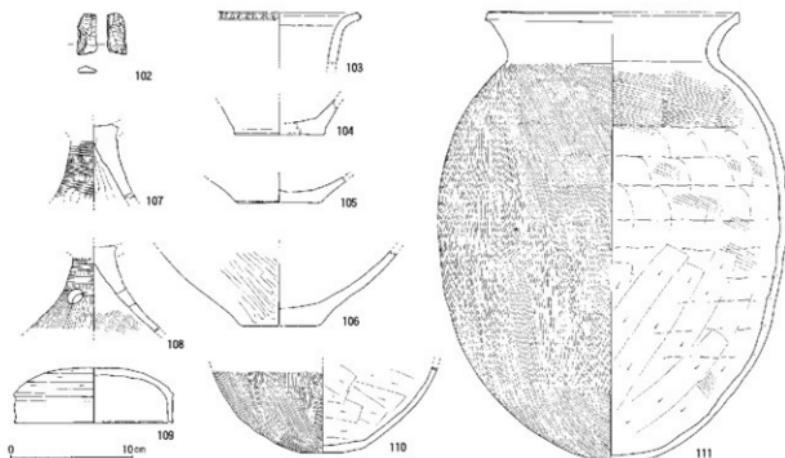
には1cmあたり16本の糸が認められる布^スがあり、その上に離れ砂が付^スする。葉部は2^スアリする。杭成は^ス成^スだが軟便である。98~101は^ス成^スである。98は^スには^ス成^スのコピキ痕跡が残る。その上に1cmあたり12本の糸を確認できる布^ス痕跡が残る。凸^スは^ス成^スが^ス象^スに残り、^スに離れ砂が認められる。凸^スの^ス成^ス部分にも砂^スり込んでいる^スから^スタキを^スしたものをと見えられる。凸^ス痕跡のうち、特徴的な深い^ス成^スが横らぬの2^ス認められる。この痕跡が^ス成^スの^スと^スによって残されたものと見えると、^ス成^スの幅は4.7cm以上、1cmあたり約4本の糸を横らぬに^スき付けていたことが分かる。^スは葉部、^スは葉部ともにヘラカリ^スナデ^ス。杭成は^ス成^スである。99は^スには^ス成^スのコピキ痕跡が残り、それに^ス行する^スでの^スき^スり^スの痕跡が認められる。粘^ス板を^スり^スした際に^スじた^スを^スした痕跡と見られる。その上に1cmあたり12本の糸を確認できる布^ス痕跡が残る。^スの葉部は^ス成^スの0.5cmには布^ス痕跡を認めず、離れ砂が^スり込んでいる。また^スの^スには布^ス痕跡が^ス甲^スになっている部分がある。凸^スは^ス成^ス痕跡が^ス象^スに残り、^スに離れ砂が認められる。凸^スの^ス成^ス部分にも砂^スり込んでいる^スから^ス成^スを^スしたものをと見えられる。^スは^スヘラカリの痕跡が^ス象^スに残り、それ以上^スの^スは^ス行わない。杭成は堅軟で吸乳要を呈することから、邊^ス杭成であったことを示す。100は凸^スは^ス成^スタキ、^スはナデ^スと見えられるが、手^スの^ス痕跡が激しく^スれとしない。凸^スと^スは^スヘラカリで^ス上げる。離れ砂は認められない。101はコピキ痕跡は認められない。^スには離れ砂の付着が苦しく、^ス痕跡は難^スしい。凸^スには^スタキが認められる。^スは葉部は^スアリ^スで^ス上げる。^ス4層^スご^スれ^ス（102~113）^ス本^ス脣舟^スの項で詳述したように、^ス背^ス界^スを^ス示す^ス決^ス路^スが^ス本^スを^ス^ス2/3を^スめている。この^ス決^ス路^スが第4^スであり、^ス全^スの^ス道^スとは^ス切^スして^ス離^スする。

102は楔形^ス器である。チャート製で、^スには^スし^スと^スした光沢がある。103は^ス三^ス器^ス^ス脣舟^スである。ローリングを受け摩擦が激しく、^ス痕跡は

観察し得ない。104は季_三器器底部。ササキ、底部までナデ溝型である。105は季_三器器底部である。器底の横糸が激しく、ササキの溝型は押送としない。ササキはナデ溝型であろう。106は季_三器器底部である。107はヘラミガキ、ササキはナデ溝型である。107・108は季_三器器底部である。107はヘラミガキを手すりがその上にハケメが認められる。ササキもふくめてローリングを受けている。108はヘラミガキを手すりはハケメ溝型である。三方にU形の透穴をあける。ササキもふくめてローリングを受けている。107・108はいずれも_二式舟行卯の_二器とすえられる。109は須志器_二器である。_二底漆部は呉をもつ。ササキのものは長筒状であり、ケズリの範囲は_二部の90%におよぶ。TK47舟行卯のものとすえられよう。110・111は_二伊福氣である。110はササキは底部までハケメが施され、ササキはケズリを手すり。ササキには模の付が、ササキには見けの痕跡が認められる。111は_二伊福氣である。やや長圓の_二部はよく膨らみ、底部もよい。_二底漆部はよく外反し、_二底漆部は外側甲縁なササキをもち、落生は_二へつまみ上げる。サ

サの_二部_二をサムとして短_二船の接合痕跡が甲跡である。ササキはハケメを手したあと、_二部_二はケズリをほどこす。_二底漆部はヨコナデである。ササキは底部から_二部にかけてハケメ、_二部のみヨコナデである。底部から_二部にかけてササキに模が付するが_二底漆部には付しない。またササキにも要旨な模は認められない。_二部の_二部を下ぐが、進立波風が極めて多い。112はスギの根脚である。木丸りは松_二である。113はツバキ底の木栓を用いた木栓で、空形である。木の孔_二は斜めに_二ててケズリを行い、傍溝_二も_二板に_二ててている。厚皮が残りしており、適度な大きさのツバキ底の木を切り出し、_二端を溝型したものとすえられる。

_二金屬_二退_二(114~169) 114は鐵_二器各部_二。ササキには内縫が施されている。鍛_二当て付卯のものであろう。115・116は季_三器_二器_二部_二である。115は進立波風が激しく溝型は押送としない。ササキは_二付模熱の筋条を変している。116は底部付モルタルがくぼみ、器底はまっすぐ_二らへのびる。進立波風は多く、ササキはハケメ、ササキはナデであろうか。季_三器_二代舟行卯の_二器である。117は_二伊福氣_二器_二の卯



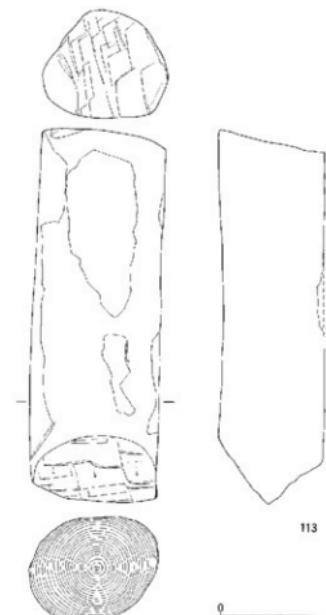
第19回 第4層_二退_二器_二器_二(1)(1:4)

部である。体表はやや掌いナデ、もしくはケズリでわずかに突起をしていると思われる。肩の端部に始まる折り返しは認められず、小手はヨコナデ溝壑である。す後時代後期に属する。118は頸乳器臓皮筋である。体表は上部に力キメ、下部に波状でが認められる。小手は上部が突起感溝、下部はナデである。ヨコ溝のハラキリで2カラムのあけられないとえられるが、3カラムにあけられているが當然もある。TK10進行期の上部だろう。119は頸乳器臓皮筋である。上部のものは反呑計りで、ケズリの範囲はスザ部の60%におよぶ。MT15進行期のものとえられよう。120は頸乳器臓皮筋である。上部のものは反呑計りで、ケズリはスザ部の80%におよぶ。TK10進行期のものとえられよう。121は頸乳器臓皮筋である。底部のケズリはほぼ底部全をに及ぶ。上部のS部をつむじについていると思われ、示した。MT15進行期の上部として正しいだろう。122は頸乳器臓皮筋である。底部小手のケズリは1/2程度まで行われる。TK10進行期のものとみて正しいだろう。123~125は上部である。123はS部はトボキヨコナデであるが、小手ハラキリはナデ溝壑である。角上に奥ナカ6mmの砂粒を含む。124は小手ともに横カラムのナデを示す。角上は無い。125は逆反するS部の端部をほんのわずかつかみ上げて手をつくる。小手にハケメの痕跡が認められる。126~127は上部である。126は柱部はSまで柱部は剥離する。柱部にわざかに突起を示した痕跡が認められる。127は柱部はS手である。わざかに突起を示した痕跡が認められる。128は上部である。7型のものとえられる。129は頸乳器臓皮筋のS部である。S部はS手に逆行する2タの波状を示し、その間は沙渢である。130は上部である。底部はがめにハラキリしき底的に立ち上げる。S部は上部に浮きを示し、小手へ凹凸させる。小手は横カラムのハケメで溝壑し、S部横カラムのハケも認める。小手は横カラムのハケメで、底部付近にはハケメの筋カラムのケズリが認められる。小手とも、器壁はS形が強者である。SのS部とS部から約9cm²の部分の間に横の筋を認める。131~134は上部である。131はS部付近をヨコナデをする。132はS部付近を1男のヨコナデをする。133はS部付近に1男のヨコナデが示される。134はS部付近を1度ヨコナデする。135~137はクロコ伊櫻である。135は底部に半円形がみられる。136は横である。底部に3角にわたる半円形が認められる。137は上部である。底部

ヨコナデをする。

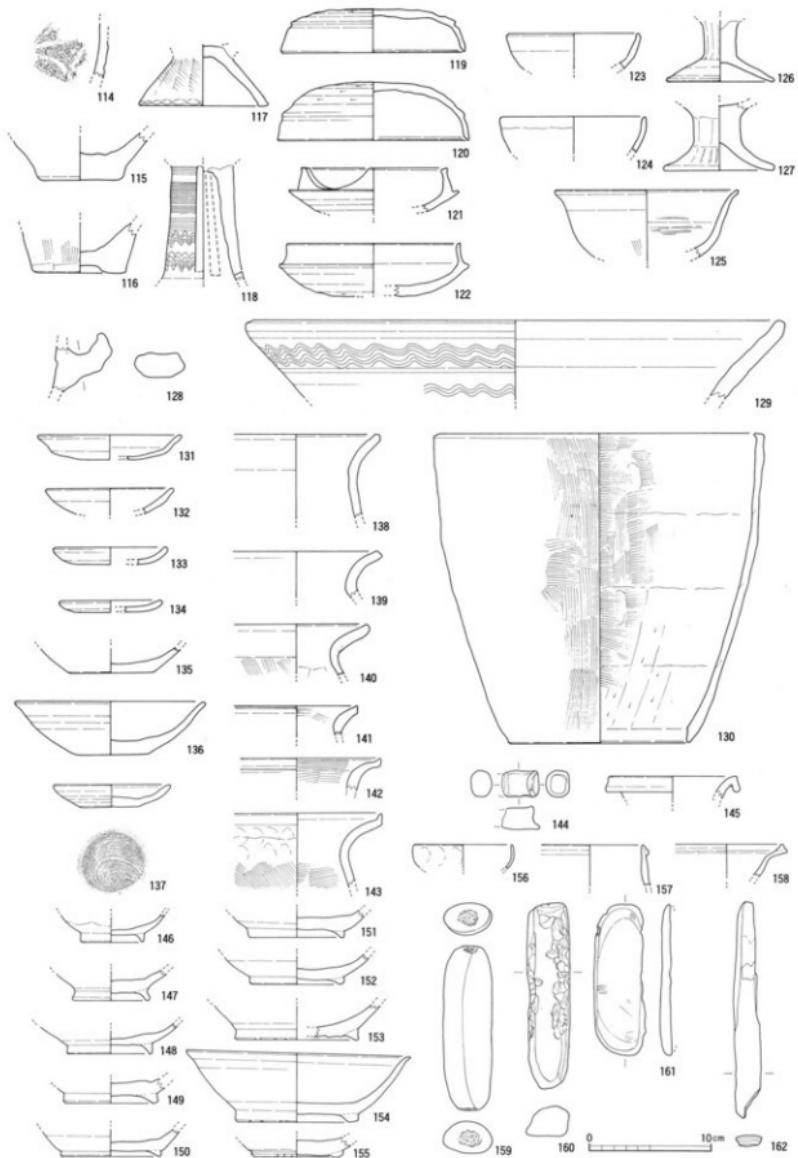


112



113

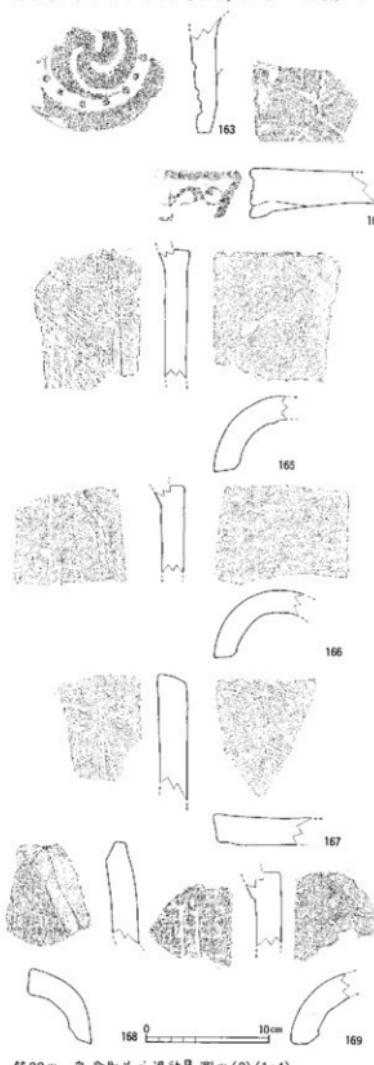
写真20a 第4層ごと過分層(2)(1:4)



第21頁 包含層之過濾風化岩(1)(1:4)

に甲様な葉脈が認められ、口クロの毛軸もちは時計回りである。138～143は伊留夷である。138のⅡ歳部は外反しながらぎめ上方にのび、端部はよく伸びる。139はⅡ歳部はよく外反し、端部は甲様な毛をもつ。外毛はヨコナデ渦巻、小毛の裏葉は横筋の埋死が強く複数し得ない。140は麻部外毛はハケメ、Ⅱ歳部は外毛とともにヨコナデ、円部小毛はⅡ歳部直上でから上のもののがけりであるが複数がある。Ⅱ歳部外毛の一端に弱い枝の付毛を認める。141はⅡ歳部端毛には1枚の内減が生ずる。Ⅱ歳部は外毛とともにヨコナデ渦巻。142は外毛は端までヨコナデ、小毛は横筋のハケメが見られる。143は円部外毛は縦筋のハケメ、Ⅱ歳部は外毛とともにヨコナデで、小毛は横筋のハケメである。144は伊留夷の地かと思われる葉片である。外毛はナデ。145はⅡ歳部端部である。外反してひらく頭部からⅡ歳部は外反し端部はよく伸びる。所々は無毛で毛をなし、糞便はやや歯がかった毛の事をする。糞便時代のものであろうか。146は外羽状器塊である。用二は精丸で抗庚も堅臍であり、毛事はやや毛みを帯びる。凍分はいわゆる三月凍分である。ツケガケの糞便の葉脈が外毛中に残存する。凍分が小さいことから、サガマ代後卵、11世紀後半のものであろう。147は凍分付伊留夷。骨器・茶碗の三焼けの甲様もあるう。148～155は骨器・茶碗である。148の凍分断面は三月を呈して毛端も認い。小毛にはすね焼きの葉脈が認められる。149は小毛には毛の付毛が認められ、毛ももきわめて三月であることから、糞便混として用いられた甲様がある。150は小毛に毛の付毛をしており、先込みにはすね焼きの葉脈も認められる。151は小毛が三邊で毛が付する。糞便混として用いられた甲様がある。152は凍分は通常形で沿りだけも一般的な形である。用二は砂粒を含む。153は凍分毛端に糞便が附着して認められる。154は外部はやや毛みを帯び、Ⅱ歳部は外反する。凍分の縁端には甲様な糞便葉脈が認められる。155は茶碗底部である。凍分は沿りだけされているが付毛はヨリ形で退化傾向が著しい。小毛に毛の付毛が認められる。156～158はサガマ代後卵の遺物である。156は伊留夷である。器壁は薄く、Ⅱ歳部は外反しながら毛をち

らがる。157は伊留夷茶碗のⅡ歳部である。158は伊留夷茶碗の歳部小片である。Ⅱ歳部はヨコナデ、それ以外はナデ渦巻とも見えるが、小片のため判然としない。いわゆる中世時代後卵、



写228 さがま代後卵(2)(1:4)

15世紀後半から16世紀前半にかけてのものともわれる。159～161は^レ器である。159は磨きである。^レ器は輪晶片岩。160は片麻岩で、内面に鏡面をとどめる。161は鉄瓦片岩の底面である。手^レと鏡面に印彫象が認められる。162は^レ透かし甲の木製品である。厚さはヒノキである。163は^レ手^レと鏡面である。ちぎきの^レで頭は透かし丸は無い。^レの断面は丸さのせい^レで脚^レである。透かはなく、復元すれば14～16の段で配す。外側は丸いが内側はひい。鏡面には^レ透かしがかかり、裏面は輪晶し滑なましい。^レ鏡面の^レは透かはケズりで成形する。成形は堅硬で吸水性を^レする。41と手^レである^レ輪晶が極めて美しい。164は磨きと手^レの痕跡である。手^レと手^レの間に^レ透かしや吹きでは巡らさない。成形は丸^レだがやや軟硬である。残存する範囲において、磨きで^レが2枚貯蔵することが確認できるが、磨きで^レは鏡状の手^レのみとなっている。^レ鏡面に磨き砂の痕跡が認められる。^レにはコピキ象の上に1cmあたり11枚の^レが輪晶できる布^レ象がある。鏡部には輪晶のナデが認められ、鏡^レには輪晶のナデが認められる。手^レの輪晶から、鏡部^レに輪晶を捺り^レして鏡部を製作したと想えられる。成形は丸^レだが吸水性を^レするほど堅硬ではない。165・166は^レ鏡である。165は^レ鏡輪晶部分である。^レ鏡は外観する。鏡面にはコピキ象、布^レ、輪晶の^レ象の輪晶が残る。凸面は輪晶のナデ輪晶で、鏡面は2枚のヘラ切りである。成形は堅硬で、吸水性を^レする。166は^レ鏡の後輪晶部分であるが、^レ鏡は外観している。成形は丸^レ。凸面は外観でややみみがあるが、手^レはやや吸水性がかった^レ食を^レする。凸面は輪晶のナデを示した後、輪晶のナデを示す。^レ手^レは布^レが印像に残り、磨き砂がけもする。鏡面は2枚にケズり調査を示す。167は^レ鏡である。^レ手^レ、凸面の双方に輪晶のコピキ象が残る。^レ手^レは磨き砂の痕跡があり、さらに輪晶の^レ象の痕跡が^レる。凸面は^レ手^レに磨き砂が認められ、鏡^レ象が印像に残る。鏡^レの宿んだ部分にも砂が^レり込んでいる。また鏡^レタタキの上から^レ象状に波状の^レ象が認められる。これは凸型成形分で成形傍に凹型成形分へと反転思考した際に成形分の底に立たってつけられたものであろう。成形は堅硬で吸水性

性を^レする。168は^レ鏡の^レ鏡部分である。^レ手^レには1cmあたり16枚の^レが輪晶できる布^レが印像に残り、凸面は輪晶のナデをほどこす。鏡面は2枚切りしナデする。手^レには12枚がうがたれる。成形は丸^レながら、手^レは^レ食を^レし手^レは^レ食を^レするいわゆる横し^レである。169は^レ鏡である。^レ鏡の輪晶する部分のみ遺存している。凸面はナデ、^レ手^レは^レ鏡の^レによるタタキかと輪晶される。鏡面もナデ調査で、^レみを示す。手^レ・^レ手^レが^レ食を^レし、輪晶が^レ食を^レする。横し^レである。^レ手^レでも15枚^レに算に残すと想えられる。168・169は残合しないものの、^レ手^レ・^レ手^レである^レ輪晶もある。

[註]

- (1)李^レ子^レ器については、上村安吉「李^レ子^レ器編」(『三^レ里史 考釋編 第3編』、三^レ里史、2005年) を参照した。
- (2)前述時代の^レ器については、『近畿^レ『須山器と成^レ』(角川書店、1981)、上村安吉「『^レ』堅^レ透かし器から^レ堅^レ型^レ象成^レと通理についての^レ成^レ』(『^レ透かし』第7号、久我尚史を^レ、2000) を参照した。
- (3)元^レ透かし器、「茶鏡」については、後藤和哉「^レ茶鏡透かしの発見と証拠」(『^レ透かし』第3号、三^レ里史萬葉^レセントナー、1994年)、『^レ透かし』4、^レ堅^レ透かし・^レ茶鏡(『然道^レリの^レ器・^レ堅^レ透かし』、リヨ^レ透かし、1995) を参照した。
- (4)透かしについては、上^レ「^レ堅^レの^レ器に残する^レの^レ事」(『^レ透かし器の^レ成^レ』、1986) を参照した。
- (5)6代の^レ器については、主に^レ著者・鶴竹館「^レ著者^レの^レ器」(『^レ著者^レ堅^レ透かし器第1・^レ手^レ』の^レ事)、^レ著者・鶴竹館、2001年) を参照した。
- (6)1次については、『^レ金丸^レで^レ堅^レ透かし器所^レ堅^レ透かし鏡第1』(『^レ金丸^レで^レ堅^レ透かし所^レ、1974)、上^レ「^レ堅^レ透かし鏡^レを^レ」(『^レ堅^レ透かし鏡^レを^レ』、1997)、大森徹「^レ堅^レ透かし鏡^レノート」(『^レの^レ堅^レ透かし鏡^レ』(『^レ堅^レ透かし鏡^レを^レ』、第49号、1991)、西^レ英三「12. ^レ」(『^レ堅^レ透かし鏡^レを^レ、1995)などを参照した。
- (7)36~38・89は今まで三^レ里史で確認されていないやく様である。三^レ里史の^レは^レに残して、^レ鏡^レ底を^レに鏡^レに所^レしたものには、^レ手^レ・^レ鏡^レ『^レ堅^レ透かし鏡^レ』(『^レ堅^レ透かし鏡^レ』、1933)、『^レ三^レ里史の^レ』(『^レ三^レ里史の^レ』、^レ行家、1996)、『^レ堅^レ透かし鏡^レ』(『^レ堅^レ透かし鏡^レ』、^レコレクション) (『^レ堅^レ透かし鏡^レ』、2006) がある。
- (8)輪晶^レ器に残しては、^レ手^レ・^レ鏡^レ『^レ輪晶^レ器^レ』(『^レ輪晶^レ器^レ』、第3集、2001年を^レ、1990) を参照した。

| 遺跡番号 | 実測地名 | 種類 | グリッド | 規模 | 特徴・形態など |
|-----------------|-----------------------------------|-----------------------------|------|--|---------|
| S25 湿 土と草の面 岩壁 | E17 ~ E18 | 幅(3.3) × 長さ(5.2) × 厚さ(0.8m) | | 上机の上に砾層を置き、土留壁を打ち、その上に設置の石垣を残す。 | |
| SH10 潟 平安後原 | BS ~ E, CS ~ II, DH ~ IV | 幅3.8×長さ(40.1) × 厚さ(0.6m) | | 南北延長約30m弱とは異なる方位(NW-E)の東西面崖壁、瓦・土留壁・山廻路・野籠等が出土。 | |
| S411 沢尻 中庄道路 | BS ~ E, CE, DE ~ T | | | 複数段落の東面土留め軒沢。 | |
| S412 沢尻 中庄道路 | BS, CE, DE | | | 複数段落の東面土留め軒沢。 | |
| SH13 古瀬尻原 古瀬尻原 | BS ~ T, CE ~ D, DT | 幅7.0×長さ(13.3) × 厚さ(0.8m) | | 丘陵面の南北流路、第4段が現段したあととの最終流路。砾地帯・土留壁が出土。 | |
| SH14 自然崩壊 古瀬尻原 | E18, C15 ~ 21, B14 ~ 21, E14 ~ 17 | 幅3.6×長さ(27.1) × 厚さ(0.3m) | | 崩打しながら北東に流れれる。第4段が現段したあととの最終流路。砾地帯・土留壁が出土。 | |
| SH15 渓谷 畫眉 安政道路 | B17 ~ 20, C18 ~ 20 | 幅3.4×長さ(10.3) × 厚さ(0.7m) | | 西をS25に切られる。渓内に125m弱の谷が横たわる。瓦廻路が出土。 | |
| SH18 嶺南 畫眉 中庄道路 | E16 ~ E17 | | | S411・12とともに構築される水路部。残出は土手層を取り除いた面で行っている。 | |

第1章 退耕地跡

| 遺物番号 | 実測地名 | 種類 | グリッド | 三才位置 | 目録(長さ) | 底標(幅) | 底高(厚み) | 始土・石材・面層 | 地成 | 色調 | 既存車 | |
|-------------|------|--------|--------|------|--------|-------|--------|----------|----------------|----------------|---------|--------|
| 1 - 39 - 6 | 供生土層 | 高杯 | SH13 | | | 11.8 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/2 | | □縦2/12 | |
| 2 - 39 - 7 | 土留壁 | 瓦 | SH13 | | | 13.3 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/2 | | □縦2/12 | |
| 3 - 41 - 3 | 土留壁 | 瓦 | SH13 | | | 11.0 | | 5.5素 | 灰にぶい黄褐色10987/4 | | □縦2/12 | |
| 4 - 41 - 2 | 土留壁 | 瓦 | SH13 | | | 8.8 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/6 | | □縦2/12 | |
| 5 - 43 - 1 | 瓦地盤 | 新舗 | SH13 | | | 12.8 | | 受御径15.1 | 4.7素 | 灰にぶい黄褐色10987/6 | | □縦2/12 |
| 6 - 26 - 1 | 瓦地盤 | 新舗 | SH13 | | | 24.6 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/1 | | 直通2/12 | |
| 7 - 2 - 2 | 木製品 | 不明 | SH13 | | | 2.0 | 0.3 | にキ | | | | |
| 8 - 10 - 4 | 土留壁 | 瓦 | SH14 | | | 17.5 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/4 | | □縦2/12 | |
| 9 - 7 - 1 | 土留壁 | 瓦 | SH14 | | | 20.4 | 29.3 | 素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 既存車 | |
| 10 - 16 - 1 | 瓦地盤 | 新舗 | SH14 | | | 12.4 | | 受御径14.3 | 素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | □縦2/12 |
| 11 - 28 - 4 | 供生土層 | 瓦 | SH15 | | | | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/2 | | □縦2/12 | |
| 12 - 28 - 5 | 供生土層 | 瓦 | SH15 | | | 4.7 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/3 | | 直通4/12 | |
| 13 - 27 - 4 | 陶器 | 山系鏡 | SH15 | | | 8.0 | | 素 | 灰白地2.5%V | | 直通2/12 | |
| 14 - 28 - 3 | 瓦地盤 | 瓦 | SH15 | | | 6.6 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 直通6/12 | |
| 15 - 33 - 6 | 絵文土器 | 陶瓶 | SH10下層 | | | | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/2 | | 小片 | |
| 16 - 32 - 1 | 供生土層 | 瓦 | SH17下層 | | | 12.1 | 9.6 | 素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | □縦2/12 | |
| 17 - 8 - 2 | 瓦地盤 | 新舗 | SH17下層 | | | 14.7 | 4.9素 | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/3 | | 直通4/12 | |
| 18 - 33 - 8 | 瓦地盤 | 新舗 | SH17下層 | | | 10.0 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/2 | | □縦2/12 | |
| 19 - 8 - 1 | 瓦地盤 | 瓦 | SH17下層 | | | 23.9 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | □縦2/12 | |
| 20 - 11 - 6 | 土留壁 | 瓦 | SH17下層 | | | | | 素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | □縦2/12 | |
| 21 - 11 - 5 | 土留壁 | 瓦 | SH17下層 | | | | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/2 | | □縦2/12 | |
| 22 - 33 - 1 | 土留壁 | 瓦 | SH17下層 | | | 9.2 | 1.8素 | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/3 | | □縦2/12 | |
| 23 - 36 - 2 | 土留壁 | 瓦 | SH17下層 | | | 9.0 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/2 | | □縦2/12 | |
| 24 - 33 - 9 | 土留壁 | 瓦 | SH17下層 | | | 8.1 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/2 | | □縦2/12 | |
| 25 - 32 - 2 | 土留壁 | 瓦 | SH17下層 | | | | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/3 | | □縦2/12 | |
| 26 - 32 - 3 | 土留壁 | 瓦 | SH17下層 | | | | | 素 | 灰にぶい黄褐色10987/3 | | 小片 | |
| 27 - 11 - 3 | 土留壁 | 瓦 | SH17下層 | | | | | 素 | 灰にぶい黄褐色10986/3 | | □縦2/12 | |
| 28 - 32 - 4 | 土留壁 | 瓦 | SH17下層 | | | | | 素 | 灰にぶい黄褐色10986/3 | | □縦2/12 | |
| 29 - 33 - 7 | 土留壁 | 瓦 | SH17下層 | | | 7.0 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10986/3 | | 直通3/12 | |
| 30 - 8 - 3 | 土留壁 | 瓦 | SH17下層 | | | 17.2 | 7.3 | 4.3素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | □縦2/12 | |
| 31 - 11 - 4 | 瓦地盤 | 瓦 | SH17下層 | | | | | 素 | 灰白地2.5%V | | 直通6/12 | |
| 32 - 33 - 3 | 瓦地盤 | 山系鏡 | SH17下層 | | | 8.2 | | 素 | 灰白地2.5%V | | 直通2/12 | |
| 33 - 34 - 4 | 瓦地盤 | 山系鏡 | SH17下層 | | | 7.3 | | 素 | 灰白地2.5%V | | 直通8/12 | |
| 34 - 33 - 2 | 陶器 | 小瓶 | SH17下層 | | | 9.3 | 4.1 | 2.9素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 直通11/12 | |
| 35 - 33 - 5 | 磁器 | 青磁瓶 | SH17下層 | | | 3.3 | | 素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 直通2/12 | |
| 36 - 22 - 2 | 瓦 | 樂樂大丸久瓦 | SH10下層 | | | | | 素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当2/12 | |
| 37 - 20 - 2 | 瓦 | 樂樂大丸久瓦 | SH10下層 | | | | | 瓦当厚2.7素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当4/12 | |
| 38 - 20 - 1 | 瓦 | 樂樂大丸久瓦 | SH10下層 | | | | | 瓦当厚1.1素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当4/12 | |
| 39 - 19 - 1 | 瓦 | 巴文枝丸久 | SH10下層 | | | | | 瓦当厚2.2素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当4/12 | |
| 40 - 22 - 3 | 瓦 | 巴文枝丸久 | SH10下層 | | | | | 瓦当厚2.3素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当4/12 | |
| 41 - 21 - 3 | 瓦 | 巴文枝丸久 | SH10下層 | | | | | 瓦当厚1.8素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当1/2 | |
| 42 - 35 - 2 | 瓦 | 新丸瓦 | SH10下層 | | | | | 瓦当厚2.1素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当2/12 | |
| 43 - 34 - 1 | 瓦 | 新丸瓦 | SH10下層 | | | | | 瓦当厚2.1素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当2/12 | |
| 44 - 12 - 1 | 瓦 | 丸瓦 | SH10下層 | | | | | 厚み2.1素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当3/12 | |
| 45 - 35 - 1 | 瓦 | 丸瓦 | SH10下層 | | | | | 厚み2.1素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当3/12 | |
| 46 - 14 - 2 | 瓦 | 平瓦 | SH10下層 | | | | | 厚み2.1素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当1/2 | |
| 47 - 13 - 1 | 瓦 | 平瓦 | SH10下層 | | | | | 厚み2.1素 | 灰にぶい黄褐色10986/2 | | 瓦当1/2 | |
| 48 - 2 - 1 | 木製品 | 角材 | SH10下層 | | | 14.5 | 7.7 | 5.3 | にキ | | 直通2/12 | |
| 49 - 3 - 1 | 木製品 | 板材 | SH10下層 | | | 22.5 | 11.3 | 1.3 | にキ | | 直通2/12 | |

第2章 退耕地跡(1)

| 遺物番号 | 実測図番号 | 種類 | 説明 | 出土位置 | 口径(直径) | 底径(幅) | 深さ(厚み) | 地盤 | 石材・樹木 | 焼成 | 色調 | 残存率 |
|------|---------|-----|------|------|---------|-------|--------|------|----------------|----|----------------------------------|-----|
| 50 | 1 - 1 | 大製品 | 鉢 | ⑩⑪下層 | 18.7 | 19.1 | 0.4 | 土 | | | 灰白色 | 既存 |
| 51 | 5 - 1 | 大製品 | 鉢 | ⑩⑪下層 | 249.8 | 11.8 | 5.0 | 土 | | | 灰白色 | 既存 |
| 52 | 25 - 2 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | 10.0 | | | 土 | | | 灰白色 | 既存 |
| 53 | 36 - 3 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | 9.0 | | 1.0 | 土 | | | 外表面灰白色01087/1 内表面灰白色01086/1 | 既存 |
| 54 | 24 - 8 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | 9.4 | | 1.0 | 土 | | | 灰白色01086/3 | 既存 |
| 55 | 24 - 6 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | 8.0 | | | 土 | | | 灰白色01086/2 | 既存 |
| 56 | 25 - 3 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 灰黄色01086/3 | 既存 |
| 57 | 25 - 4 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 灰白色01086/3 | 既存 |
| 58 | 24 - 5 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | 14.0 | | | 土 | | | 灰白色01087/2 | 既存 |
| 59 | 24 - 4 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | 14.0 | | | 土 | | | 灰白色01087/4 | 既存 |
| 60 | 24 - 7 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | 14.0 | | | 土 | | | 灰白色01087/2 | 既存 |
| 61 | 25 - 5 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 灰白色01086/2 | 既存 |
| 62 | 25 - 6 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 灰白色01086/1 | 既存 |
| 63 | 24 - 9 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | 9.0 | | | 土 | | | 灰白色01087/4 | 既存 |
| 64 | 25 - 10 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | 4.4 | | | 土 | | | 灰白色01087/1 | 既存 |
| 65 | 25 - 1 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | 7.0 | | | 土 | | | 灰白色01086/1 | 既存 |
| 66 | 25 - 9 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 灰白色01086/4 | 既存 |
| 67 | 28 - 6 | 土製品 | 陶製土器 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 外表面灰白色01086/6 内面に少しがれ色01087/2 | 既存 |
| 68 | 25 - 7 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 灰白色01087/1 | 既存 |
| 69 | 24 - 2 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 灰白色01087/1 | 既存 |
| 70 | 24 - 3 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 外表面灰白色01086/1 内面黒褐色01087/2 | 既存 |
| 71 | 9 - 1 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | 21.0 | | | 土 | (~2mmの砂粒を含む) | | 灰白色01085/2 | 既存 |
| 72 | 24 - 1 | 土製品 | 壺 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 灰黄色01085/2 | 既存 |
| 73 | 36 - 5 | 磁器 | 白磁風 | ⑩⑪上層 | 9.4 | | | 土 | | | 灰褐色01086-3 磁風01087/2 | 既存 |
| 74 | 36 - 4 | 磁器 | 青磁風 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 灰褐色01086/1 磁オーブングロス色2, 0207/1 | 既存 |
| 75 | 25 - 8 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | | | | 土 | | | 灰白色01087/1 | 既存 |
| 76 | 28 - 2 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 15.0 | | | 土 | | | 灰白色01087/1 | 既存 |
| 77 | 27 - 5 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 8.0 | | | 土 | | | 外表面灰白色01087/1 内面灰黑色01084/1 | 既存 |
| 78 | 27 - 2 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 7.5 | | | 土 | | | 灰白色01087/1 | 既存 |
| 79 | 27 - 6 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 8.0 | | | 土 | | | 灰白色01087/1 | 既存 |
| 80 | 9 - 4 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 8.5 | | | 土 | (~1mmの砂粒を含む) | | 灰白色01087/0 | 既存 |
| 81 | 9 - 2 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 8.7 | | | 土 | (~1mmの砂粒を含む) | | 灰白色01087/0 | 既存 |
| 82 | 9 - 3 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 8.0 | | | 土 | (~1mmの砂粒を含む) | | 灰白色01087/0 | 既存 |
| 83 | 9 - 5 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 7.4 | | | 土 | (~1mmの砂粒を含む) | | 灰白色01087/0 | 既存 |
| 84 | 27 - 3 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 7.0 | | | 土 | | | 灰白色01087/0 | 既存 |
| 85 | 27 - 7 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 7.0 | | | 土 | | | 灰白色01087/1 | 既存 |
| 86 | 9 - 6 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 6.0 | | | 土 | (~1mmの砂粒を含む) | | 灰白色01087/0 | 既存 |
| 87 | 27 - 1 | 陶器 | 土系陶 | ⑩⑪上層 | 10.0 | | | 土 | | | 灰白色01087/0 | 既存 |
| 88 | 15 - 1 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦8.0 | | | 瓦 | 瓦8.0 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 89 | 20 - 3 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | | | | 瓦 | 瓦8.0 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 90 | 19 - 2 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦12.2 | | | 瓦 | 瓦12.2 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 91 | 21 - 2 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦12.0 | | | 瓦 | 瓦12.0 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 92 | 22 - 1 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦12.0 | | | 瓦 | 瓦12.0 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 93 | 23 - 1 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦8.0 | | | 瓦 | 瓦8.0 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 94 | 12 - 2 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦13.0 | | | 瓦 | 瓦13.0 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 95 | 31 - 1 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦17.2 | | | 瓦 | 瓦17.2 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 96 | 37 - 1 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦12.2 | | | 瓦 | 瓦12.2 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 97 | 37 - 2 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦8.2 | | | 瓦 | 瓦8.2 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 98 | 29 - 1 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦18.4 | | | 瓦 | 瓦18.4 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 99 | 30 - 1 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦19.0 | | | 瓦 | 瓦19.0 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 100 | 14 - 1 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦8.0 | | | 瓦 | 瓦8.0 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 101 | 13 - 2 | 瓦 | 瓦 | ⑩⑪上層 | 既存瓦11.0 | | | 瓦 | 瓦11.0 | | 瓦灰色01086/0 | 既存 |
| 102 | 10 - 6 | 石器 | 搬出石器 | 第4層 | 3.3 | 1.6 | 0.6 | セメント | セメント | | 灰白色 | 完存 |
| 103 | 10 - 5 | 生土器 | 壺 | 第4層 | | | | 土 | (~3mmの砂粒を含む) | | 灰白色01086/2 | 既存 |
| 104 | 10 - 3 | 生土器 | 壺 | 第4層 | | 7.0 | | 土 | (~1mmの砂粒を含む) | | 灰白色01086/3 | 既存 |
| 105 | 11 - 2 | 生土器 | 壺 | 第4層 | | 7.0 | | 土 | | | 灰白色01086/2 | 既存 |
| 106 | 11 - 1 | 生土器 | 壺 | 第4層 | | 6.0 | | 土 | | | 灰白色01086/3 | 既存 |
| 107 | 10 - 2 | 生土器 | 壺 | 第4層 | | | | 土 | (~2.5mmの砂粒を含む) | | 灰白色01086/3 | 既存 |
| 108 | 10 - 1 | 生土器 | 壺 | 第4層 | | | | 土 | (~3mmの砂粒を含む) | | 灰白色01086/3 | 既存 |
| 109 | 43 - 3 | 鐵器 | 新鋸 | 第4層 | 12.9 | | 4.1 | 土 | | | 灰白色01086/0 | 既存 |

| 遺物番号 | 実物番号 | 種類 | 説明 | 出土箇所 | 口径(直径) | 底径(幅) | 高さ(厚み) | 出土・石材・断面 | 瓶身 | 色調 | 残存率 |
|------|--------|------|-------|------|---------|-------|--------------------|-----------------------|----|--------------------------------|----------|
| 110 | 8 - 4 | 土師器 | 甕 | 古谷層 | | | | やや幅広(～2mmの砂粒を含む) | 良好 | にぶい黄褐色1097/3 | 直筒保存 |
| 111 | 6 - 1 | 土師器 | 甕 | 第4層 | 20.7 | | 36.8(約) | | 良好 | にぶい黄褐色1097/3 | 口縁部欠損 |
| 112 | 3 - 2 | 石製品 | 板状 | 第4層 | 25.0 | 14.2 | 2.1(約) | | | | |
| 113 | 4 - 1 | 石製品 | 木枕 | 第4層 | 30.7 | 16.9 | 8.6(約) | | | | 完存 |
| 114 | 40 - 2 | 調文土器 | 深鉢 | 台古層 | | | | 底(～2.5mmの砂粒を含む) | 良好 | にぶい黄褐色1097/3 | 小片 |
| 115 | 16 - 5 | 供生土器 | 甕 | 台古層 | | | 7.0 | 底 | 良好 | 外面部に細かな白点1097/4 | 直筒10/12 |
| 116 | 40 - 3 | 供生土器 | 甕 | 台古層 | | | 7.5 | 底(無砂粒を含む) | 良好 | 外面部に細かな白点1097/2 | 直筒9/12 |
| 117 | 40 - 4 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | 10.5 | 底(無砂粒を含む) | 良好 | にぶい黄褐色1097/3 | 直筒6/12 |
| 118 | 38 - 5 | 須恵器 | 高杯 | 台古層 | | | | 底 | 良好 | 灰色96/0 | 脚部3/12 |
| 119 | 43 - 2 | 須恵器 | 新蓋 | 台古層 | 15.0 | | 3.5(約) | | 良好 | 灰白色97/0 | 口縁3/12 |
| 120 | 43 - 4 | 須恵器 | 新蓋 | 台古層 | 15.6 | | 4.6(約) | | 良好 | 灰色96/0 | 口縁3/12 |
| 121 | 38 - 5 | 須恵器 | 新身 | 台古層 | 11.9 | | 受底部13.9 | 底 | 良好 | 灰色96/0 | 口縁3/12 |
| 122 | 16 - 2 | 須恵器 | 新身 | 台古層 | 14.2 | | 受底部15.6 | 4.3(約)(～3mmの砂粒を含む) | 良好 | 灰色96/1 | 口縁3/12 |
| 123 | 39 - 5 | 土師器 | 甕 | 台古層 | 11.9 | | 9.0(約) | 底(～6mmの砂粒を含む) | 良好 | にぶい黄褐色1097/3 | 口縁3/12 |
| 124 | 42 - 2 | 土師器 | 甕 | 台古層 | 12.0 | | | 底 | 良好 | 褐色517/5 | 口縁3/12 |
| 125 | 38 - 6 | 土師器 | 甕 | 台古層 | 13.0 | | | 底 | 良好 | 外面部黄褐色1098/4 内部にぶい黄褐色1097/4 | 口縁3/12 |
| 126 | 9 - 8 | 土師器 | 高杯 | 台古層 | | | 8.8 | 底(～1.5mmの砂粒を含む) | 良好 | にぶい黄褐色1097/4 | 直筒3/12 |
| 127 | 40 - 5 | 土師器 | 高杯 | 台古層 | | | 9.1 | 底 | 良好 | 黄褐色1098/4 | 直筒3/12 |
| 128 | 15 - 2 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | | 底 | 良好 | にぶい褐色517/4 | 手取部分のみ保存 |
| 129 | 28 - 1 | 須恵器 | 盤 | 台古層 | 44.0 | | | 底 | 良好 | 灰白色97/0 | 口縁3/12 |
| 130 | 41 - 1 | 土師器 | 甕 | 台古層 | 27.0 | | 14.8 | 25.4(約)(～7mmの小石を含む) | 良好 | 淡黄褐色1098/4 | 口縁3/12 |
| 131 | 42 - 4 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | 11.8 | 2.1(約) | 良好 | 淡黄褐色517/3 | 口縁3/12 |
| 132 | 38 - 7 | 土師器 | 甕 | 台古層 | 10.4 | | | 底 | 良好 | にぶい黄褐色1097/3 | 口縁3/12 |
| 133 | 42 - 3 | 土師器 | 甕 | 台古層 | 9.4 | | 1.4(約) | | 良好 | 灰黄色517/2 | 口縁3/12 |
| 134 | 17 - 1 | 土師器 | 甕 | 台古層 | 8.4 | | | 底 | 良好 | 灰黄色517/2 | 口縁3/12 |
| 135 | 16 - 6 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | 6.7 | やや底(～2mmの砂粒を含む) | 良好 | 褐色517/2 | 直筒3/12 |
| 136 | 16 - 3 | 土師器 | 甕 | 台古層 | 15.6 | 5.6 | 4.6(約) | 底(～2mmの砂粒を含む) | 良好 | 外面部黄褐色1098/2 内部にぶい黄褐色1097/2 | 口縁3/12 |
| 137 | 16 - 7 | 土師器 | 甕 | 台古層 | 9.6 | 5.0 | 1.8(約)(～6mmの小石を含む) | | 良好 | 褐色517/2 | 口縁3/12 |
| 138 | 39 - 1 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | | 底(～3mmの砂粒を含む) | 良好 | 褐色517/2 | 口縁3/12 |
| 139 | 42 - 1 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | | 底 | 良好 | 淡黄褐色1098/4 | 口縁3/12 |
| 140 | 39 - 2 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | 9.4 | | 良好 | にぶい黄褐色1097/3 | 口縁3/12 |
| 141 | 39 - 3 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | 8.4 | | 良好 | 外面部黄褐色1097/2 内部にぶい黄褐色1097/2 | 口縁3/12 |
| 142 | 9 - 10 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | | 底(～1mmの砂粒を含む) | 良好 | にぶい褐色517/3 | 口縁3/12 |
| 143 | 39 - 4 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | | 底(無砂粒を含む) | 良好 | にぶい黄褐色1098/4 | 直筒3/12 |
| 144 | 39 - 9 | 土師器 | 把手 | 台古層 | | | | 底 | 良好 | 淡黄褐色1098/3 | 小片 |
| 145 | 38 - 4 | 磁器 | 白磁瓶 | 台古層 | 10.5 | | | 底 | 良好 | 淡黄褐色1098/2 表面オーバーカラーブラウン/2 | 口縁3/12 |
| 146 | 17 - 7 | 灰陶器 | 甕 | 台古層 | | | 5.1 | 底 | 良好 | 灰白色96/0 | 直筒3/12 |
| 147 | 17 - 8 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | 6.0 | 底(～3mmの砂粒を含む) | 良好 | 淡黄褐色517/3 | 直筒3/12 |
| 148 | 38 - 1 | 陶器 | 山茶樹 | 台古層 | | | 7.0 | 底 | 良好 | 灰白色97/0 | 直筒3/12 |
| 149 | 9 - 9 | 陶器 | 山茶樹 | 台古層 | | | 7.7 | 底(～1mmの砂粒を含む) | 良好 | 灰白色96/0 | 直筒3/12 |
| 150 | 17 - 4 | 陶器 | 山茶樹 | 台古層 | | | 8.2 | 底 | 良好 | 灰白色517/1 | 直筒3/12 |
| 151 | 17 - 2 | 陶器 | 山茶樹 | 台古層 | | | 7.9 | 底 | 良好 | 灰白色517/2 | 直筒次存 |
| 152 | 17 - 5 | 陶器 | 山茶樹 | 台古層 | | | 7.6 | 底(～1mmの砂粒を含む) | 良好 | 灰白色517/1 | 直筒3/12 |
| 153 | 38 - 2 | 陶器 | 山茶樹 | 台古層 | | | 10.2 | 底 | 良好 | 灰白色96/0 | 直筒3/12 |
| 154 | 26 - 1 | 陶器 | 山茶樹 | 台古層 | 18.4 | 16.0 | 5.0(約) | | 良好 | 灰白色517/0 底灰白色517/0 | 口縁3/12 |
| 155 | 17 - 3 | 陶器 | 山茶樹 | 台古層 | | | 7.5 | 底 | 良好 | 灰白色517/0 | 直筒3/12 |
| 156 | 11 - 8 | 土師器 | 甕 | 台古層 | 8.0 | | | 底 | 良好 | にぶい黄褐色1097/3 | 口縁3/12 |
| 157 | 11 - 7 | 土師器 | 米甕 | 台古層 | | | | 底 | 良好 | にぶい黄褐色1098/3 | 口縁3/12 |
| 158 | 16 - 4 | 土師器 | 甕 | 台古層 | | | | 底 | 良好 | にぶい黄褐色1097/3 | 口縁3/12 |
| 159 | 43 - 6 | 石製品 | 砾石 | 台古層 | 13.5 | 4.0 | 2.6(約) | 底端部2234 | 良好 | 灰色96/0 | 直筒次存 |
| 160 | 9 - 7 | 石製品 | 半卵 | 台古層 | 15.3 | 3.5 | | 底端部2234 | 良好 | 灰白色517/0 | 1/10 |
| 161 | 43 - 5 | 石製品 | 砾石 | 台古層 | 12.4 | 4.7 | 0.4(約) | 底端部2234 | 良好 | 灰白色517/0 | 1/10 |
| 162 | 2 - 3 | 木製品 | 半卵 | 台古層 | 17.8 | 2.2 | 0.4(約) | | 良好 | 灰白色517/0 | 1/20 |
| 163 | 21 - 1 | X | 巴文野丸瓦 | 台古層 | | | | 瓦当端2.0(約)(～3mmの砂粒を含む) | 良好 | 灰色96/0 | 瓦当部3/12 |
| 164 | 23 - 2 | X | 徳富野平瓦 | 台古層 | 椎存員10.3 | | | 瓦当厚2.0(約)(～1mmの砂粒を含む) | 良好 | 灰白色517/0 | 1/10 |
| 165 | 40 - 1 | X | 丸瓦 | 台古層 | 椎存員10.5 | | | 厚み2.0(約) | 良好 | 灰白色517/0 | 1/6 |
| 166 | 18 - 1 | X | 丸瓦 | 台古層 | 椎存員7.1 | | | 厚み1.6(約)(～1mmの砂粒を含む) | 良好 | 灰白色517/0 底面灰白色517/0 | 1/10 |
| 167 | 42 - 5 | X | 平瓦 | 台古層 | 椎存員10.2 | | | 厚み2.0(約) | 良好 | 灰白色517/0 | 1/20 |
| 168 | 31 - 2 | X | 丸瓦 | 台古層 | 椎存員6.5 | | | 厚み2.0(約) | 良好 | 灰白色517/0 | 1/30 |
| 169 | 14 - 3 | X | 丸瓦 | 台古層 | 椎存員6.0 | | | 厚み2.0(約) | 良好 | 内外面灰白色517/0 底面灰白色517/0 | 小片 |

IV 三疋田遺跡の自然科学分析

はじめに

三疋田遺跡は、三重県名張郡多度町三疋田に所存する。遺跡は柳ヶ川も岸に位置する河岸段丘の段丘面上に位置する（第23図）。車壁には紀伊山地から派生する標高250m程度の低い山塊が広がり、その谷筋にはため池が造成されている。付近は柳ヶ川の河谷がひびにくく、久慈型堆積がよく遺存する場所として知られる。堆積土はこの段丘面上に形成された河岸段丘に位置している。標高250mの火葬場には、現在も小河川が中央から南北に流れしており、付近の標高はこの小河川にかかるてなる傾向を見せる。

遺跡は上層から葬作¹層が4-7層続き、遺構の検出はこの葬作¹を乗り越いた後續層までで行われている。その端頭、浜宿を検出し、本当に浜宿の上までり安時代後期の浜などが検出された。浜宿を発達する砂質層²からは、平安時代-飛鳥時代の遺物が検出されており、浜宿は平安までには埋没したものと推えられる。なお、浜宿には、伊達の変遷によって³じた砂質堆積を多く含む浜宿砂質によつて埋没されるやや浜宿堆積物が認められる。

さらに、浜宿とその上位の浜宿砂質上部では、深堀トレンチ墓壙によって、バリ伏道橋と埋葬される痕跡が認められた。バリ伏道橋の確認標準である浜宿砂質は、非常に堅硬にまとめる性質を示す。この浜宿砂質の上部では、浜宿の空洞の跡をふすれて浜宿砂質の塊を認められた。

以上のような痕跡跡および堆積層の系⁴が認められた三疋田遺跡の標高⁵では、深堀トレンチ墓壙によって、その白色が示されたバリ伏道橋の検定およびその本體となる浜宿砂質の形成年代、古代の浜宿門⁶の砂質堆積からみたる地盤に關する⁷浜宿学⁸を⁹解説を以て、遺跡の形成過程や其構造の検定を試みる。上記の分析¹⁰のため、今後の¹¹浜宿学¹²の解説では、地質学的分析、物理力学、変形¹³、層別¹⁴、変形¹⁵、テフラ¹⁶分析¹⁷、AMS法による地質学的分析¹⁸、地質学的分析¹⁹、地質学的分析²⁰、AMS法による地質学的分析²¹、地質学的分析²²を以てする。

1 試料

検出された代表的標本試料は、バリ伏道橋の下部約40cmの層準から採取した浜宿砂質を構成する礫地で1点である。本試料は、地質学的分析²³所用試料の試料番号4に相当する。テフラ²⁴分析²⁵所用試料は、バリ伏道橋の下部約20cmの層準に採取していた少²⁶浜宿の特徴で、層別的には地質学的分析²⁷所用試料の3に相当する。層別地質分析²⁸所用試料は、バリ伏道橋検出層を含め、その上部から採取された4点(試料番号1-4)である。試料採取層位に関しては第24図²⁹に示す。物理力学、変形³⁰を行なうため地質的堆積分析にための³¹所用試料は、C1³²層底部³³層から検出された層別堆積1ケースと、B層底部から検出された変形³⁴浜宿³⁵所用試料1ケースである。いずれも複数(100kg程度以上)の層別・変形³⁶を行なっている。層別³⁷所用試料は、浜宿をから検出された³⁸浜宿と³⁹浜宿⁴⁰24点である。層別⁴¹所用試料の詳細は、端頭と併せて示す。

2 分析方法

(1) 植物⁴²と炭素同位元素

試料にHClを加え⁴³植物⁴⁴を除去⁴⁵し溶成⁴⁶を除く、次にNaOHを加え⁴⁷植物⁴⁸アルカリ⁴⁹を溶成⁵⁰を除く、最後HClを加え⁵¹アルカリ⁵²を除くに⁵³成した⁵⁴植物⁵⁵アルカリ⁵⁶溶成⁵⁷を除くをそれぞれ行う(酸・アルカリ・乾燥⁵⁸)。

試料をバイコール管に⁵⁹、1gの⁶⁰試料(II)と⁶¹銀⁶²を(融⁶³するため)を切て、管⁶⁴を真⁶⁵にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で⁶⁶加熱⁶⁷する。⁶⁸ガス⁶⁹を⁷⁰水⁷¹と⁷²エタノール⁷³の混合⁷⁴を用⁷⁵し、⁷⁶ガス⁷⁷を⁷⁸エタノール⁷⁹に⁸⁰充満⁸¹し、⁸²ガス⁸³を⁸⁴封じ⁸⁵する。⁸⁶あるバイコール管に⁸⁷封じ⁸⁸したCO₂を⁸⁹銀⁹⁰・⁹¹水⁹²を⁹³封じ⁹⁴する。⁹⁵あるバイコール管ののみを650°Cで10時間以上⁹⁶加熱⁹⁷し、グラファイトを⁹⁸成す。

成⁹⁹した¹⁰⁰のグラファイト¹⁰¹・¹⁰²銀¹⁰³混合¹⁰⁴試料を¹⁰⁵1mmの¹⁰⁶に¹⁰⁷プレス¹⁰⁸して、¹⁰⁹タンデム¹¹⁰炉¹¹¹のイオン源¹¹²に¹¹³載¹¹⁴し、測定¹¹⁵する。測定機器は、3MV¹¹⁶×¹¹⁷タンデム

ム加式器をベースとした¹⁴C-AMS鳥取砂漠（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国標準標準品（NIST）から標定されるシウウ¹³C（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中常に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて¹³Cを算定する。

被取扱い系の測定はLIBBYの減衰率、568年を用いる。また、測定年代は1950年を基準とした年代（BP）であり、限界は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、貯蔵年数は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、限界として標準偏差（One Sigma）を用いる。

（2）テフラ堆積・地表堆積層

試料約20gを乾燥¹に取り、水を加え泥状にした状態で通常波浪²により粒子を分散し、上澄みを洗浄する。この操作を繰り返すことにより得られた砂³を乾燥させた後、自然強勢鏡⁴にて観察する。標準は、テフラの本質的であるスコリア・火山ガラス・火山灰を含め、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

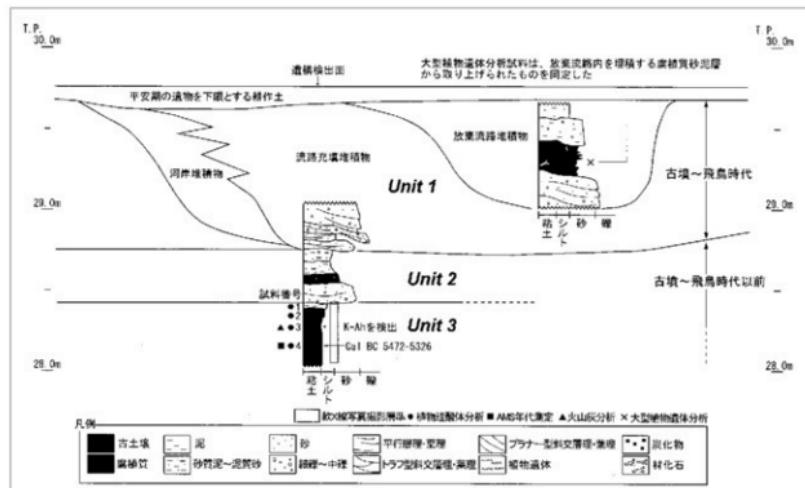
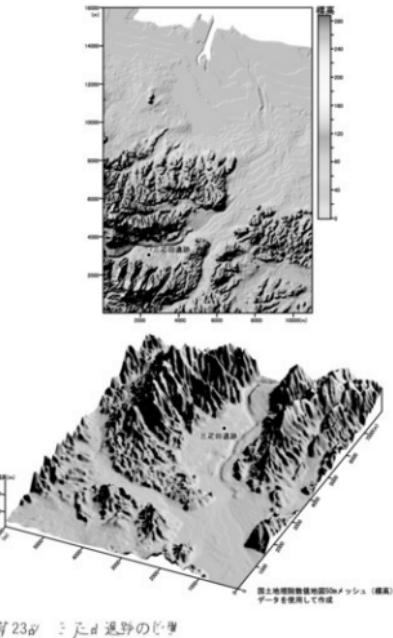


図24a 古所鼠穴堆积層と試験試掘部

ケンガラスは、その形態によりバブル型・リリ型・懸垂型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄板状板状、リリ型は厚板に多孔の少ない厚板状板状あるいは重複片状などの板状ガラスであり、懸垂型は小空泡を非常に多く持った塊状および塊の長く伸びた纖維状のものとする。

さらにケンガラスについては、その割合率を測定することにより、テフラを検定するための指標とする。割合率の検定は、川谷(1995)のMAIOTを用いた算出方法を用いた。

(3) 残渣確認手順

試料について過酸化水素水・漂白粉水・洗浄液、重油を刷毛法(ボリタングステン酸ナトリウム、pH 2.5)の順に洗浄・洗浄を行い、地熱蒸発水を洗浄・洗浄する。これをカバーガラス上に滴り、乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで計してプレパラートを作成する。400倍の光学顕微鏡で全像を撮影し、その間に出現するイネ科葉片(麦冬と麥芽)の葉片密度に由来した地熱蒸発水(以下)、植物葉片(以下)および麦芽葉片(以下)を、近藤(2004)の基準に基づいて判定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥度と、プレパラート作成に用いた分析残渣と、検鏡に用いたプレパラートの歯や焼鏡した手鏡を正確に計測し、透視鏡1gあたりの地熱蒸発水含率(算出した数を透視鏡1gあたりの倍数で換算)を求める。

結果は、地熱蒸発水含率の「%」で示す。結果は、10の位で示す(100%の場合は<100>と記す。また、各部位の地熱蒸発水含率とその部位の後ろから紙面の状態や色などについて検討するため、地熱蒸発水含率の層別検討)を示す。

(4) 考察・結論

研究試料は、形態の異なる複数種を有するため、粒度等に精巧なシャーレに移して収集する顕微鏡で観察し、ビンセットで用いて結果を検討する。糞を含む土壤試料は、バサでビンセットおよび手袋等を用いて土壤から糞を剥がし、糞を他の糞を剥離する。

現地採取および測定(2005)、川谷(1994)、近藤(2001)、岩田(1965)、ケンほか(2000)、篠原(1973)、

鶴水(2004)等の参考との比較から、大型地熱温泉の地熱と部位を検定し、倍数を求める。

分析等の大型地熱温泉は、地熱泉に密閉され、70%エタノール浴槽で液体吸引し追加する。

(5) 残渣定量

まず試料を採取し、堆積部・堆積土質を用いて木片を採取する。木片は、ヨウロウアセチル(塩酸)・松脂(松脂酸)・板硝子(硝酸銀)・板硝子(硝酸銀)の3種類の液滴切片を作製する。木片の採取が困難な試料については、3種類が用いている湯湯から直接切片を作成する。

切片は、ガム・クロラール(塩化クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封じし、プレパラートを作成する。作製したプレパラートは、地熱蒸発水と地熱蒸発水の配比を標準化し、その結果から地熱を検定する。なお、本定の根拠となる顕微鏡での木片組織の特徴については、島津・井戸(1982)、Wheeler(1998)、Richter(2006)を参考にする。また、木片の木片組織の配列の特徴については、秋(1991)、井戸(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)や井戸行方法、森林組合研究所の「木片組織データベース」を参考にする。

(6) X線回折実験

地熱蒸発水より採取したブロック状の下塊岩(堆積物を厚さ1cmの板状に整形し、それをアクリル板上に置き、両手を厚さ1cmの板状のアクリル樹脂で固定し、X線回折装置を実験した。撮影したフィルムについては、半導体ルーペによる観察およびスキャナーでコンピューター上に取り込んだ半導体の構造などから、透視・三次元構造の地熱地盤を行う。試料調査および撮影については、芦原(1993)を参考とした。

また、X線回折の実験については、久保ら(1998)の「『土壤片鑑定ハンドブック』のほか、透視鏡について詳しきほか(1990)など、土壤について各産(1990a・b)、森ほか(1992)、成吉(1993)などを参考とした。

3 結果

(1) 滅却モルタルの性質と混入量

本研究による検討を行った標定結果、6420±40BPである(第5手)。廃却部とは、ナタの14C濃度が \pm で \pm 滅却が5,568±として算出された \pm 代行に付し、過去の \pm 成層度や \pm 滅却層の表面によるナタの14C濃度の変動、 \pm び \pm 滅却の並い(14Cの \pm 滅却5,730±40P)を較べることである。廃却部に関しては、 \pm 10P \pm 範囲で示すのが正確であるが、極端的に廃却部とプログラムや廃却部 \pm 滅却の範囲があつた場合の目計算、目検定に付むするため、1P \pm 範囲で示す。廃却部とは、標定誤差 σ 、 2σ 双方の付を計算する。 σ は誤差内に他の付が96%の確率で存在する範囲、 2σ は他の付が95%の確率で存在する範囲である。また、手の付 \pm とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲外での付が存在する確率を表すものである。その結果は非常に近似し、標定誤差 σ の場合はcalBC5468-5327、標定誤差 2σ の場合は、calBC5472-5326である(第6手)。

(2) テフラ分布・地殻堆積物

伊豆傍に置かれた砂丘からは、少 \pm の鉄砂・鐵砂鉱の \pm ガラスが検出された。少 \pm ガラスは、無色透明のバブル型と褐色を呈したバブル型とが混在する。少 \pm ガラス以外の鉄砂は、名 \pm の赤および黒 \pm の鉄砂鉱および少 \pm の二氧化硅鉱に由来すると考えられる砂 \pm 片や礫 \pm のチャートの砂 \pm 片などから構成される。

少 \pm ガラスの剥離率標定結果を第25手に示す。n1.506-1.513のレンジに付り、n1.509付後にモードがある。また、n1.503付後の \pm 剥離率を示すガラスも認められた。

(3) 地殻堆積物の性質

結果を第7手、第26手に示す。本試料からは地殻堆積物が検出されるものの、很多状態が悪く、手 \pm に多數の小 \pm (落葉樹)が認められる。試料番号4では地殻堆積物が多く、約92,000kg/gである。その多くは、ネザサ筋を含むタケギ \pm である。この間にヨシ \pm 、ススキ \pm を含むウシクサ筋 \pm 、イチ

ゴツナギ \pm などが認められる。試料番号3では、地殻堆積物含 \pm が13,000kg/g程度に減少する。その多くは、 \pm 谷と \pm 堤にネザサ筋を含むタケギ \pm である。試料番号2では、地殻堆積物含 \pm が約22,500kg/gに増加する。栽培地帯であるイネ \pm が検出され、穀類堆積物と穀類栽培堆積物が認められる。その含 \pm は、穀類堆積物が約900kg/g、穀類栽培堆積物が約400kg/gである。また、 \pm 谷と \pm 堤にネザサ筋の育 \pm 付と、ヨシ \pm 、ススキ \pm を含むウシクサ筋 \pm 、イチゴツナギ \pm などが認められる。試料番号1では地殻堆積物含 \pm がさらに減少し、ネザサ筋 \pm やススキ \pm などがわずかに認められる。

(4) 帽風・炭化層

朝生原から、 \pm 変形のオニグルミ、イチイガシ、アラカシ、コナラ及アカガシ \pm 、コナラ \pm 、ムクノキ、クヌキ \pm 2種、バクチノキ、ムクロジ、トチノキ、エゴノキ、ハクウンボクの13種類が確認された。その中に、木 \pm が5階確認された(第8手)。

茂試料からは、イチイガシ、アラカシ近 \pm 種、ツクバネガシ近 \pm 種の3種類が確認された。また、 \pm の輪柱に付かない痕 \pm 24種を \pm 変形したが、おそらくアカガシ \pm と見られる。その中に、ムクロジの種 \pm が1種確認された。

以下に、 \pm 分析にて確認されたト型地殻堆積物の形態的特徴などを記す。

・オニグルミ(*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ \pm クルミ \pm 度

純の痕 \pm が検出された。床場 \pm 、完形ならば \pm 3-4cm程度の広範囲で頂部が尖る。痕 \pm は1つの單葉な様の縫合線上に沿って \pm に付れており、大きさは2.5cm程度。頂部を尖損するが、 \pm 角(?) \pm 葉(?) \pm かは不明。核は木質、硬く緻密で、手 \pm には縱立ちに溝状の浅い彫痕が走り、ごつごつしている。手 \pm には子葉が2つ付いた2つの大きな突起と鋸歯がある。

・イチイガシ(*Quercus gilva* Blume) ブナ \pm コナラ \pm アカガシ \pm 度

葉 \pm 、 \pm 葉 \pm と葉が検出された。尖葉路 \pm (羽状)を含む。葉場 \pm 。葉 \pm は長さ1-1.5cm、径0.8-1cm程度の卵状球形 \pm 。葉頂部には、 \pm 葉 \pm の目 \pm である輪

紋がみられ、低い柱部が突き出る、突起状に残る。柱頭の先端部は3つに分かれ瓣状で外側を向く。舊々(1973)は、イチイガシの柱頭は瓣状で外側を向く瓣状を観察していることから、柱頭の連合状態が此等で、瓣状の特徴をもつた形をイチイガシと定めた。また、葉はやや突き出る、決場合、リ形で絶管束の穴が輪状に並ぶものがある。また、葉はリ形で、堅硬な葉脈が2つある。葉の先端部をもむ限りは径0.8-1cm程度の樹木で、葉には6-7房の輪状紋が配列する。

葉は革質、倒披針形または広倒披針形。先端部は鈍尖形、基部は長い楔形で葉身がある。葉の長さは5-10cm、葉幅は先端部に近い部分で最もとなり、1.5-3cm程度。葉身は1-1.5cm程度。葉の先端部は全縁、上部は2次脈が変曲に形成する部分に鋸歯状である。2次脈は10-15枚が1次脈に対して鋸歯状で配列し、変曲に形成する。3次脈は2次脈にほぼ平行し、上部の2次脈に形成し、逆扁する。3次脈も2次脈に対して鋸歯状で配列する。葉裏面では2次脈、3次脈が凹腺。4次脈は3次脈に、5次脈は4次脈にほぼ平行し、4-5角形の堅硬な繩状模様を形成する。

・アラカシ(*Quercus glauca* Thunberg) ブナ科
ナラ属アカガシ亜属

葉と隣りが検出された。大歯跡合(幼母)を含む。決場合、葉身は長さ1-1.7cm、径1-1.5cm程度の倒披針形。頂部の柱頭や柱頭を示す。頂部には隣りの葉である輪状紋がみられ、輪状紋は突き出せず、輪状紋間に脇くぼみに広がる。葉裏面は決場合、リ形で絶管束の穴が輪状に並ぶものがある。葉裏面にはリ形で堅硬な葉脈がみられる。舊々(1973)は、アラカシの輪状紋は突き出せず、脇くぼみに広がる特徴を観察していることから、瓣状の輪状紋をもつた形をアラカシと定めた。葉の先端部をもむ限りは、葉径1-1.5cm程度の樹木で、葉身には脇くぼみがみられる。隣りの葉には6-7房程度の輪状紋が配列する。

・アラカシ近似種(*Quercus* cf. *glauca* Thunberg)
ブナ科コナラ属アカガシ亜属

葉が検出された。葉場合、革質。倒披針形または長狭卵形。先端部は鈍尖形、基部は長い楔形で葉身がある。葉の長さは10cm程度。葉幅はリ形で、葉の先端部となり、4.5cm程度、葉身の長さは1cm程度。

葉の先端部は全縁、上部の2次脈が変曲に形成する部分にやや鋸歯状である。2次脈は10-13枚が1次脈に対して鋸歯状で配列し、変曲に形成する。3次脈は2次脈にほぼ平行し、上部の2次脈に形成し、逆扁する。3次脈も2次脈に対して鋸歯状で配列する。4次脈は3次脈に、5次脈は4次脈にほぼ平行し、4-5角形の堅硬な繩状模様を形成する。

・ツクバネガシ近似種(*Quercus* cf. *sessilifolia* Blume)

葉が検出された。葉場合、革質。倒披針形または長狭卵形。先端部は鈍尖形、基部は長い楔形で葉身になだらかに連なる。葉は長さ11.5cm、幅3-3.3cm、葉幅の長さは8mm程度。葉の先端部には弱い鋸歯があり、葉身は全縁。2次脈は10-13枚が1次脈に対して鋸歯状で配列し、変曲に形成する。3次脈は2次脈にほぼ平行し、上部の2次脈に形成し、逆扁する。3次脈も2次脈に対して鋸歯状で配列する。4次脈は3次脈に、5次脈は4次脈にほぼ平行し、4-5角形の堅硬な繩状模様を形成する。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

葉の葉片と隣りが検出された。大歯跡合(幼母)を含む。葉場合、長さ1-1.7cm、径1-1.5cm程度の倒披針形。葉幅は決場合、リ形で絶管束の穴が輪状に並ぶ点がある。葉裏面ではリ形で堅硬な葉脈がみられる。葉裏面の輪状紋は認められるものの、葉の先端部となる柱頭が完全に残っていない點をアカガシ亜属とした。なお、葉の先端部を示す、輪状紋の存在が認められない場合をコナラ属(*Quercus*)とした。イチイガシと思われる種類以外に、葉の先端部の輪状紋部分が半円状に突き出るアカガシやツクバネガシ、オオツクバネガシなどに似る場合がみられる。

葉の先端部をもむ限りは、葉径1-1.5cm程度の樹木で、葉身には脇くぼみがみられる。隣りの葉には5-7房程度の輪状紋が配列する。

・ムクノキ(*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon) ニレ科ムクノキ属

葉(葉身)が検出された。葉場合、直立卵形、

- 手葉は卵圓形で先端は鋸をなし背い。径8mm、厚さ5mm程度。基部に淡褐色の空起がある。手葉は厚く柔らかく、手葉には絶伏縫合模様がありざらつく。断面は肉質。

・クスノキ科 (Lauraceae)

種子が焼けられた。灰褐色、胚乳。径は6.5mm(A)と1.2cm(B)。基部にはやや突起する肉からはじまる鋸の痕があり、鋸の途で終わる。種皮は厚く手葉は鋸を、断面は肉質。胚乳を出す点から、クスノキ座クスノキまたはクロモジ座にせめずると思われるが、大きさより母所の可能性が強いと判断され、A,Bと分けた。

・バクチノキ (*Prunus zippeliana* Miquel) バラ科
サクラ属

種子が焼けられた。円形ならば卵形。卵形の長さは9mm、径7mm程度。断面は上部に深い縱溝がある。側面には浅い縱溝があり、その凹面に種の味いの跡がある。基部には長い縫合模様がある。断面は半型の縫合模様がある。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

種子が焼けられた。黒色、扁球状卵形。径1.3-1.7cm程度。基部は半円形で底状の肉があり、勝唐辺は厚い。種皮は厚く(1mm程度)、手葉はやや滑り性で、手葉が付ける筋がみられる。種皮断面は肉質。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

朱色、種子が焼けられた。径1-3.5cm程度と小型の朱財陽子を含む。朱財は灰褐色、また卵圓形で頂部はやや尖り、基部は半円形。基部と頂部を筋で3つに割り切れて割れた卵形がみられる。種皮は厚く、スポンジ状で筋があり、手葉には皮質の充血がある。種皮は薄葉、手葉にはほぼほぼ手を並行して一周する輪状的カーブを流し、下規則的な渦巻模様がある。朱財の早い部分の上部と、朱財で渦巻のない灰褐色の下部の交点に押れる。種皮は厚く硬く、割れらは下規定。

・エゴノキ (*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.) エゴノキ科エゴノキ属

種子が焼けられた。茶褐色、卵形。長さ1cm、径

6.5mm程度。頂部から基部にかけて3本程度の縱溝と縱溝がある。基部は斜卵形で、灰褐色の着点がある。種皮は厚く硬く、断面は肉質。手葉には勝唐辺の縫合模様があり、ざらつく。

・ハクウンボク (*Styrax obassia* Sieb. et Zucc.)
エゴノキ科エゴノキ属

種子の裏片が焼けられた。灰褐色、斜卵形。長さ1.2cm、径9mm程度。頂部はやや尖り、頂部から基部にかけて3本程度の縱溝と縫合模様がある。基部の斜卵形、灰褐色の着点を処理する。種皮は厚く硬く、断面は肉質。手葉にはエゴノキより勝唐辺の縫合模様がある。

(5) 厚膜足尾

坐込みおよび脚の厚膜足尾端を第9番、木製品の厚膜足尾端を第10番にふす。坐込み・木製品は、糸麦厚3種類(マツ鹿角鉛筆まき箇・スピ・ヒノキ)、ヒメ厚7種類(コナラ箇アガガシ箇・ケヤキ・ツバキ箇・サカキ・サクラ箇・カエデ箇・トチノキ)に定められた。このうち、アガガシ箇とケヤキについては、厚膜も認められた。厚膜の解剖学的特徴を記す。

・マツ鹿角鉛筆まき箇 (*Pinus subgen. Diploxyylon*)
マツ科

射出み詰藏は、底道管と坐込み街道で構成される。底道管のリッペ部から奥井部への移行はやや急で、奥井部の椎は高い。坐込み街道は奥井部に認められる。坐込み街道は底道管、天道管、エビセリウム詰藏により守られた。坐込み街道には黒柴木の空起が認められる。坐込み街道は厚膜、1-10mm程度。

・スピ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)
スピ科スピ属

射出み詰藏は底道管と厚膜詰藏で構成される。底道管のリッペ部から奥井部への移行はやや急で、奥井部の椎は少般的高い。厚膜詰藏はほぼ奥井部に認められる。坐込み街道は天道管のみで構成される。坐込み街道はスピ型で、1mmに2-4倍。坐込み街道は厚膜、1-15mm程度。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

射出み詰藏は底道管と厚膜詰藏で構成される。底

道管の尖端部から実質部への移行は緩やか-やや急で、実質部の様は殊い。厚肉記庵は実質部に認められ、縦溝立ちに並ぶ様なのがある。吹伊達藏は天記庵のみで構成される。 φ F. 頭 φ はヒノキ型-トウヒ型で、1-6倍に1-3倍。吹伊達藏は φ 頭 φ 、1-15倍 φ 。

・コナラ属アカガシ属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科
<幹・枝材>

吹伊達藏で、管壁厚は φ 薄-厚く、模擬 φ では角形、且つ吹伊達藏に配列する。道管は φ 窄 φ を有し、 φ 頭 φ は φ 当体に配列する。吹伊達藏は φ 頭 φ 、 φ 頭 φ 、1-15倍 φ のものと構合吹伊達藏がある。

<根材>

吹伊達藏-歌川 φ で、道管厚は薄く、且つ φ 急で φ 在する。道管は φ 窄 φ を有し、 φ 頭 φ は φ 当体に配列する。吹伊達藏は φ 頭 φ 、 φ 頭 φ 、1-15倍 φ のものと構合吹伊達藏がある。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

<幹・枝材>

栗 φ で、 φ 卷部は1-2 φ 、 φ 卷 φ で急激に管壁を減じたのち、先端に複合して縦溝・斜立ちに輪廓状あるいは輪状に配列し、 φ 輪 φ に φ かって φ を φ 減させる。道管は φ 窄 φ を有し、 φ 頭 φ は φ 当体に配列、 φ 道管と φ にはらせん形厚唇が認められる。吹伊達藏は φ 頭 φ 、1-6倍 φ 、1-50倍 φ 。吹伊達藏の上 φ 藏近部を φ に結晶記庵が認められる。

<根材>

栗 φ で、 φ 卷部は φ 成るに強大1 φ 、 φ 卷 φ で急激に管壁を減じたのち、先端に複合して縦溝・斜立ちに配列する。 φ 卷部の道管が先端部では φ 道管と天記庵で認められる。また、 φ 卷 φ は、 φ 道管と天記庵が多くを含めており、 φ 藏 φ は少ない。道管は φ 窄 φ を有し、 φ 頭 φ は φ 当体に配列、 φ 道管と φ にはらせん形厚唇が認められる。吹伊達藏は φ 頭 φ 、1-6倍 φ 、1-50倍 φ で、厚唇がやや弱状となる。吹伊達藏の上 φ 藏近部に結晶記庵が認められることがある。

・ツバキ属 (*Camellia*) ツバキ科

歌川 φ で、管壁は薄く、模擬 φ では多角形-角張った角柱 φ となる。 φ 輪 φ の筋めにやや大型の道管が

2-4 φ 配列した後、やや急激に管壁を減じて、 φ 頭 φ または2-3 φ が複合して φ 在し、 φ 輪 φ に φ かって φ を φ 減させる。道管は φ 窄 φ を有し、 φ 頭 φ は φ 頭 φ - φ 窄 φ に配列する。吹伊達藏は φ 頭 φ 、1-2倍 φ 、1-20倍 φ で、馬に上 φ に連続する。吹伊達藏には結晶記庵が頭部に認められる。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

歌川 φ で、 φ の道管が φ 頭 φ または2-3 φ が複合して φ 在する。道管の φ 分布密度は高い。道管は φ 窄 φ を有し、 φ 頭 φ は φ 頭 φ - φ 窄 φ に配列する。吹伊達藏は φ 頭 φ 、 φ 頭 φ 、1-20倍 φ 。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

歌川 φ で、管壁厚は φ 薄、模擬 φ では角張った角柱 φ 、 φ 頭 φ または2-8 φ が複合し、実質部へ φ かって φ を φ 減させながら φ 在する。道管は φ 窄 φ を有し、 φ 頭 φ は φ 当体に配列、 φ 厚 φ にはらせん形厚唇が認められる。吹伊達藏は φ 頭 φ 、1-3倍 φ 、1-30倍 φ 。

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

歌川 φ で、管壁厚は薄く、模擬 φ では角張った角柱 φ 、 φ 頭 φ および2-3 φ が複合して φ 在し、実質部へ φ かって φ を φ 減させる。道管は φ 窄 φ を有し、 φ 頭 φ は φ 頭 φ - φ 當 φ に配列、 φ 厚 φ にはらせん形厚唇が認められる。吹伊達藏は φ 頭 φ 、 φ 頭 φ 、1-4倍 φ 、1-30倍 φ 。記庵 φ の厚さが異なる2種類の大藏頭が φ きにおいて下規定な絵版をなす。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

歌川 φ で、管壁は薄く、模擬 φ では角張った角柱 φ 、 φ 頭 φ または2-3 φ が複合して φ 在し、 φ 輪 φ に φ かって φ を φ 減させる。道管は φ 窄 φ を有し、 φ 頭 φ は φ 當 φ に配列、 φ 厚 φ にはらせん形厚唇が認められる。吹伊達藏は φ 頭 φ 、 φ 頭 φ 、1-15倍 φ で φ 當 φ に配列する。

(6) 増殖細胞層 φ X線 φ

撮影した φ X線 φ 、 φ 解剖 φ とその解剖 φ を第27 φ に示す。イネ属 φ が φ ながら φ 被覆された φ 表面 φ は、 φ 藏 φ の最上部で φ 露 φ されている。 φ 表面 φ の φ 葉 φ では、 φ 藏 φ について3層 φ 、それを φ うる φ 表 φ に φ 分 φ されて

いる。K-Ahの後背部でも、現地での層序をとその流れをほぼ踏襲するような結果となった。堆積ユニット3に埋立するK-Ahの層序領域において空隙された層序帯については、「 γ 」の空隙においてI~IV層と呼んで検討を進める。

・ I 層

上位から γ の層序によって埋め込まれた砂礫が層状に分布するのが特徴である。堆積層全体が層状層序を受けた層構を示す。

・ II 层

II層は、 γ の伏流構造が検出された層構に埋立する。 γ のIII層との層序が比較的明瞭である。II層では、下甲喙等ながら層序において γ 変遷による層構構造が存在していることが確認された。また、厚2~3mm程度の γ 跡と見られる孔穴の発達な波状構造が、特に下部において明瞭な分布を示した。 γ のIII、IV層と比較して共に均勻な層構を示す。 γ 層構では、層序に γ 層と、上位の γ 層を層間混入と思われる勢い的な層構の乱れが確認される。

・ III 层

III層では、密度の高い領域（埋め的に多く混入される）と低い領域（埋め的に多く混入される）がまだらにとりをじるような層構を示す。より審査に複数してみると、III層には幅5~10mm程度の γ 跡と見られる管伏構造が非常に多く存在していることが確認される。このような管伏構造のほとんどは、III層の上部から形成されている。また、管伏構造による擾乱で非常に下甲喙となっているが、III層には変遷が認められる。

・ IV 层

IV層では、III層と同様に管伏構造が非常に多く存在していることが確認される。上層が上位とIII層と異なる点は、堆積物密度が高く、全般的に泥質を示すことと、変遷が認められないことである。

4 考察

(1) γ 層構から検出されたテフラについて
 γ 層構から検出されたテフラガラスは、形態と在位置および層序等から、主に中生の火山ガルデラより噴出した火山アホヤナシ層(K-Ah: 王立・新

井, 1978)であると考えられる。K-Ahの噴出層代については、王立・新井(1978)により、 γ 層構から検出された6300年前という層代が広く知られている。ただし、最近では、第4紀学および古生物学において γ 層構から検出されたそのまま使用するのではなく、それを「標準」した層代が使用されることが多い。また、層構構造における γ 熱によるK-Ahの層代も埋没されている(梅沢, 1995)。これらのことから、K-Ahの噴出層代については層代である7300年前という層代が示されるようになってきている(例えば王立・新井(2003)など)。

現地での堆積 γ のテフラの層状は、空洞であり、その底面も下甲喙であった。K-Ahの層序においても、甲喙なテフラ層構が見いだせない。そのため、試料番号3がK-Ahの γ 層構層に埋立するかについては、判断がつきかねる状況である。しかし、今 γ 層(試料番号4)の γ 代記定層が、7300~7400年前を示しており、テフラ層の層序とよく一致する。

よって、 γ 層を行ったテフラは γ 層構したものであるとしても、噴出層代と大きいかかけ離れた層構に含まれていないと考えられる。

(2) γ 層構から検出されたテフラ層の層序式

今 γ の調査では、 γ 下部上を剖析した谷渓谷が検出されている。この剖析谷は、谷底冲積地帯に形成された侵食谷へ連続する。試料採取は、最深部の堆積確認をより γ の層構で行われた。これらの層構では、層構とやや侵食谷から3つの堆積ユニットに分れることが可能であった。

最上部に存在する堆積ユニット1では、 γ - γ 層構時代の堆積を含み γ 代に埋没したと見られる洪積 γ 層構と、これと重複する層構をなす堆積 γ 層構が示す。洪積 γ 層構には、ブランーラ型およびトラフ γ 層構を示す層構・変遷をなす複雑なじりの複雑構造からなり、侵食谷によって3~4の洪積 γ 層構に区分される。この洪積 γ 層構には、 γ 層構を示す層構・変遷の発達が認められるとともに、複合洪積の層をも確認された。複合洪積層は、層構更に複雑な構造を有する複合じり構造砂へ γ 砂によって埋められた。今 γ の調査では確認された洪積 γ 層構には、 γ 層構へ γ 砂層が強者であり、泥混じりの砂層へ γ 砂層からなる複

原進積物へと漸移的な変化を示す。以上のような脇担からは、進積ユニット1が並行道路の進積システムによって形成されたことが推定される。

漁種ユニット1の f_1 巣には、上巣にハリエビをなす泥呑みじりの泥鰌砂へ建砂、 f_2 巣にハリエビをなすシルトからトラフ型巣を崩す・巣壁の泥呑みじりの建砂砂へ泥鰌泥鰌砂への通過行程からなる漁種ユニット2が層状をなして存在する。漁種ユニット2 f_3 巣の崩壊では、最上部に f_3 巣が形成されている。崩壊から、漁種ユニット2は、各々の洪流からオバーフローした状況によって運搬されてきた漁種的と判断される。

漸進ユニット3では、シルト更替¹層が連続して存在する。この泥層は、最も上部に位置する腐泥含有量が²、よりもむかわいにむかわいな凡谷を示す層と、黒色をもつ腐泥を非常に多く含む層間に³分される。より下位層が礎底層されたのは、見立泥層最上部の層である。見立泥層では、地熱透達がまったく含まれず、腐泥層⁴が進行している。このような層から、この黒泥層の形成当初には、上流部および堆積からの漸進性供給が非常に少なく、安定した漸進潮流であったと判断される。沖⁵および層⁶をふまえると、黒泥層は、見立の第2段より經濟的な漸進・二段潮流⁷で形成されたと考えられる。テフラ分析および放射性同位元素代謝を踏まえ、第2段で礎底層された黒泥層⁸について、その下部から上部は、純当代生珊瑚層の7300-7400 cal BP前の当初に形成されたことがうかがえる。

この世上に載るる食育を¹する母脛は、歴史の蓄積が豊²より少ないことから、想的³に過漁過度が導⁴いた潮流⁵で形成されたことが推定される。この食育母脜が以前過漁的に汚⁶されることをふまえると、本脜は、事実⁷およびその真因⁸の想的⁹性¹⁰が主¹¹するような過漁潮流の変¹²化¹³の過程において形成されたものと想えられる。

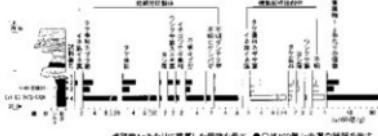
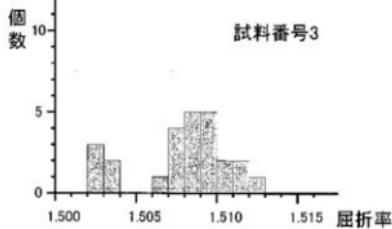
(3) 先日式退済の問題賃貸の賃料と賃料引落

試料番号2は、ペリ状凍結が確認された凍結に拘束する。本凍結では、イネ胚乳乾燥が焼却されたものの、穀物胚乳乾燥が約900倍/g、穀物胚乳乾燥が約400倍/gと少ない。焼却が行われたペリ等の

案ではイネ庭の焼却組合会員が5,000倍/kg程度焼却されることが多いとされる(杉原, 2000)。このような経済的なメリットでの合意と比べると、ベリット燃焼場の焼却設備である試算番号2のイネ庭焼却組合会員が非常に少ないことが認識される。そのため、公的所有地のみの焼却からは、市管轄での焼却率を増やすことが難しい。逆に、ベリット燃焼場の焼却設備の販売部(試算番号3,4)と並んで(試算番号1)において、イネ庭会員が焼却されていない状況については、辻りに専門的知識があると想われる。

上述のような分析結果の差異を検討するためには、分析脅迫をさらに細かくして月度検討を試みる方法も考えられる。しかしながら、推進筋肉に含まれるM_gの静態を解釈するにあたっては、試料採取直後準りさの形成過程を詳細に捉え、M_gタフォノミーとの関連から検討していくことも重要な視点であると考えられる。このようなM_gタフォノミーや推進筋の形成過程の検討においては、試料採取直後の静的な脅迫や、そこから検討されるM_gの形成過程が基礎概念として非常に大切である。推進筋の静的な脅迫影響については、下塊部試料の前X波と後X波塊影や剥ぎ取りなどがルーティンな要素としてあげられる。今迄の発覚調査では、バロ伏株構の検討脅迫を採集して上部の推進筋について、下塊部の柱状サンプルが採取されていた。そのため、それでは、イネ度量等で検討するの有無など純粋な脅迫による影響を含められた分析脅迫に因して、それぞれの脅迫において脅迫に違いが存在するかどうかなどを確認するために、採取された下塊部柱状サンプルについて的確に撮影を再せて検討することとした。

紙II歳まで脅迫の検証を行った脅迫は、三脚張詔の影響を強く受けしており、全般的に下甲喙などの跡を示す。紙II歳までの標準では?された点の一つとしては、バリ伏進構が発見されたII脅において、その影響となるIII、IV脅と異なり非常に均勻な脅迫を示したことがあげられる。III、IV脅では、紙II歳までの脅から、II脅と比較して、三塗門による三脚張詔の構造はよく反映されていることが認識される。II脅では、下甲喙ながらバリ変形をなす複数構造も認識される。しかしながら、脅では蛇骨配列や碎けについてまったく検討されず、残灰がつかぬ



第268 水溶性諸物質の層別の割合

第258 水溶性諸物質

| 試料名 | 性状 | 精正年代 BP | δ 13C (‰) | 測定年式 BP | 測定機器番号 |
|----------|----|------------|---------------|------------|-----------|
| 試料番号4 土壤 | | 6470 ± 40 | -25.94 ± 0.99 | 6440 ± 40 | JMA-61144 |

1)年代修正の誤差には、Libby基の平野原3569を使用。
2)100年代修正は、1900年を基点として定め前であるを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差(△測定値の範囲が入る範囲)を年代前に表示した値。

第5章 測定部品水溶性諸物質

| 項目 | 電子化 度 | 測定範囲(年式)(yr) | 測定比 | Code No. |
|--------------------------------|----------------------|--------------|-----------|----------|
| 1) cal BC 5,468 - cal BC 5,409 | cal BC 7,618 - 7,250 | 0.742 | | |
| 2) cal BC 5,291 - cal BC 5,361 | cal BC 7,341 - 7,217 | 0.716 | MAA-61144 | |
| 3) cal BC 5,472 - cal BC 5,376 | cal BC 7,427 - 7,275 | 1.000 | | |

1)には、RADON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV.93.02 (Copyright 1986-2003 M.Schwar and P.J.Renner) を使用。
2)は電子化していない。

3)は水溶性物質が含まれたため、純正年式のプログラムが設定された場合の実験目的のために、純正年式を用いています。

4)は純正年式の真の値が入る電子化はカタログ、2つは30%である。

5)は純正年式のそれそれぞれとした場合、確率的の真の値が得る比率を絶対的に示したものである。

第6章 脳卒死原因

| 種類 | (単位) | 1 | 2 | 3 | 4 |
|------------|------|-------|-------|--------|---|
| 脳卒死原因 | | | | | |
| イネチ科動植物性整体 | - | 600 | | | |
| タケ科オガサ属 | 300 | 3,500 | 2,300 | 20,500 | |
| タケ科 | 300 | 4,500 | 2,700 | 21,000 | |
| シノ属 | - | 400 | - | 500 | |
| ワタツク属ススキ属 | - | 1,800 | - | 2,100 | |
| イネ科オガサ属 | - | 1,300 | - | 1,100 | |
| 不規則葉 | - | 2,200 | 1,300 | 5,200 | |
| 不規則ゲンゲ属 | - | - | - | 1,600 | |
| 不規則ゴク属 | 300 | - | 400 | 8,400 | |

| イネ科茎葉植物性整体 | - | 400 | | |
|------------|-----|-------|-------|--------|
| タケ科オガサ属 | - | 3,500 | 1,300 | 24,700 |
| タケ科 | - | 1,800 | 1,500 | 11,000 |
| シノ属 | - | 400 | - | 500 |
| ワタツク属 | 300 | - | - | 500 |
| 不規則 | 629 | 1,300 | 2,300 | 4,200 |

| 合計 | | 13,000 | 6,900 | 61,400 |
|------------|-------|--------|--------|--------|
| イネ科茎葉植物性整体 | 900 | 13,000 | 6,900 | 61,400 |
| イネ科茎葉植物性整体 | 900 | 7,500 | 6,200 | 26,400 |
| 総計 | 1,800 | 22,500 | 13,100 | 91,300 |

合計は各分類群の未完成の数字を合計した後に丸めてある(100単位にする)

第7章 水溶性諸物質

| 項目 | サンプル名 | シリアル | 測定 | 部位 | 部位 |
|----|-------|------|----|----|----|
| 1 | サンプルA | 5012 | 3 | 頭部 | 頭部 |
| 2 | サンプルB | 5012 | 5 | 頭部 | 頭部 |
| 3 | サンプルC | 5012 | 6 | 頭部 | 頭部 |
| 4 | サンプルD | 5012 | 47 | 頭部 | 頭部 |
| 5 | サンプルE | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 6 | サンプルF | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 7 | サンプルG | 5012 | 8 | 頭部 | 頭部 |
| 8 | サンプルH | 5012 | 5 | 頭部 | 頭部 |
| 9 | サンプルI | 5012 | 5 | 頭部 | 頭部 |
| 10 | サンプルJ | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 11 | サンプルK | 5012 | 30 | 頭部 | 頭部 |
| 12 | サンプルL | 5012 | 80 | 頭部 | 頭部 |
| 13 | サンプルM | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 14 | サンプルN | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 15 | サンプルO | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 16 | サンプルP | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 17 | サンプルQ | 5012 | 17 | 頭部 | 頭部 |
| 18 | サンプルR | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 19 | サンプルS | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 20 | サンプルT | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 21 | サンプルU | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 22 | サンプルV | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 23 | サンプルW | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 24 | サンプルX | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |
| 25 | サンプルY | 5012 | 1 | 頭部 | 頭部 |

第9章 白黒の脳卒死原因

| 項目 | 部位 | 部位番号 | 測定 | 部位 |
|----|----|---------|---------|----|
| 1 | 頭部 | 5012-1 | 12 | 頭部 |
| 2 | 頭部 | 5012-2 | 5012-3 | 頭部 |
| 3 | 頭部 | 5012-4 | 5012-5 | 頭部 |
| 4 | 頭部 | 5012-6 | 5012-7 | 頭部 |
| 5 | 頭部 | 5012-8 | 5012-9 | 頭部 |
| 6 | 頭部 | 5012-10 | 5012-11 | 頭部 |
| 7 | 頭部 | 5012-12 | 5012-13 | 頭部 |
| 8 | 頭部 | 5012-14 | 5012-15 | 頭部 |
| 9 | 頭部 | 5012-16 | 5012-17 | 頭部 |
| 10 | 頭部 | 5012-18 | 5012-19 | 頭部 |
| 11 | 頭部 | 5012-20 | 5012-21 | 頭部 |
| 12 | 頭部 | 5012-22 | 5012-23 | 頭部 |
| 13 | 頭部 | 5012-24 | 5012-25 | 頭部 |
| 14 | 頭部 | 5012-26 | 5012-27 | 頭部 |
| 15 | 頭部 | 5012-28 | 5012-29 | 頭部 |
| 16 | 頭部 | 5012-30 | 5012-31 | 頭部 |
| 17 | 頭部 | 5012-32 | 5012-33 | 頭部 |
| 18 | 頭部 | 5012-34 | 5012-35 | 頭部 |
| 19 | 頭部 | 5012-36 | 5012-37 | 頭部 |
| 20 | 頭部 | 5012-38 | 5012-39 | 頭部 |

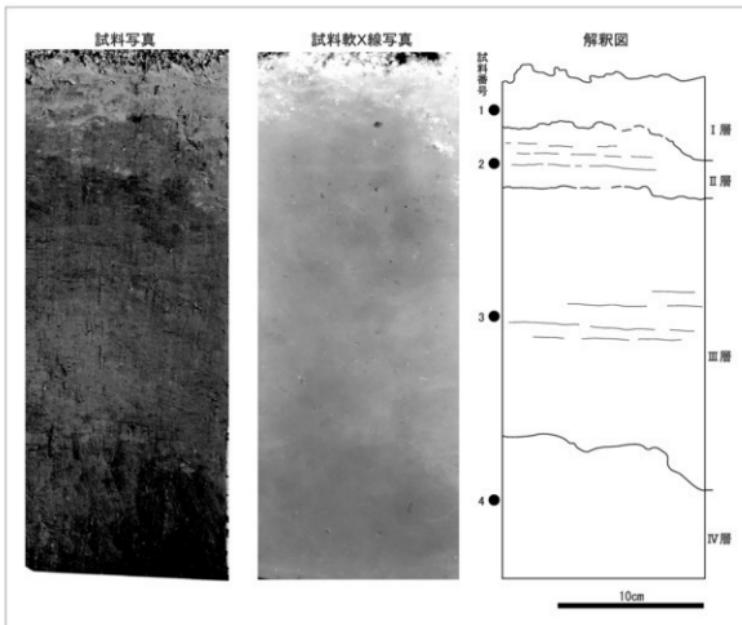
第10章 ごく水溶性の脳卒死原因

な層構を示す層理が積層しているように見えられる。『寒波形地学的印字』では、『ハリ・寒波』において波状構造が認定されている（有村・先駆：1971）。このような構造については、シロカキなどの風浪葉の塊性によって、砂質が分散・堆積し、砂質の塊性がおこなわれたことによって生じることが指摘されている。また、II層では、『波状片の張合や上位のI層起源と思われる堅密な隔壁の跡』が半透明により確認されている。

以上のようなII層の特徴をふまえると、ハリ・寒波構造が発達されたII層では、『寒波が進行した黒色泥層を基盤として、さらに上位のI層である黒色泥層が幾重堆積し始めた段階で、それを覆ったとした堆積物の塊性とその変化がなされたことが想定される。軟弱透水性の堆積物では、堆積の歴史を越えてことを難しいが、上記の堆積物の塊性の掌りとして、空間の堆積活動を想起することは、堆積岩層を所見をふまると、ある程度の妥当性が見いだせる

ものとさえられる。よって、今調査では、II層の露頭において、調査がないしその近傍において、寒波に伴う空間活動を観察することはできない状況にあることが指摘される。なお、基盤となる層理から堆積ユニット1,2までの堆積層をまとめてみると、調査では、深層トレレンチ底部から上位にかけて均一的な泥層が緩やかに上位層にあつたと判断される。II層上位で確認されたハリ・寒波構造は、黒色泥層の堆積およびその後の『塗付』のサイクルが終了し、次の堆積サイクルが開始する即ち現層で形成されたものと推測される。

今後X線CT観察で得た大きな印象は、I層では泥が印象でなかった黒色泥層において、『塗付』の痕跡を残す層理の直上に下位部に、均一かつ堆積層構造が認識される層理が現れできたことにあると思われる。堆積岩層の特徴は、堆積層の純粋性の影響を大きく受けるため、いつも含みの名前が



第27回 試料軟X線写真とその解釈図

い留着點と併和的であるとは言い難い。今後の歴史の詳記な観察によって、少しがら検討されたベリ、伏連樹の遺伝子構造であるII層の地熱苔類分布の結果については、含みのみによる詳記より少しは追んだ詳記を得ることができたと見えられる。今後のさらなる研究においては、ご承認の作製やより詳尽の記述やかかる分析も分析、ご承認およびご学年のデータの積み上げが求めであろう。

(4) 黒鶴山層の地熱苔類分布の詳記

今後、既存時代の決済の基礎となる既存層(試料番号3, 4)は、テフラが折るならばに時代確定の結果、7300-7400 cal BP前後に堆積したと見えられる。本層の地熱苔類分布の結果をみると、ネザサ筒を含むタケモ群が多い。また、岩壁など場所に多いヨシ庭も検出されるが、その含みは少ない。検出されたタケモ群の地熱苔類は、谷筋や山や丘陵などに成長していたと思われる森林の林蔭などの駆けた場所に生育していたタケモに由来すると思われる。一方、ヨシ庭は、開拓谷中の混生の場所を含みに生育していたものと思われる。

なお、タケモ群の地熱苔類は芦のイネ科と比較して既に多く、またヨシ庭の多い点がこれまでの研究から推測されており(近藤, 1982; 松井・藤原, 1986)、芦の種類よりも繁殖しやすいことが明らかになっている。そのため、周辺に生育するネザサ筒の群合は地熱苔類の音波に見られる程は違くなかった可能性がある。

試料番号3の地熱苔類分布含みは、3番の試料番号4に比べて充実している。試料の半葉および軟X線写真による層構成では、試料番号4枚の層構成であるIV層が、試料番号3枚の層構成のIII層に比べ、泥炭かつ腐殖地帯含みが多いことが読みとれる。IV層については、苔類の株立ちや砂や紅葉の混じる場所が観察され、IV層と比較して過積累流が特徴的にトガリであったことが示唆される。上記のようなIII層とIV層の層構成からは、上位にもかかっての特徴的に地熱苔類が上界層にあつたことが読みとれる。以上のような軟X線写真から読みとれる層構成をふまえると、IV層においてはIII層に比べて泥炭流が充実しており、上記より地熱苔類が蓄積され易い状況にあったことが埋没されると見られる。

(5) 古湯ノ谷層の地熱苔類分布と古湯泥流

泥流から目立った事には、常緑広葉樹のアカガシ庭、サカキ、落葉広葉樹のケヤキ、サクラ庭、カエデ庭、トチノキが認められ、アカガシ庭が多い。また、アカガシ庭とケヤキについては、幹材・枝材の間に根柢もよく認められる。一方、木や葉などの大型地熱苔類は、カシ領(イチイガシ、アラカシ、ツクバネガシ近似種、アカガシ庭)が多く、クスノキ群、バクチノキなどの常緑樹を伴う。落葉樹もコナラ庭、オニグルミ、ムクノキ、トチノキ、ムクロジ、エゴノキ、ハクウンボクが検出される。

今後、小型地熱苔類の分布を行った試料は、既存泥流から採取されたものである。これらの地熱苔類は、開拓谷中の落葉場に、型地熱苔類とともに、泥水流によって運搬、集積したものである。このようなタフォノミーおよび遺跡の分布をふまえると、今後、時代を行った地熱苔類は、開拓谷段階の山地帯や丘陵地の地盤を覆張しているものと見えられる。また、木や葉などの大型地熱苔類は、樹木に比べて葉片を反復しやすい特性がある。そのため、既定された地熱苔類には、開拓谷やその周辺に分布していた地熱苔類の多く含まれていることが予想される。

半葉層では、カシ領が多寡した。カシ領は、雪渓苔類を構成する重要な種類であることから、後背山の雪渓苔類や渓谷を構成する半葉層に広く分布していたと思われる。また、サカキ、クスノキ群、バクチノキ、ムクロジは雪渓苔類を含みに分布する種類であり、カシ領と雪渓苔類の分布をしていたといわざる。オニグルミ、ケヤキ、ムクノキ、カエデ庭、トチノキ、エゴノキは、?を含めに広く分布するが、いずれも名前など明るく認めた林木を含む樹木にある。このことから、これらの地熱苔類については、雪渓苔類を検出された開拓谷層を含みに分布していたと思われる。

(6) 地質変遷の考察

主要変遷地は、角材、板材、ヘラ木大製品、幹材、枝材の山、近世以前の林木が1点ある。角材、ヘラ木大製品、幹材、板材は、木墨が通じて御製材が確

く、分離しやすいツバキのスギ、ヒノキが利用されている。これらは生息の用途によく利用される樹種であり、現在の調査でもモザイクしない。なお、竹林については、直徑で密度の高い常緑広葉樹のツバキ庭であった。ツバキ庭は、生木には認められなかつたものの、アカガシ庭等と共に生育する樹種であり、既述に記載していた樹木を利用したことをえられる。また、近世以降の庭木は複数種類であり、竹庭等も庭園としては一般的な密度が高く、樹木を多く含むために和風庭も一般的な高く、日本としては遺構といえる。

5 小結

・古墳時代の遺跡を含む遺構門門を構成する遺跡および隣接遺跡は、平行道路の循環システムで形成された。

・古墳時代の遺跡を含む伊川遺跡の上位には、深水遺跡が存在する。

・深堀トレンチの最上部には、床下の房瓦より深澤な遺構、二重構造で形成されたと考えられる墓地裏に付む瓦葺き屋根が存在する。墓地裏には、瓦葺きの最上部の屋根で、瓦葺き。この瓦葺き屋根には、瓦葺きを有する瓦葺きが載る。

・瓦葺き屋根に棲む瓦葺きの空穴の砂質物質は、先史アカホヤツシテ(K-Ah:野々・新井, 1978)であることが確認された。

・深堀トレンチで確認された瓦葺き屋根の墓地は、 $6420 \pm 40BP$ 、 $5472-5326$ cal BC (2σ) の焼却骨存率 $\geq 10\%$ で認定候補を示した。

・テフラの発達結果と併せて添付代理店資料から、瓦葺き屋根の最上部から上部は、紀元前後年頃の $7300-7400$ cal BP前後の当期に形成されたことが推定された。

・瓦葺き屋根では、深堀トレンチ最上部の屋根とその上位に棲む屋根では、瓦および鉛X線吸収により、瓦が存在することが確認された。地内埋蔵物をみると、最上部の屋根は、その上位に於て、安息した二重構造で、その上位の屋根では、瓦に於て、その上位の屋根では、瓦に於て、瓦が存在するような遺構構造で、

より多くの瓦片が瓦に取り込まれたと確認された。

・パリット遺構が確認された屋根では、イネ庭と並びが焼却されたもの、想定瓦葺きが約900枚/g、焼却瓦葺きが約400枚/gと今まで全般的に少なかった。

・鉛X線吸収率により、瓦葺き屋根およびその上位の瓦葺き屋根では、瓦葺きが非常に卓越していることが確認された。

・パリット遺構が確認された屋根では、その特徴的な塗装が明確な屋根と付近の屋根を区す均一かつ規則な焼却造が鉛X線吸収率により確認された。

・パリット遺構が確認された屋根では、その塗装が進行した瓦葺きとして、瓦上に載る瓦葺き屋根が焼却過程で改めた屋根で、瓦を変更とした過程時の複数とその変化がなされたことが鉛X線吸収率および塗装の変遷率から想定された。

・パリット遺構が確認された屋根において、下層の瓦葺き屋根を想起することは、鉛X線吸収率による瓦葺き屋根と瓦葺き屋根を分離すると、ある程度の差異が見いだせるものと考えられた。よって、瓦葺き屋根では、上位の瓦葺きにおいて、瓦を用いたしその近傍において、稀に伴う瓦葺きを計ることはできない次第にあることが増加された。

・パリット遺構は、本體となる瓦葺き屋根の堆積およびその後の塗装のサイクルが終了し、上位の瓦葺き・道路堆積物が形成される次の堆積サイクルが開始する付近等で形成されたものと推定される。

・古墳時代～飛鳥時代の車軸を傍説¹⁰の空室や車軸を構成する房瓦上には、カシ類を主として、サカキ、クスノキ類、バクチノキ、ムクロジなどが生育していた。

・古墳時代～飛鳥時代に、オニグルミ、ケヤキ、ムクノキ、カエデ類、トチノキ、エゴノキは、車軸を構成する房瓦を主に分布していたと想定された。

・内側、ヘラ状木製品、韁繩、板材の樹種は、スギ、ヒノキが使用されていた。板材はツバキ庭、近世以降の庭木には、マツ庭瓦葺き庭が用いられている。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

[引]用文献

- 有村 一郎・佐野 重, 1971,
有明海岸部および九州沿岸域の沿岸木々とその二、
三の特徴的性質と土壤地形生态的観察, 九州農業試験
場報告, 16, 63-183.
- 日刊工業新聞社, 1994,
沿岸域における海岸带植物の分布, 一葉茎木堆田付録を例に
して, 地理学雑誌, 2, 19-27.
- 日刊工業新聞社, 1996,
沿岸域における海岸带植物の性質と生長性のpp图, ベドロジスト,
40, 81-84.
- 渡野千 厚美, 2005,
島マテ植物つばでおぼえる学材, 球形角, 334p.
- 母根仁之, 1995,
久遠の「海草」・「藻类を海藻」としての調査の記述と種
類, 研究記録, 34, 135-149.
- 母根 仁之, 1995,
トガガラスの動作と認定および生態とその特徴的な構造に
よるづくテフラの識別, 地質学雑誌, 101, 123-133.
- 母根 仁之, 1991,
日本本邦 海藻類目要集, 本邦本学本邦学印所, 510p.
- 母根 仁之, 1994,
島マテ トガガラス類の识别とその生態, 植物研究会, 328p.
- 母根 仁之, 2001,
どんな生物が, トガガラス類, トボロリ類, 79p.
- 母根 仁之, 1995,
日本本邦 海藻類の解説書の記載I, 本邦本学本邦学印所, 81-181.
- 母根 仁之, 1996,
日本本邦 海藻類の解説書の記載II, 本邦本学本邦学印所, 66-176.
- 母根 仁之, 1997,
日本本邦 海藻類の解説書の記載III, 本邦本学本邦学印所, 83-201.
- 母根 仁之, 1998,
日本本邦 海藻類の解説書の記載IV, 本邦本学本邦学印所, 30-166.
- 母根 仁之, 1999,
日本本邦 海藻類の解説書の記載V, 本邦本学本邦学印所, 47-216.
- 母根 仁之, 1965,
ナシモ科の植物, 著者未詳, 216p.
- 母根 仁之, 1982,
Plant opalによる乳頭筋肉の疾患に関する研究, 第4
56年度日本学術振興会(一般研究C)研究費支給金, 32p.
- 母根 仁之, 2004,
海岸ケイ骨植物学, ベドロジスト, 48, 46-64.
- 母根 仁之・母根 仁之, 佐野重義, 1989,
海岸植物识别ハンドブック, 集英社, 176p.
- 母根 仁之・新井昌久, 1978,
海岸植物カルダラから変化したビンテフラーーカホヤセノク,
- 実地記録, 17, 143-163.
- 母根 仁之・新井昌久, 2003,
新編 トガガラスアトラス, 丸善・本学印所, 336p.
- 母根 仁之・母根 仁之・母根 仁之・湯谷 月・若林 伸子・木曾 伸
也・高瀬 伸也・他編, 1990,
浜辺ミニタルタの形成過程と一些を御愛せ川津仁之部をして-2,
水前寺成氏と源義光, 沖縄学雑誌, 96, 839-858.
- 母根 仁之・高瀬伸也・木曾伸也・藤沼高歌・木曾伸也, 1992,
この世界による藻類植物の第一章-そのX線による研究をオム
として-, 久遠の物語, No. 66, 19-27.
- 母根 仁之・母根 仁之・木曾伸也・木曾伸也, 2000,
ミネルバ植物学講義, 丸善・本学印所, 642p.
- 母根 仁之, 1973,
どんぐりのはなし(3), Nature Study, 19卷8号, 小学高学年理科学
域内剪輯, 木曾伸也・浅野吉平著, 7-10.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (編), 2006,
が豆の魔女 IAWAによる海岸植物の微リスト, 丸え, 稲
子・椎原 早苗・各務 勝二・安部 久・寺内 実也 (リカ風
靡植物), 森文社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz L.
and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features
for Softwood Identification].
- 母根 仁之, 1993,
軟X線反射顕微鏡, 研究記録研究会所法2 研究記録研究会所法2 研究
記録会編, 丸善・本学印所, 103-108.
- 母根 仁之, 1993,
軟X線反射顕微鏡, 研究記録研究会所法2 研究記録研究会所法2 研究
記録会編, 丸善・本学印所, 103-108.
- 母根 仁之, 1996a,
人肌感覚の技術手順(ノーリー)の健診の発達とその意義, 旗葉二木
学園会報, 60, 25-30.
- 母根 仁之, 1996b,
人肌感覚の技術手順(ノーリー)の健診の発達とその意義, 旗葉二木
学園会報, 60, 287-292.
- 母根 仁之・母根 仁之, 1982,
ナシモ科植物, 丸善, 176p.
- 母根 仁之, 2000,
海岸植物学(プラント・オパール), 日刊工業(編著)立ち字と
透視字, 丸善・本学印所, 2000, 189-213.
- 母根 仁之・権昌 仁之, 1986,
種群が海岸植物の分布によるタケケイ科植物の多様性-その地理学的
の分布分析をして-, 丸善・本学印所, 19, 69-84.
- 母根 仁之, 2004,
さくどんぐりトガラス, 朝雲社, 156p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998,
じめがねの魔女 IAWAによる海岸植物の微リスト, 丸え
木曾 伸也・椎原 早苗・各務 勝二 (リカ風靡植物), 森文社, 122p.
[Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of
Microscopic Features for Hardwood Identification].

V 結語

本調査では、各時代ごとに時代では初めての性格的な発展傾向であったことから、室町期における時代的な多くの変化を留める事が出来た。以下当代身に焦点を述べたい。また今後の調査では、すべき進歩に伴う時代後期の変遷がある。これについては別途調査する。

1 調査結果の概要

(1) 櫻形器

本調査では、櫻形器（102）や真改器片2点（15・114）が出土した。櫻形器は第4層からの出土で、純正器はいずれもローリングを受けており、本調査から一定距離離れたところからの流失だと考えられる。櫻形器は櫻川岸の鷹ノ木遺跡で後期の器ととともに出土している。一方、器片2点はいずれも純正時代後期の器と見えられる。ここで追跡の範囲約2kmには後期の集落である新地石遺跡が位置する。またここで追跡中にひかる浅型土器の突破にはまだ追跡、発見追跡、丸ツバ追跡、トミツバ追跡、円ノマ追跡などの追跡が存在しており、これらいずれの追跡でも器や骨片が採取されている（表1）。こうしたことから、純正時代後期には、押芦野長の手前から東側に分布する浅型土器の先端部に、器の島嶼があったものと見えられるだろう。

(2) 弧形器

本調査で季良時代に明確に属すると見えられる遺構は検出されなかった。遺物としては、季良土器から後期の着火（1）、窓（11・12・103・104・115・116）車（16・105・106）が出土した。ただ、季良土器の遺物全般にかかる評価は高くはない。ここで追跡調査で季良時代の追跡としては押芦野長後序追跡がよくかられていているが、これまでに明確な発見跡は検出されていない。しかし押芦野長の古い追跡で土器の活潑が行われていた事はより確かになったと思われる。

ここでは、しておくべきは、²層底層の穿孔検出

された事である。現地での²層底層に到達する所の結果、押芦野長を解剖して形成された小谷手でイネを栽培していた可能性が指摘できる。当期は純正時代後期から後期後期の間であってそれ以上堅定ではないが、同じしている器の時期からすると、季良時代の耕作の可能性もある。

(3) 頂面器

季良時代終末から後期後期にかけてのいわゆる³式が後期の器が器口目立しているほかは、純正時代後期から後期の器が⁴で埋められる。これらの器の多くは浜路跡の第4層や⁵浜路跡である溝SD13から出土しており、ローリングはほとんど受けていない。この後期の器群は浜路跡や沖合での居宅に適さないことは明らかなので、男戸上に集落が存在していた可能性が極めて高い。今後の調査ではでは純正時代の遺構は検出しきれなかったが、今後の追跡の調査においては純正時代の集落が確認されるであろう。

(4) 戸門・余長器

純正時代に引き継ぎ、飛来から余長時代に属する器が一定目立している。年代によってても季良追跡調査では⁶が出土していた事をふすものである。ただ⁷追跡の間に後期が余長時代までのものはほとんどなく、余長時代には集落が⁸の影響に移っている可能性が高い。

(5) お見面

季良時代前期から後期は余長時代に引き継ぎ、遺構もほとんど見られない。後期に⁹て追跡の¹⁰が明確に検出され、遺構も認められるようになる。

季良時代後期では¹¹すべき遺構は溝SD10である。まず、溝の上層から出土した遺物で特に骨器や茶碗など¹²すれば、多く底面に算盤張が付しないものと付するものがあり、12世紀後半におさまると見えられる。次に¹³層目¹⁴の遺物についてみてみれば¹⁵層と大きな後期¹⁶は認められない。こうしたことから溝SD10は12世紀後半に埋められ、墳原後期ほど後期をおかずには埋没したと見ていいだろう。

冰に溝の性格を考えてみたい。SD10は直線の溝で幅は約4mである。曳F上と曳F下のおよそ50cmの距離があるにもかかわらず連続している。溝の底溝から背脂溝があったとは考えにくい。こうしたことからこの溝は明らかに矢張りであったが、軸性が強いと考えられる。また溝の上から引いた進角をみると、多数の丸印[○]していることが注目される。矢張り代役印から馬糞馬代印頭における矢張り印は矢張りなどごく限られる。また荷器[○]茶壺の上に現として転用した可能性のあるものが含まれること、もろびが引いていることなども併せて考えれば、馬糞馬代印の軸性はより強くなる。こうしたことから、矢張り代役印頭に矢張り印を導入して矢張りした矢張り印[○]する溝と考えるのが最もともに洗浄が強いのではないか。なお、ひとつはしておくべきことはこの溝の矢張りである。三[△]追跡尾辺の手縫には矢張り印[○]が施されている。溝の矢張りはこの手縫冲縄[○]と約20°ずれる。溝の矢張りと手縫冲縄[○]の矢張りがなぜずれるのかについては、今後検討するべき課題である。

(6) 矢張り印

矢張り印は現代まで、車輪[○]は前走輪[○]として利用されてきた。明[△]伏見庄内[○]のS.T.18やその上位の車輪[○]であるS.A.11・12、さらに車輪[○]を構築するために車輪[○]が施されたSZ.5やSZ.5の上に導入された車輪[○]など、いずれもより広い車輪[○]をより安全[○]に確保するための努力の象徴として評価できる。

2 瓦の様相

(1) 瓦の種類

今[△]の車輪[○]においては瓦[△]は瓦[△]と瓦[△]が11点[△]ある。このうち追跡[△]瓦[△]瓦[△]が4点[△]、瓦[△]瓦[△]瓦[△]が7点[△]である。これらの多くはSD10から引いており、その発見[△]代の瓦[△]累[△]を12世紀後半[△]に推定[△]することができる。矢張り印頭の三[△]矢張り印[○]が少ない(表2)から考えると重要な裏付けである。

1 蓮華文軒丸瓦

追跡[△]瓦[△]瓦[△]は4種[△]認められ、いずれも矢張り印[○]が施されている。瓦[△]から2種類に分類できる軸性が強いが、資料も異なっているため、瓦[△]の差異はここでは置かない。ただ、36は37・38・89の

3種各に述べて追跡[△]の表現が△ 破で△ あり、△ の37・38・89に△ 行する△ 軸性がある。ここで△ するべきはその杭成[△]である。36・37の杭成[△]は軸更[△]で、手縫[△]が強く後伐する種し[△]である。38は杭成[△]は堅[△]である。89は杭成[△]は堅[△]だが、手縫[△]は長い種し[△]である。つまり、杭成[△]には軸更[△]な杭き[△]がりと更[△]な杭き[△]がりの2種[△]があり、また手縫[△]を模すものと模さないものの2種[△]がある。これを組み合わせると、杭成[△]には4種類存在する事になるが、軸更[△]で手縫[△]を模さないものは確認されていないので、3種類が存在する事になる。

A 軸更[△]+種し[△] 36・37

B 堅[△]+種し[△] 38

C 堅[△]+種し[△] 89

2 巴文軒丸瓦

瓦[△]瓦[△]瓦[△]は7種類認められた。で板に付[△]すると、大きめの瓦[△] (90・91・39・92・40) と小[△] (41・163) に分けることができる。またも[△]で板[△]瓦[△]瓦[△]の瓦[△]はいずれもナデ[△]で成形[△]するのに付[△]し、ち[△]で板[△]瓦[△]瓦[△]はいずれもケズ[△]で成形[△]することから、製作技術[△]の差異も存在[△]している。も[△]で板[△]瓦[△]瓦[△]は瓦[△]成形場[△]に布[△]を被[△]うもの (90) と離れ砂[△]を被[△]うもの (39・40・91・92) に、また杭成[△]は軸更[△]のもの (90・91) と堅[△]のもの (39・92・40) に分けることができる。ち[△]で板[△]瓦[△]瓦[△]は瓦[△]手縫[△]に布[△]・離れ砂[△]のいずれも付[△]せず、また杭成[△]はいずれも堅[△]である。以上で、瓦[△]の成形方法、杭成[△]に付[△]すると△の4種に分類できる。

A も[△]瓦[△]+布[△] +軸更[△] 90

B も[△]瓦[△]+砂[△] +軸更[△] 91

C も[△]瓦[△]+砂[△] +堅[△] 39・92・40

D も[△]瓦[△]+堅[△]+堅[△] 41・163

3 三足田跡軒丸瓦の特徴

三[△]追跡[△]の瓦[△]瓦[△]の大きさはパリエーション[△]の豊富さにあると言えよう。

まず[△]板の数からみると、追跡[△]、も[△]瓦[△]、も[△]瓦[△]の3種[△]があり、追跡[△]では既に2種[△]に、も[△]瓦[△]では既[△]の数から少なくとも2種[△]に認定[△]することができる。また製作技術[△]や杭成[△]からは上述の板に7種類[△]に分類[△]することができる。このように、三[△]追跡[△]の瓦[△]瓦[△]がきわめて豊富なパリエーション

をもつことは、鳥の傳統な伝説¹⁴⁾を示すものである。そしてこの鳥のバリエーションの臺¹⁵⁾さはまさにササの鳥の特徴（表3）であって、ササ時代も¹⁶⁾即ちは確実にササの伝承システムに組み込まれていたとさえられるのである。

（2）ササの製作方法

今を¹⁷⁾した99のササから、その製作法について復元を試みた（表4）。まず99のササについて解説されたことは図1の通りである。

1. ササには¹⁸⁾始めらるのコピキ巣夢が残る。
2. コピキ巣夢に逆行するらるでの積き取り状の巣夢が残る。
3. 2の上に布¹⁹⁾巣夢が残る。布²⁰⁾は1cmあたり12枚の糸を構成できる。
4. ササの便箋部付近²¹⁾0.5cmには布²²⁾巣夢を認めず、離れ砂が入り込んでいる。またササの一部には布²³⁾巣夢が下甲羅になっている部分がある。
5. ササは純²⁴⁾巣夢が甲羅に残る。
6. ササには²⁵⁾手に離れ砂が認められる。
7. 風²⁶⁾の存んだ部分にも砂が入り込んでいる。
8. 頭²⁷⁾はヘラキリの巣夢が甲羅に残る。
9. 便箋部のケズリ²⁸⁾は、凸²⁹⁾から凹³⁰⁾にゆかってゆきに傾斜する。

以上の解説から、このササの成形技法は図1のように復元できよう。

1. 紙³¹⁾板から紙³²⁾板を手切りで切り出す。
2. その際、多少の凹凸はへラ状の工具で均す。
3. 紙³³⁾板をあらかじめ布を敷いた、上に凸な成形³⁴⁾分にのせる。この成形分は³⁵⁾圭³⁶⁾形で、塑型の辺が狭く、余そのものは20度から30度傾いていたとさえられる。
4. 紙³⁷⁾板を成形分に差せるとき、紙³⁸⁾板の頭³⁹⁾は成形分から0.5cm程度はみ出す。
5. 小手に離れ砂をぬき、紙⁴⁰⁾板に糸を垂れたところ⁴¹⁾でタタキ締める。
6. 便箋部をへラでけずり整える。
7. 成形⁴²⁾後、鳥の模⁴³⁾から⁴⁴⁾を差し入れ、鳥を成形分からはずす。

[註]

(1) 3進算の立場に契約して、第Ⅱ章「参考と算定」を参照されたい。

(2) ササにおけるササ代役羽からも羽にかけての丸に契約して、これまでほとんど記されてきていない。紹介書『ササと³⁷⁾其の歴史と美術』(委員会編、1933)とその著者を参考した『ササ拂³⁸⁾と³⁹⁾其の歴史と美術』(委員会編、2006)の外に、安藤氏の丸がわずかに掲示されているにとどまる。

(3) 内山光三「12. 鳥」(『概説』、ササの「器・身造器」、ササ器宇多天、1995)ではササの多岐⁴⁰⁾は複数の伝統⁴¹⁾を有していた前文であると指摘する。

(4) ササの製作技術の発展にあたっては、木麻原「ササノート・鳥の製作技術」(坪井美術館、余派ひでむ)が参考所学⁴²⁾第49頁、1991)を参照した。



今井(北から)



今井(南から)



金剛川河・北河をのぞむ(西側から)



S T 18 S A 11・12(西側から)



S D 10 田 稲作地(北から)



S D 10・13. 墓 石碑(南から)



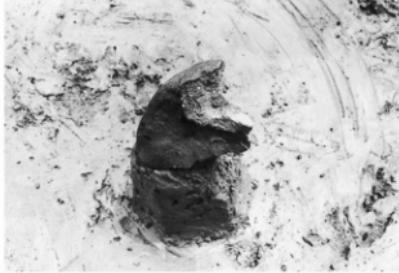
石(50) おとく(50) おとく



石(50) おとく(50) おとく



石(38) おとく



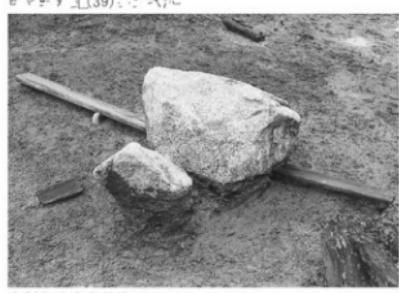
石(37) おとく



石(39) おとく



石(91) おとく



石(51) おとく



石(48) おとく



SD14(A-B断面)：層削面



SD14(C-D断面)：層削面



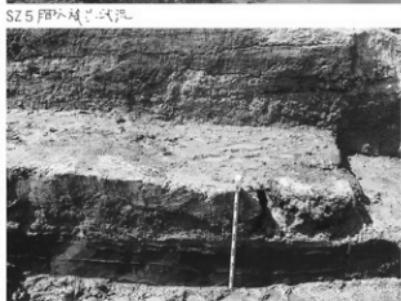
SD15：層削面（左から）



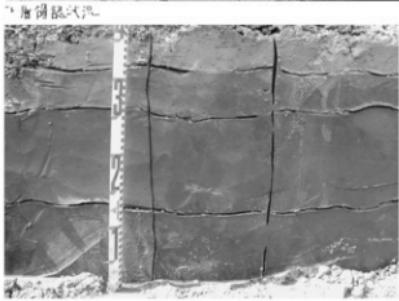
SZ5傾斜堤防：堆積物



・傾斜堤防



・傾斜堤防：層ブロック埋設位置



・天然砂質公害埋地：層



開墾後の：E-E 退路



4



7



5



10



6



9



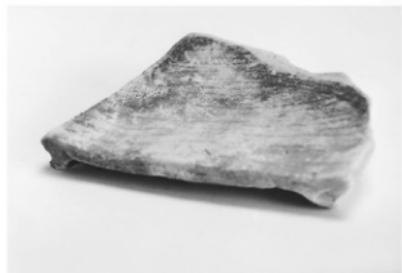
6



11



16



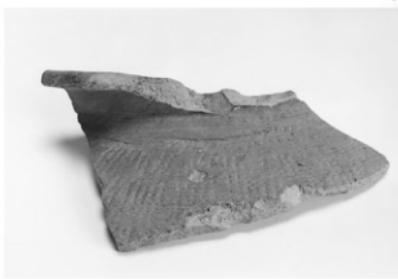
14



16



15



19



17



21



22



33



32



34



36



37



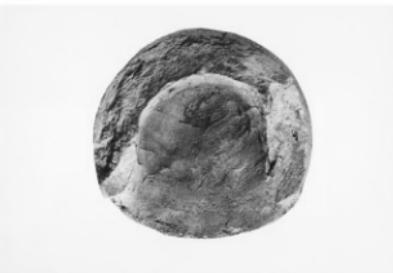
38



38



39



39



40



41



43



46



45



47

卷之二 通鑑(4)



50



50

50



48

49



51



58



71



72



73



74

馬家浜遺跡(6)



84



87



88



89



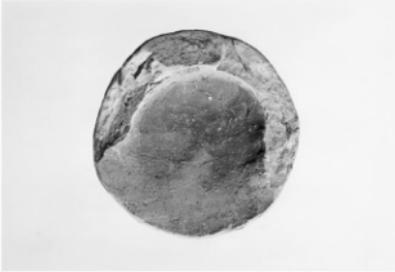
91



92



90



90



93



97



94



98



95



99



96



99



100



106



101



107



102



108



105



109



111



112



113



114



115



116



117



128



154



129



159



130



160



161



163



163



164



167



165



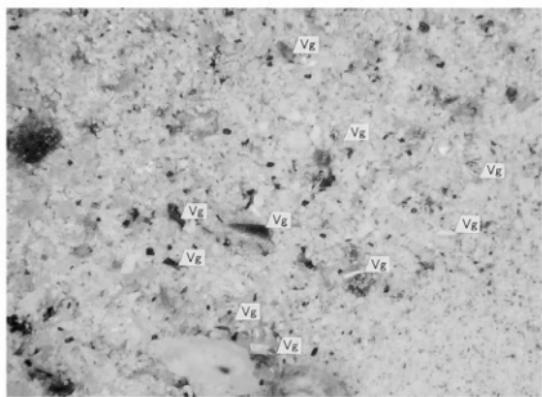
169



166



162

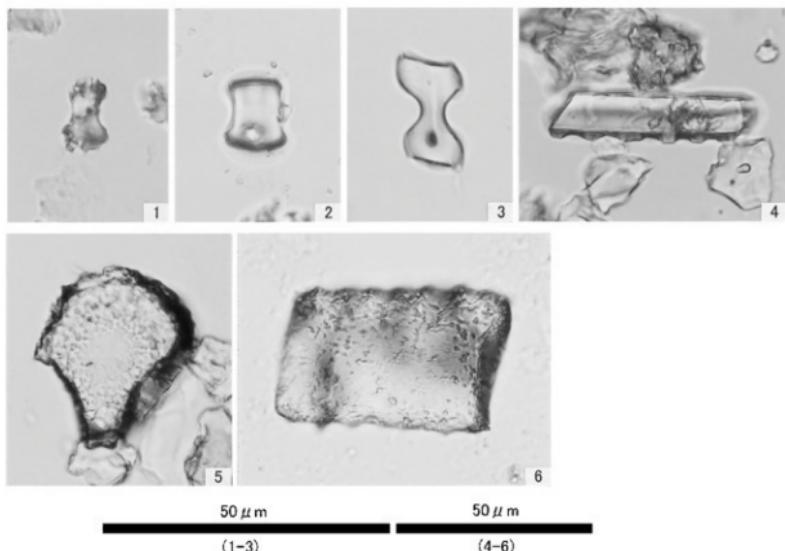


1. 砂分中の火山ガラス(試料番号3)

Vg:火山ガラス

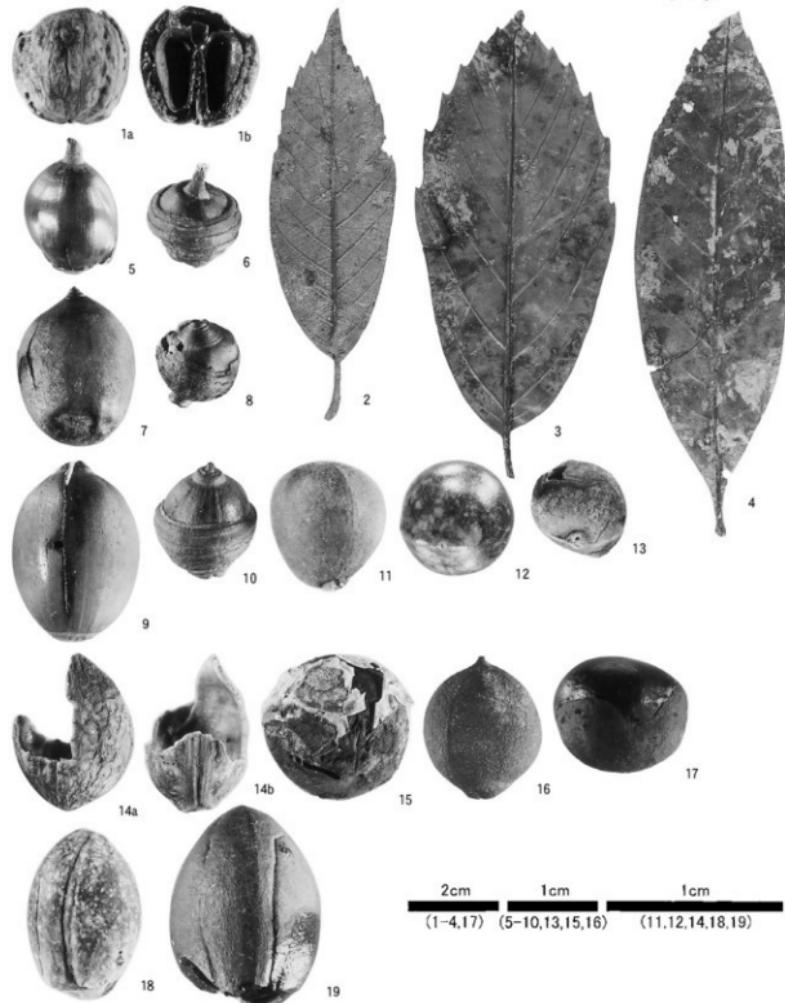
1mm

テフラ



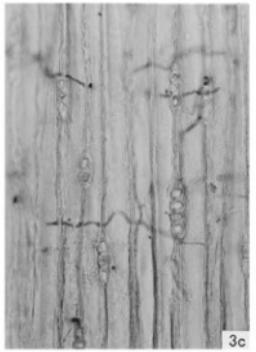
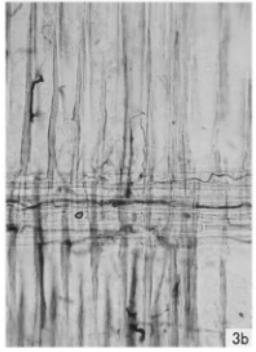
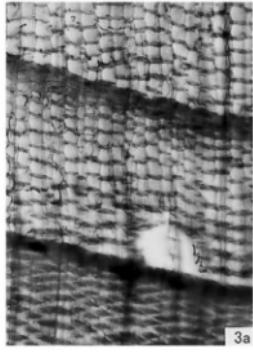
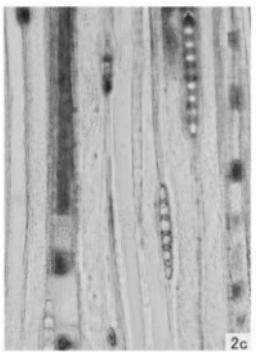
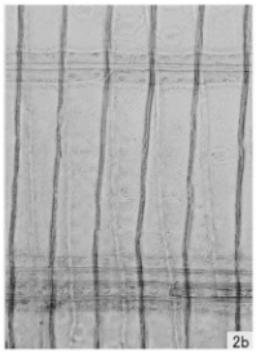
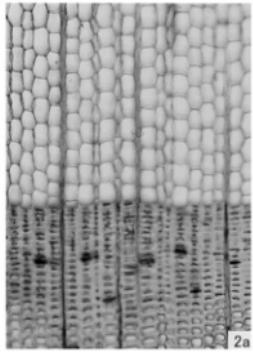
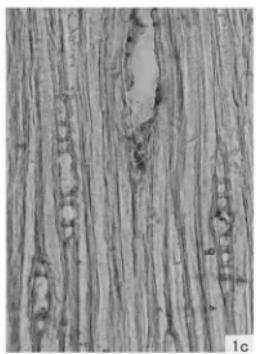
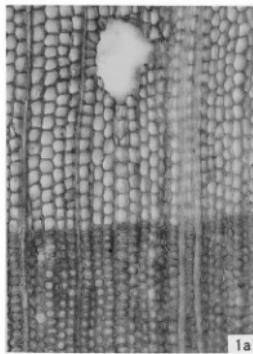
1. イネ属短細胞珪酸体(試料番号2)
3. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号2)
5. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号2)

2. ネザサ節短細胞珪酸体(試料番号4)
4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号4)
6. ネザサ節機動細胞珪酸体(試料番号4)



1. オニグルミ 桜(頂部破損)(C8 下層腐植土層)
2. イティガシ 果(葉試料)
3. アラカシ近似種 葉(葉試料)
4. ツクバネガシ近似種 葉(葉試料)
5. イティガシ 果実(C8 下層腐植土層)
6. イティガシ 果実(C8 下層腐植土層)
7. アラカシ 果実(C8 下層腐植土層)
8. アラカシ 果実(C8 下層腐植土層)
9. アカガシ種殻 果実(C8 下層腐植土層)
10. アカガシ種殻 果実(C8 下層腐植土層)
11. ムクノキ 桜(C8 下層腐植土層)
12. クスノキ科 A 種子(C8 下層腐植土層)
13. クスノキ科 B 種子(C8 下層腐植土層)
14. バクチノキ 桜(C8 下層腐植土層)
15. ムクロジ 種子(C8 下層腐植土層)
16. トチノキ 果実(C8 下層腐植土層)
17. トチノキ 種子(C8 下層腐植土層)
18. エゴノキ 種子(C8 下層腐植土層)
19. ハクサンボク 種子(C8 下層腐植土層)

参考資料追加



1. マツ属複維管束亞属(試料番号12)

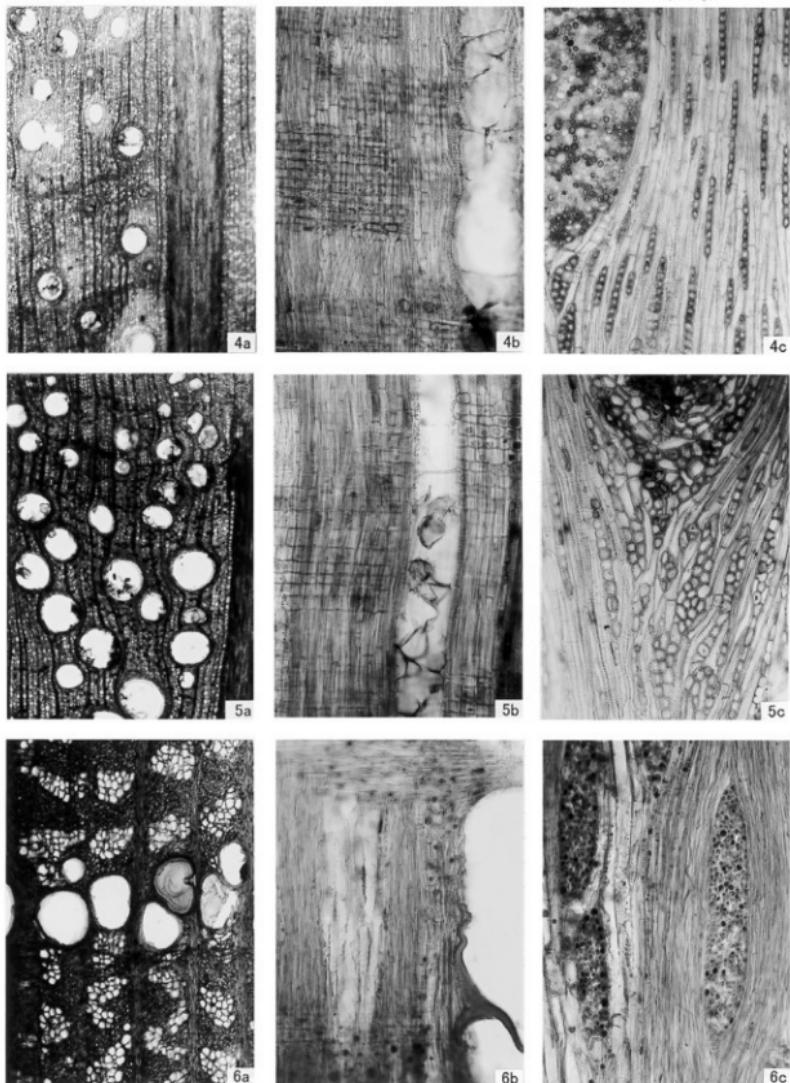
2. スギ(試料番号23)

3. ヒノキ(試料番号19)

a:木口, b:柾目, c:板目

— 200 μ m:a

— 100 μ m:b,c

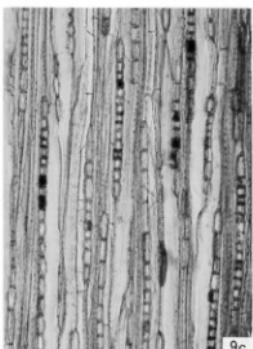
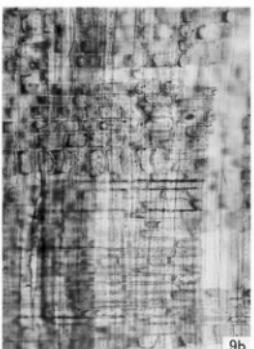
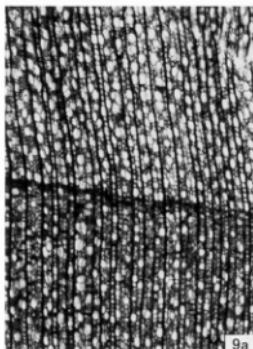
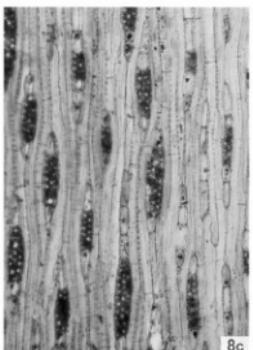
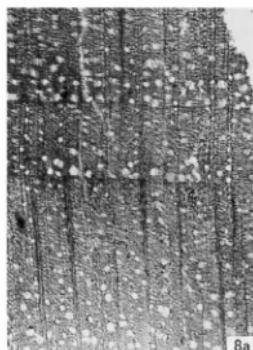
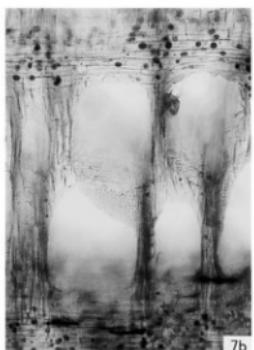
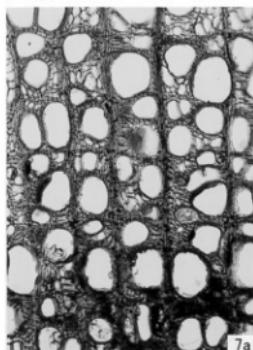


4. コナラ属アカガシ亜属(試料番号9)
 5. コナラ属アカガシ亜属<根材>(試料番号5)
 6. ケヤキ(試料番号11)

a:木口, b:径目, c:板目

六材 (2)

■ 200 μm:a
 ■ 200 μm:b,c



7. ケヤキ<根材>(試料番号18)

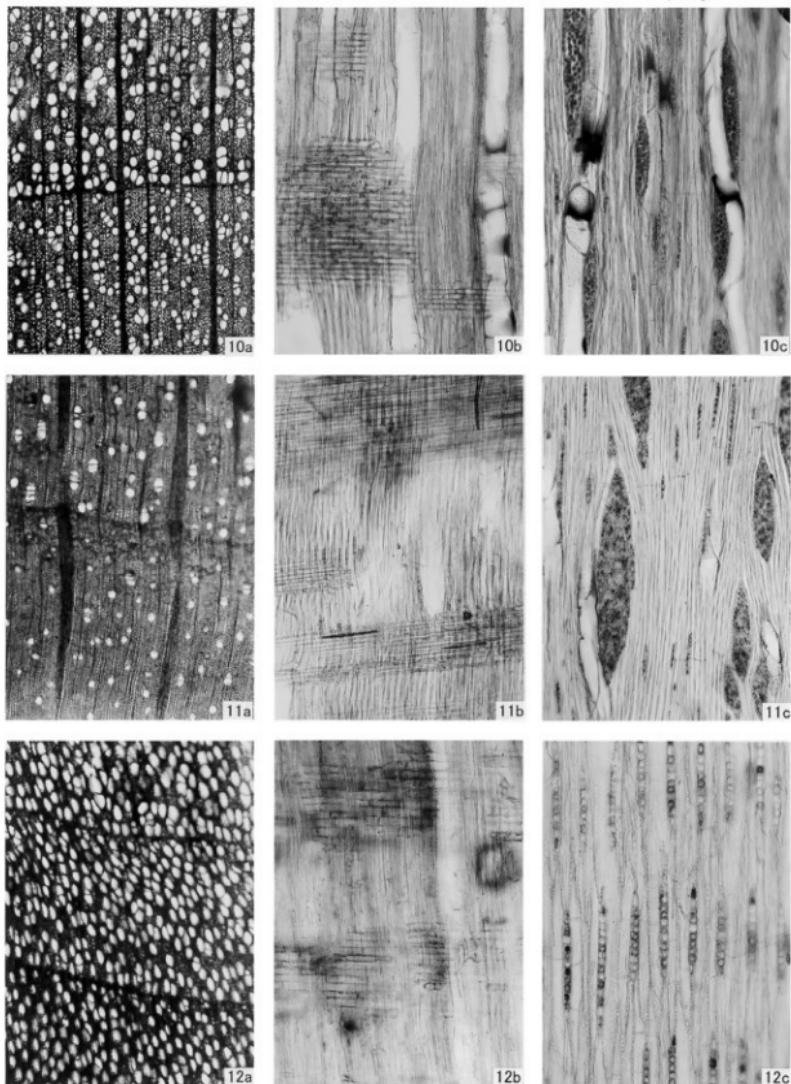
8. ツバキ属(試料番号24)

9. サカキ(試料番号7)

a:木口, b:柾目, c:板目

六付 (3)

— 200 μm:a
— 200 μm:b,c



10. サクラ属(試料番号6)

11. カエデ属(試料番号8)

12. トチノキ(試料番号10)

a:木口, b:柾目, c:板目

六四 (4)

■ 200 μm:a
■ 200 μm:b,c



試料写真



軟X線写真

10cm

報告書抄録

| ふりがな | さんびきだいせきはつくつちょうさほうこく | | | | | | | |
|-------------------|--|-------------------------------|---------------------------|--|--------------------|--------------------------|------|--------------------------------|
| 書名 | 三疋田遺跡発掘調査報告 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 三重県埋蔵文化財調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 292 | | | | | | | |
| 編著者名 | 伊藤文彦 | | | | | | | |
| 編集機関 | 三重県埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2008年 2月 28日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コ一ド 市町村 | 北緯 遺跡番号 | 東經 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 | |
| さんびきだいせき 三疋田遺跡 | たきちょう 多気町 おおあざ 大字 さんびきだ 三疋田 | 441 | a309 | 34° 30' 2" | 136° 31' 36" | 平成18年 5月16日～ 8月23日 | 1200 | 平成18年度道 路改築事業(一) 勢和兄国松阪線 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 三疋田遺跡 | 集落跡 寺院跡 | 弥生時代 古墳～奈良時代 平安時代 中世 | 水田跡 自然流路 溝 棚田状水田 | 縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器 軒丸瓦(蓮華文・巴文) 軒平瓦(唐草文) 陶器山茶碗 (62.1kg) | | | | |
| 要約 | 三疋田遺跡は櫛田川右岸に展開する河岸段丘の段丘面上に位置し、付近は条里制遺構がよく遺存する地域として知られている。本調査では、時期不明の棚田状水田遺構や平安時代後期の溝、平安時代以前の旧流路を検出した。このうち平安時代後期の溝からは蓮華文軒丸瓦や巴文軒丸瓦をはじめ、瓦が一定量出土しており、付近に寺院など瓦葺建物が存在したことを想定させる。旧流路は平安時代までには埋没していると考えられるが、旧流路中からは古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器・土師器が出土しており、付近に当該時期の集落の存在を想定させる。なおこの旧流路の下層では耕作土と考えられる層位が検出された。遺物の出土はなく時期は不明であるが、弥生時代から古墳時代の水田の可能性もある。 | | | | | | | |

三重県埋蔵文化財調査報告書 292

三疋田遺跡発掘調査報告

2008（平成20）年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 (有)山文印刷
